
弟子による師匠捕獲作戦

希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟子による師匠捕獲作戦

【Nコード】

N7721W

【作者名】

希望

【あらすじ】

十四歳なのに魔法は最上級、武術も達人並…そして四歳年上の弟子を持ったフィアン。「いい加減にしろ！このストーリーカー！」…弟子？のイオは惚れてしまった恋愛興味ゼロの師匠を振り向かせられるのか？これはそんなイオの奮闘記…ではなく、師匠フィアンの物語。

*注*甘くなりません、コメディよりです。

プロローグ

私は物心つく前から聞いた言葉は罵倒や悪口だけだった。

村の人は私を見るといつも石を投げてきた。けれどその石が私に当たったことは一度もない。

生まれた時から無駄に高かった魔力が勝手に石を破裂させるのだ。

しかもそれに加えて剣も達人並みに扱えたことから、村の人は私を恐れ嫌った。

けど私は別にこの力を苦と思っ
てないし村の人から好かれようなんて思っ
たこともない。

私が村を出たのはただ面倒臭かったから、人と関わるのが面倒なら人のいない場所に行けばいいと思っ
た。

「なにコレ」

まさか人に関わりたくないという理由で来た『磁気狂いの森』で最初に会ったのが人間とは思わなかった。

ぼろ雑巾のように傷だらけな人間は男で気を失っていた。

やろうと思えば転送術で村にほっぽりだせたのにそれをさせてくれなかった気まぐれというのは人間の駄目なところの一つだろうとは思っ
た。

だってこの時こんな気まぐれを起こさなかったらこんな面倒臭いことにはなっていなかったはずだから。

ブログ（後書き）

初めての投稿です。

よろしかったら気長にお付き合いよろしくお願いします。

師弟関係

「師匠、今日はどちらに行くんですか？」

外へ出るための扉に手を掛けたところで室内に澄み渡る声がした。

「ギルド」

それに対して私は少し低めの声で返すと再び声が聞こえてくる。

「お供します」

気づけば目の前に居た男に内心驚く。

目の前でニコニコしている美形の男の名は『イオ』。自称、私『フイアンの弟子』。

半年前にこの森で見つけて気まぐれに助けてやったらいつの間にか師匠と呼ばれるようになっていた。

四歳も年上の相手に、だ。

「勝手にしろ」

「はい」

そして、こんな奇妙な関係ができてしまった。

端から見れば異様な光景だろう。十四歳の子供に一八歳の大人が敬

語を使っているのだから。

ギルドへ行くたびに妙な視線を向けられる事を思い出し、ため息をついた。

「師匠？どうかしたんですか？」

イオは何も知らず呑気でいいな。その口を縫ってやろうか？

「何でもない。それよりこの際に聞きたいことがある」

「何ですか？」

イオは首を傾げる。男の癖に可愛いと思ったんだけど…、首をへし折りたい。

「お前、いつまでここにいてるつもりだ？もう怪我なんかとくに完治しているだろう。それに半年前よりかは強くもなっているはずだが」

そう、私は怪我を治して貰ったら出て行ってもらったつもりだった。

なのに怪我が治ったら強くなりたいと言ったから暇つぶしに修行に付き合った。

「…惚れた人ができたんですよ」

イオは顔を少しだけ朱く染めるとそう言った。

なるほど、それならここにいたいというのも納得できる。

相手は大方ギルドの受付嬢だろう。

「そうか、なら相手を落とすまでここにいていいぞ。他人の恋を邪魔しようとは思わん」

私がそう言うといオは口元をひくつかせた。

「師匠…、俺の気持ちに気づかないんですか？」

イオは少し悲しめにしかどこか妖艶な雰囲気を漂わせ聞いてきた。

「？気づいてるぞ、どうせギルドの受付嬢だろう。彼女はかなりの美人だから落とすのには時間が掛かるだろう。気長に行け」

「…もういいです」

イオは肩を落とした。しまった…、相手はギルド仲間のメアリーだったのか？

「すまなかった、まさか…な」

「師匠…」

「メアリーは可愛いから気長に行け！」

「ははは…、さーすが師ショー。期待を裏切る回答ありがとうございます」

何故かこの会話だけで酷くやつれたイオはドアを手に掛けて外に出

た。

「何を言っているのかさっぱり分からんができる限り協力しよう！」

正直、いつまでも居られると困るからな。早くくっついて貰おう。

師弟関係（後書き）

フィアンが十四歳に見えない…。

ギルドへと向かう途中で（改）

私は家を出てからギルド本部のある街道を歩いて数分、違和感に気づいた。

「…イオ」

「…はい」

明らかに多数の人の気配がする。私とイオはゆっくりと足を止める。

「…今すぐここを焦土にしようか」

私は右手に魔力を集めるがイオによって静止される。

「やめて下さい。それより山賊ですかね」

「めんどい…まあ遊ぶか」

私が言い切るか言い切らないかの瞬間で山賊が茂みから姿を現す。その数は八人。

全員…なんとゆうか…まあ汚らしいおっさん共である。

「小娘に色男！！金目のもん、全部置いていきやがれ！！」

先頭に立つおっさんが息を荒立てて言う。聞こえてるから、そんなに声大きくしなくても聞こえてるから。

しかしこの場合はどう切り抜けようか…殺す？いいね、殺し方は…
殴る、あんなおっさんに触れたくない。んゝ蹴りも一緒か。…武器
持ってたねえー…。

となれば魔法か…。

「おっさん達に選択肢を与えてやろう、今ここで死ぬか金を置いて
命乞いをするかだ。…ああとこの二つを選ぶという選択肢もある
な。さあ、どちらを選ぶ？」

私はせめてもの情けで選択肢を与えてやった。理由は単純明快、私
の好きな本の作者である〇〇先生が言った名言の中に『武士の情け』
というものがあるからだ。

「な、舐めんじゃねえぞ！！この餓鬼いいい！！」

しかしおっさん共は迷い無く最初の選択肢を選んだ。

私はため息をつくと右手を前に出し、無詠唱で大きな炎の塊を出す。

炎は目の前のおっさん共を容赦なく襲い消し炭にする。

…あーあ、御愁傷サマ。

「じゃあイオ、行こうか」

「…せめて弔いでもしてやりませんか？」

弔い…？あ、埋めるってことか。何で？

「別にかまわんけど」

「じゃあ埋めてきます」

「では行きましょうか」

弔いというのが終わったらしい、全く余計な時間を食ってしまったではないか。

「おう」

まあいいか、なんかわかんないけどさっきと違って胸のモヤモヤが消えた気がする。何でだろ？

「師匠…？何で笑ってるんです？」

イオの言葉が耳に透る。無駄な美声だな、おい。

しかし、笑っているか…。んな馬鹿なこと。…あり？口角が上がってる。

「笑ってる…」

「…自分でそんな可愛い顔作つといて自覚なかったんですか」

「変だな、イオ。何か涙まででてくるんだが…」

「えええ！…ちょ、何があつたんですか！？」

「…別に、ただ座ってただけ」

「…ああもう！」

突然イオが私の体に手をまわし、抱き寄せる。

なんだこいつ？何がしたいんだ？

「…何のつもりだ」

「いえ、こうすると落ち着くかなと思って」

私は子供か。…子供だな。

まあ…確かに涙は止まった、自分の体ながらどうなっているのかさっぱりだ。

「すまないな、イオ」

「いえ、別に」

イオから体を離すと、満面の笑顔のイオがいた。

何で？

「なんで笑ってる？」

「…少々嬉しいことがありました」

この短時間にか！何だ、何があった！

「まあ本人は気づいていないようなので結構です」

そういつてイオは顔を近づけてきた。

思いのほか驚いたので思わず蹴り飛ばしてしまった。

そしてなぜかわかんないけど顔が赤くなっていた。

そのままイオと目を合わせるのは気まずく感じたので、私はダッシ

ユでギルド本部に向かった。

ギルドへと向かう途中で（改）（後書き）

大幅に物語変えてしまいました…。

ギルド

「ぜえ…ぜえ…こん…にちは…」

さすがに全力で五分間の疾走は疲れた。

世間では最強と言われようと十四歳なんだぞ。

「こんにちはー」

そして何故！イオがいる！？蹴りをした後、痛みに悶えていたじゃないか。仮に走ったとしても全力の私に追いついて息切れ一つもなしってどうゆうことだよ！

あ、転送術か…。

私も使えばよかった、頭が回らなかったぜ。ははっ。

「こんにちはあ。久しぶりい、イオさん。あと、フィアンさん」

なんかとってつけた感があるんだが…。受付嬢。

「お久しぶりです」

「…ああ」

気のせいだろうか、さっきからやけに受付嬢に睨まれている感じがするんだが。

イオを見るときはキラキラしているのにな。

「…あのぉ、フィアンさん。少し二人でお話したいことがあるんですけどぉ。いいですよねぇ」

いや、それ聞いてない聞いてない。ほぼ脅しに近い言い回しだよ。

「いいけど」

「じゃあ、少し裏に…。イオさぁん、すこしお借りしまぁす」

ぐいぐい引つ張る腕に容赦がない。

おい、二十八歳。十四歳の腕を何折ろうとしてんだ。

あとイオに掛ける声がやけに甘ったるいんだが、私にはこれが。

逆にその腕へし折ってやろうか？

腕が少し痛んできたところでようやく離された。

「ふう…いい？単刀直入に言うわ。あなた、今すぐイオさんの前から姿を消してくれないかしら？」

…いきなり何を言い出すのかと思えば、やったわ！！そんなこと！！

今までに何回も何回も引つ付いてくるあいつを竜の谷へ突き落としたりマグマの中に逃げたり時には魔界や神界にも行って撒こうと頑張ったわ！！

けどあいつは必ず次の日には目の前にいんだよ！

あれ？考えるとあいつって何者…？

「答えないとなると嫌って事ね。しょうがないわね、飯にもイオさんの引っ付き虫だから手荒な真似はしたくなかったんだけど」

待て待て。話がなんか進んでるぞ。つーか引っ付き虫って誰がだよ。あいつだろ、私はどっちかってーと引っ付かれ虫なんだが。

「出てきなさい！！私の召還獣、『ユニコーン』！」

受付譲の下に複雑な魔方陣が現れるとその中から一本角の白い馬が現れた。

やばい、可愛い

「行きなさい、ユニコーン！」

受付譲の命令に従ってユニコーンは私の方へ向かってきた。

そして受付譲はもはや勝ちを確信しているのか何処かへ消えていった。

このままだと体当たりされちゃうな、しょうがない避けるのも面倒いし。

「…ユニコーンの肉、おいしいといいな」

キキイイイ！！

ユニコーンが止まり冷や汗を流す。

あり？心の声が漏れちまった？

突っ込んできたところを軽くウェルダンで焼き上げようと思ったのに。

【ごめんなさい、食べないで下さい。いやマジでその手に集結して魔力やめてください】

およ？どこからか声が聞こえるぞ。パターンのなのと状況から考えてユニコーンだな。

【正解です。突進なんてしてすみませんでした】

うむ。素直に謝ったから許そうなんていうとも思ってたか？

私の視界に入った時点でお前の死は確定じゃ。ましてや突進だぜ。

【そ、そんな。滅相もないですぜ！お代官様！！】

使い方上手かったから九十点。

見逃してやるが一つだけ条件がある。

【そ、それは…？】

なあに、簡単さ。それはね…

【お主も悪よのう、越後屋】

いえいえ、お代官様ほどでは。…ってあれ？配役変わってね。
こほんっ！では頼んだぞ。

【はい！】

よし、これで受付譲のことは解決だ。

(きゃ ああああああ あああ!!!!)

遠くで受付嬢の悲鳴が聞こえるな。

これにて一件落着。

ギルド（後書き）

受付譲はユニコーン召還した後、イオの所に向かう途中でしたがまさかのユニコーンに襲われるでした。

ちなみに作戦とは名づけて『受付譲を引退して貰おうぜ作戦』

？受付譲を気絶させ、酒瓶を回りに置く。

？あらかじめ呼んでおいたギルドマスターに「職務放棄して飲酒」

した受付譲を見せる。「呼んだのは人間化したフィアンの魔力の塊」

？激怒したギルドマスターは受付譲をくびにする。

これ実際成功して受付譲はくびになりました。

ギルド仲間

私は受付嬢がくびになったことをギルドマスターから聞くと、ギルド内に戻った。

するとギルド内中央に女性が集まっていた。中央にはイオが少し困ったように佇んでいる。

毎回の出来事なので流石に慣れたが、何故女性が集まるのかは分からない。

なのでこの前女性の一人に聞いてみたことがある。

『だってイオ君って凄くかつこいいじゃない！さらさらの黒髪に射抜かれるような澄んだ黒い瞳！そして何よりもあの容貌！！整った顔にスタイル抜群！文句なしじゃない』

…と言う事らしい。

あ、ついでに私のことも言われていたな。

『なのに、貴方みたいな平凡…じゃないけど。みたいな子になんてイオ君が引っ付いているのか分からないわ。髪は銀色で綺麗だけどばさばさだし碧い瞳は…まいいわね。けど何よりも顔が普通よ』

うん。確かに髪は手入れなんてしたことないし別にいいんだけど顔は普通の何が悪い。普通が一番だろうが。むしろ顔まで普通じゃなかったら泣いてるよ。

そんなこと考えてると不意に後ろから声が降ってきた。

「あら、久しぶりね。フィアン」

振り返るとそこにはギルド仲間のメアリーがいた。

「メアリー、久しいな。相変わらず元気そうで何よりだ」

「ふふっ、ねえそれよりイオはどこ？少し話したいことがあるの」

「イオ？ならあそこだ」

私がイオの方向に指差すとメアリーは呆れたように口を開けた。

「はあ、何してるのあのボンクラ。作戦はどうなったのよ」

作戦？何を企んでいるんだ…ま、まさか！そうだ、イオはメアリーが好きなんだった。

ここから推測するにイオは今日告白したのか！

間違いない！きつと作戦というのはでえとというものを応用したんだろう。

よくやった、イオ。

「おめでとう！メアリー。根本から腐っているような奴だがどうかよろしく頼む！」

途端にメアリーが口を引きつらせ、大きなため息をついた。

「…また盛大な勘違いね」

ため息とともに小声で何か呟いたが聞こえなかった。

これで馬鹿にストーカーされなくなる。

「もういいわ、弁解するのも面倒くさいし。そんなことよりフィア
ン、今日ギルド活動がないんだって。なんか受付讓がくびになった
みたいで」

あ、やっぱりか。まあ受付讓がやめたらギルドは機能が難しいから
な。

「ん、分かった。じゃ、今日はもう帰るよ」

「そう、じゃあね。…あと忠告、恋愛に少しは興味持ちなさい」

いきなり何を？…。恋愛って異性交遊の一環のことか？

「メアリーは私にあんなどろどろで他人を蹴落とし自らの幸せのみ
を手に入れようと殺しまでも平気で言うジョンになれというのか？」

「何それ…ジョンって誰よ」

「ジョンは〇〇先生の『恋は盲目』の主人公だよ」

「あんな下らないの参考にしないの、つかまだ読んでたのね。い
い？恋愛はもつと単純に考えるものよ」

メアリーはそう言つとさつさと去っていった。

恋愛はもつと単純…？

ジョンだつて単純に友のために魔王と戦つたんだっけ、そうか。分かつたよ。

恋愛とは魔王と単純に殺し合いをすることか。

うん。面白そうかも。

「イオ！！」

私はその名を呼ぶとイオは瞬時に目の前に来た。

「お呼びですか？」

「ああ、今から魔王と恋愛をしに行くぞ！！」

その瞬間イオはピシッと固まり、崩れ落ちた。

ギルド仲間（後書き）

メアリーは十七歳。

フィアンを妹のように思っています。

転送術

「全くもつ…。びつくりさせないで下さい…」

あの後、放心状態となったイオに熱い拳を一発入れた後に凄じ剣幕で質問されまくったからボディブローでおとなしくさせてからメアリーとの会話のことを話すと今の台詞が出てきた。

「びつくりさせた気は少しもないんだが。とゆうことで魔王と恋愛しに行くぞ」

「師匠、恋愛っていうのは……もういいです。その内分らせてあげますから」

イオの口元が僅かに上がったように見えたがまあいいか。

それより魔王と言えば魔界…だよな。

けど魔界への行き方はあまり好きじゃないんだよなあ、前にやったのは空間に魔力を捻じ込んで開けた荒業だし副作用でしばらく頭痛取れなかったし。

しょうがない、正規の手続きを踏むか。

「イオ、魔界監査局に向かうぞ」

「あれ、前みたいな荒業はしないんですね。頭痛で唸ってる師匠を見たいのに」

「黙れ、あれはお前が追ってくるからだ。けど今回は急ぐ必要もないからな」

そういえば、捻じ曲げた空間は放置したままだったな。

かなり大きく開けたし、一個師団くらいなら簡単に通れそうだな。

「分かりました。では転送術で…」

「分かった」

私はあまり転送術は好きじゃないからイオと一緒に送って貰おうと考えた。

転送術は相手に触れることで目的地と一緒にに行けるらしい。

初めてなのでどう触れていいか分からず、とりあえず抱きついた。

「ちょ…！師匠…！」

見上げると顔を朱く染めたイオが焦っている。

何してるんだ？こいつは。さっさと転送しろ。

そんな思いが通じたのか体が宙に浮く感じがしたと思ったらいきなり景色が変わった。

「到ちや…。？」

魔界監査局についたのかと思いきや目の前にはいかにも貴族の住ん

でいそうな大きなお屋敷が。

「どういうことだ？イオ、説明しろ」

「…すみません、動揺して座標指定し忘れてました」

はあ…何してるんだよ、本当。

「まあ着いてしまったものはしょうがない。ここが何処かを確認しようか」

「はい、目の前のお屋敷を訪ねてみましょうか」

「そうだな、とその前に…」

私は無詠唱で右手に炎を発生させるとイオに向けて投げつけた。この間およそ0.3秒。

しかしイオは预期していたように華麗に避ける。

「チッ！腕を上げたな」

「恐れいります」

私は炎が当たらなかったことに若干不機嫌さをかもし出しながら屋敷を訪ねようと屋敷の方へ向き直った。

燃えていた。

「は？」

屋敷がごうごうと大きな炎に包まれ、燃えているのだ。

状況がいまいち…、何故いきなり屋敷が…。

あ！私…さっきイオに放った炎…消したっけ？

け、消していないiiiiiiiiiiii！！

まさか！あれは私のせいかなぁあ！

「や、やばい！！消炎！！」

急いで屋敷を襲う炎を消す。

しかし、その場に残ったのは半焼状態の屋敷だった。

「な、何ですのー！！！」

直後、後ろに綺麗な桃色のドレスを着た金髪カールの女性が甲高い声を上げた。

まさか…この屋敷の…

「私の家が半焼してますわー！！！！」

私の勘って当たって欲しくない時によく当たるんだよね。

女性はどうかやらのこの屋敷の住人みたいです。

転送術（後書き）

火事のとぎ、屋敷には誰もいませんでした。

吸血鬼ならぬ吸魔鬼

「これは一体どういうことなのです!？」

金髪美人は私たちの存在に気づくと、詰め寄ってきた。

家の半焼が結構きたらしい。…当たり前か。

「すまない。燃やしてしまった」

ここは素直に謝ろうと思う。

「こいつが」

なんて思うとも思ったか!私はイオに指差す。

炎が当たらなかった鬱憤をここで晴らそう、けどこいつ少し苦笑しただけであんまり答えてないな。

「…すみません。魔法の練習をこの子に教えていたらこの子が上手くできなかったものでお手本を見せようとしたらつい…許してくださいますか?」

イオは金髪に近寄り手を優しく取りながら嘘八百を並べたてる……
ってちよつと待てこら。

堂々と何いってんだ、こいつ。確かに端から見ればこの嘘は一番本当っぽいだろう。

だが一応十四歳にもプライドというものは存在する。

イオ、後で少しお話しようか。

「そ、そんな…許せるわけ…」

金髪は頬を真っ赤に染め上げながら後退する。

そうだ、許すな。許せないと行って殴ってやれ。できればあの世に届くくらいの威力で。

「…ありますわ」

な、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！

何故許す！？あんたの家半焼したんだよ、私のせいで！！

あ、あれ…じゃあ許せてもらえてオーケーなのか…？

「それは良かったです。ところでここってどこでしょうかね？」

「ここは魔界コロニー32、吸魔鬼族の領地ですわ」

え？今なんて言った…魔界？

「魔界…ですか、分かりました。ありがとうございます」

おいおい、魔界って…魔王がいるじゃん！この際なんで次元の違う魔界に転送術で来れたかわかんないけど結果オーライ。

「イオ！よくやった、魔王の所に行くぞ」

「…あら、貴方たち魔王様のところへ行くんですの？謁見の約束は？してありますの？」

「謁見の約束…してないが、しないと駄目なのか？」

「ええ、じゃないと怒られますわ」

「ふむ、どうしようか」

謁見なんてせずに押し入るか魔王城吹き飛ばして魔王をでてこさせるか…どっちにしろ簡単だけどそれじゃあ○○先生の教えにそむいてしまう。ここは『正々堂々会って正々堂々不意打ち』に従おう。

「私を取り付けて差し上げましょうか？」

「いいのか？なら頼む」

「承りましたわ、その間私の家にでもいてくれて構いませんわ」

「え？けど」

「あれは数ある内の別荘の一つですから問題ありません」

「じゃあなんであんなに怒ったんだよ、というツツコミは心の中にしまっておこう。」

「じゃあよろしく」

「私の本邸はすぐ近くにあります。ほら」

金髪は暗くて何も見えない方向を指差す、ふざけてんのか。

「家にご招待しますわ」

金髪はイオの腕に巻きつく、こうゆづのを世間では積極的というらしい。メアリー情報だ。

前にあんたもやってみなさいといわれたが断固拒否する。

他人に腕を預けるなんて腕の一本無くす気が。

「…そういえば貴方たちの名前と種族は何ですか？私は吸魔鬼のアリエラですわ」

へえええ、吸魔鬼なんだ。上位ランクの魔族で以外に血が上手いらしい、じゅるり。

「人間、フィアン。でこっちがイオ」

「まあ人間でしたのね。イオ様にフィアンちゃん…フィーちゃんね」

待てコラ、誰がフィーちゃんだ。その口、首ごと消し飛ばすぞ。

ついでにイオ、笑い止めようとしても無駄だから。肩震えてるし、笑い声漏れてるし。

「じ、じゃあ行きましょうか…。フィーちゃん…」

イオが顔を背けたまま手を指しのばす…すっごい笑ってる。

流石に我慢の限界が来たようだよ、ジョンの生みの親の〇〇先生…。
今だけ先生の教えである『堪えてみたらいいんじゃないかね』を破ってます。
まいます。

私はイオの手を握り碎き回復妨害の魔法を掛けた後、頭を力いっばい地面に叩きつけた。

もちろん、アリエラにはちょっとだけ注意をしたよ。

注意後涙ぐんでいたけどね

吸血鬼ならぬ吸魔鬼（後書き）

魔族と人間は仲いいです。

何でも魔王と国王が飲み友なんだとか。

吸魔鬼とはネーミングで分かるかもしれないがそのまま魔力を吸う魔族のことです。

吸魔鬼の兄

私たちは暗闇の中を歩いて数分、大きな屋敷の前に着いた。

で、デカイ…。デカスギル。

「ここが我が家ですわ、お入りになって」

アリエラが指を軽く振ると重厚な扉がゆっくりと開く。

その中は少し薄暗かったが豪華といえる造りをしていた。

私たちは中に入るとアリエラの後を追って大きな広間と思える場所に出た。

「お兄様！ただいま帰りましたわ、客人と婚約者を連れて参りましたの！」

アリエラが叫ぶと、広間の中央にある螺旋階段からドタドタと紫色の男が駆け下りてきた。

え？いつの間に婚約したんだろう？…積極的は凄い。会ったばかりですぐ婚約とかすっ飛ばしすぎじゃね？

「アリエラさん？いつの間にそんな話に…」

イオが何か抗議しようとアリエラに話掛けるがアリエラはニッコリ笑うだけで何も話さない。

なんとゆうか…有無を言わさないって感じだな。

「アリエラ！本当か！お前にふさわしくない奴なら食い潰すぞ！！」
いつの間にか降りてきていた紫の男はイオに詰め寄る。

「お兄様、この方はイオといいますわ。そしてこちらがフィアン様ですわ」

呼び方変わったな、変な方向に。注意が利きすぎたようだからもう一度注意し直しとくか。

「イオ…か。ディアンだ。可愛い妹をよろしく頼む」

切り替え早っ！！さっきまでといってることが180度方向転換してるんだけど！

「あの…俺は婚約者じゃ…」

「イオ！私少しお話がありますの！客間に行きましょう！」

イオの言葉をアリエラは遮ると物凄い勢いで奥の扉に入ってしまった。

一瞬の出来事だった。

「…何だったんだ？」

私が聞きたいよ、ディアンさん。

「まあ、婚約者ともなれば話はいろいろあるか」

あのイオが婚約…ということはやっと私の前からいなくなるのか。
じゃあディアンさん、ちょうどいいし話しておくと思いますか。

「ディアンさん、お話があるんですけど」

「ん？お前は…フィアン様か、何か？」

お前もか、よしこいつも注意しておこう。

「実は、イオと私は旅先で偶然知り合って共にいるだけの赤の他人なんです。…子供である私を心配して一緒にいてくれてるんです。しかしイオに婚約者ができたとなると二人の幸せのためにも余計な不安要素である私は姿を消した方がいいと思うんです。つまりイオをここで引き取って貰えませんか？」

あくまでイオの幸せというところを強調したほうが同情を買える。

それにイオとの約束は守れて、私は一人生活をエンジョイすることができるようになる。素敵なハッピーエンドじゃないか。私が。

「そういうことなら別にいいが、お前はどこに行くつもりだ？」

ふむ、どこに…と来たか。家はギルドから借りてるだけだし仕事以外は帰れないから却下。ギルドは論外。

…考えてみたらいくとこなんて無いじゃないか。

「行くあてないのか？」

ディアンが私の顔を覗き込む。反射的に手が出そうになったが何とか押しとどめる。

「…別にどこだっていいだろ。私の勝手だ…！」

自分でも驚くほどの冷たい声が出た。何で？別に怒ってるわけじゃないのに。

「…すまない。だが無理して出て行こうとしなくてもいいんだぞ、お前はまだ子供なのだから」

「…子供？私が、子供。ははっ確かに子供かもしれないね、普通じゃない子供。」

もしも魔力がなくて武術なんかできもしなかったら子供に…普通になれてた？

顔も知らない両親と一緒に暮らせてた？

「子供…か、私も普通の子供になりたかったよ」

きつと聞こえてはいないだろう、声は掠れて出て来なかった。

ふと、私の手を暖かいものが包んだ。

「嫌なことを思い出させてしまったようだ、謝ろう。お前は体は子供なのに精神は大人びて過ぎている。だがもっと大人を頼れ、誰がなんと言おうと今のお前は子供なのだから」

紫の瞳が真剣にこちらを見つめる。

「…ぷっ、あはは。そうだね、そうしようかな」

自然と笑いが零れる。なんか私らしくなかった。

そっだよ、こんな私は私じゃないよ。普通なんか関係ない。

「ありがとう…」

私は私なんだから。

「っっ！…！」

途端にディ안의顔が赤く染まる。

ありがと、もう少し他人を信じてみようかな。

気づいたら私は笑っていた。

吸魔鬼の兄（後書き）

少しシリ阿斯入っちゃいましてごめんなさい。

衣食住確保

私とディアンの間で一悶着あった後、しばらくしてイオとアリエラが奥から出てきた。

「話をついたのか？」

ディアンが二人にたずねる。

「まあそのことは後でお話しますわ。お二人も何かありましたの？」

「?…、何で？」

「いえ。お兄様が少し顔を赤くしているの。」

「…気にするな」

そういえばあの後からずっと顔が赤いな。少し迷惑を掛けてしまったから気苦労か？

「では、私今から魔王様のところへ行つて謁見の申し込みをしますわ。その後にお兄様とフィアン様にお話しますわ」

「ああ、頼む」

頭から抜け落ちていたが魔界に来たのは魔王に会つたためだということとを忘れていた。

「行つてまいります」

アリエラはコウモリのような羽を出現させると天窓を突き破って羽ばたいていった。

何故天窓を破った？ドアから出るよ。

地味に落ちてくる破片が痛い。

「さて…では二人には部屋でも案内しようか、アリエラから念話でたいていの話は聞いている。好きなだけ泊まっていくといい」

「そうか。では世話になる」

私は二階の右奥に、イオはその隣に案内された。

「好きに使ってくれ、何か困ったことがあっても解決してくれ」

無茶ぶりだな、おい。まあ出来るからいいけど。

私は部屋の中に入ると傍にあるソファに座る、部屋は薄暗くてよく分からない。

だから光魔法を使い、部屋全体を明るくする。

すると豪華な部屋が現れた。なんとゆうかとにかく豪華だ、キラキラしている。

「すごいな…」

思わず感嘆の声を上げてしまう。

少し戸惑ったがふかふかそうなベッドに思い切りダイビングしてみた、密かに懂れていたことだ。

思ったとおりふかふかな感触が身を包む。

しばらくふかふかを堪能していると控えめなノックの音が聞こえてきた。

「どうぞー」

「…師匠、失礼します」

「イオ？」

私は扉の方をみるとイオがいることを確認。

「何か用？」

「…夕食の準備が出来たようです、下行きましょう」

「分かった」

私はベッドから降りるとイオの方に駆け寄ろうと思ったが叶わなかった。

突然足に力が入らなくなりその場に崩れ落ちた。

「あれ？」

「師匠？何してるんです？」

「いや足に力が入らない」

二人の間にしばし沈黙が流れた。そしてイオがくすりと笑う。

「失礼します」

寄ってきたかと思うと横抱きにされた、いきなりで驚いたがまあ仕方ないか。

「すまない」

そう言うといオが大きくため息をつく。

「…こういうところだけはホント無防備でずるいですね」

何でため息をはかれた？ちゃんと言うべきことは言っただが。

それに無防備とは失礼な、いつも背後や気配には気をつけているさ。

「いいから下行かないか？」

「はい」

横抱きのまま下へと向かう階段に向かう途中ディアンに会った。

「…なにしてる？」

「見て分かりませんか？お姫様抱っこですが」

「何故だ？」

「師匠がしてほしいと懇願したからです」

てめ待てこら、懇願した覚えはないし。そもそもこんなこととしてほし
いに関連した言葉すら言っていない。最近おいたが過ぎるよね、イオ。
やっぱり話し合いじゃなくて拳の語り合いでもする？ 一方的な語り
になっちゃうけど。

「じゃあ俺がやる。貸せ」

ディアン、あんた何言い出してんの？

「必要ないです。俺が運びますから」

「俺がやると言っているんだ、未来の弟。おとなしくフィアン様を
わたせ」

「…気持ち悪い呼び方は勘弁してくださいよ」

「だったら寄越せ」

「嫌です、俺のものですから」

…さっきから何やってんの、この二人。つーか私なんか物みたいに
扱われてるのが癪に触るんだけど。ふう…ここは一先ず夕食よりさ
きにやることあるみたいだね。

何か足にも力が入るようになって来たし。

私はイオの手から飛び降り二人に向かっていった。

「二人とも、ちょっとそこ正座しろ」

後から聞いた話だと笑っているのに後ろに雪を纏った般若が見えた
そうな。

衣食住確保（後書き）

フィアンの足に力が入らなくなった理由はいつか出したいと思いま
す（次回あたりに）

師匠はやっぱり強い

「只今帰りましたわ!!」

割れた天井からアリエラが飛び込んでくる。私はそんなアリエラにニツコリと笑いかける。

「お帰りなさい、アリエラ」

その笑顔を見てアリエラはピシッと固まる。

「な、何かありましたの？フィアンさ…」

「嫌だなく、アリエラったら。フィ・ア・ンでしょ？」

「…ごめんなさい」

アリエラがシューンと頂垂れる。可愛いな、おい。

こっちのぼろ雑巾とは大違いだよ。

私は目の前に倒れる二つの人間であつたろうそれを見つめる。

「…で？他人を物みたいに扱っちゃいけないこと、わかりましたか？」

冷やかな目で地面に転がるものに話しかける。

「…す、すみませんでした…ガクッ」

「俺が…悪かった…ドタッ」

うん、分かってくれたようで嬉しいよ。後で飴をあげよう。

「…アリエラ、魔王とのやつどうだった？」

私はさっきとは打って変わって明るい笑顔を作る。

「ビクウウウー！は、はい！…何の滞りも無く約束を取り付けられたであります！！閣下！！」

…何、その口調…。少し驚いちゃったのかな？

にしてもこいつはいつになったら私のことを普通に呼ぶんだろ？もう注意やめて本格的に…。

「そう、ありがとね。じゃあご飯食べようか」

「分かりました！！閣下」

「…あ、ついでにあそこの二人には飴でも与えようか。私っていい子だね」

「了解です、閣下はとてつもなくいい子であります！！」

…こいつはいつになったら元の口調に戻るんだろうな、まあいいか。ちょっと面白いし。

「ふー…、食べたね。おいしかった」

「喜んでいただけ何よりですわ」

じゃあ夜も遅いしもう寝るかなー。あ、ちなみにアリエラにはもとの口調に戻して貰ったよ。

どうやって戻したかはアリエラのぼろぼろ具合から見てもね。

女にも容赦ないのが私だから。

「じゃあおやすみー」

「おやすみなさい」

食堂を出たところでガッと何かにつまずいた。

おう？…あ、忘れてた。つーかまだいたんだ。

しょうがないなあ…。

私は二人を魔法で浮かせ転送術…ではなくロケット魔法で自室へと飛ばす。

ドガアアアアアン！！！！

二人は見事に突っ込んだ、やりすぎかなって思ったけどピクピク動いてたし大丈夫でしょ。

私は転送術で自室まで戻ると途端にバァンッと扉が勢いよく開いた。

「師匠！！」

「ファイアン！！」

案の定、二人だった。

「何？二人とも？」

「何じゃねええええええ！！」

二人の声が鼓膜を破ろうというほど大きく屋敷中に響き渡る。

うっさいから頭に大きいこぶを作ってた。

「で、何？」

「何じゃありませんってば！師匠、いくらなんでも壁に激突は痛い
です！」

あっそ。

「お前は俺を殺す気か！」

そうなたらいいなあという気持ちでやりましたけど何か？

「で、そんなくだらないことを抗議するために私の安眠妨害に来た
のかい？」

「…滅相もございません」

「じゃ、もう出て逝け」

「はい…、……………ってなんか『行く』っていう字がおかしく聞こえ
ただけどー！」

「空耳だ」

「いえ、しかしー！」

「空耳だ」

「ですから……」

「空耳じゃない」

「もういいですよ……」

三人の間にしばしの沈黙…。

そこで私はクスリと不敵に笑う。

「やっぱり空耳じゃないいいいい!!」

二人は慌てて部屋から出て行こうとするが、馬鹿め。もう遅いわ!

「神々の怒り、集え。ヴォルテニックスファイアー!」

突如現れた業火が二人を襲う、「うあああああ!!」とか聞こえるけどきつと空耳さ

私はその二人を放ってベッドに潜り込む。

『乙女の恨みは恐し』○○先生の名言はいつだって正しいのさ。

師匠はやっぱり強い（後書き）

少し師匠の強さを見せ付けました。

アリエラとディアンの中ではフィアンは魔王以上の存在として認識され始めてます。

ちなみにその後、イオとディアンは丸焦げと化し朝まで廊下に眠っていたそう。

食卓で

「お買い物に行きますわよ！フィアン！！」

……もぞり、私は布団の中で丸くなる。

心地よい夢の空間がアリエラの大声で音を立てて崩れた。

少し殺意を抱いたが起き抜けな上に昨日の夜、上級魔法を使ったから体を動かしたくない。

「アリエラあゝ、いきなり何い？」

目を擦りながら体をゆっくりと動かす。

「つつ！」

途端、アリエラが私の寝ている布団をバシバシと叩く。

いきなりどうした？

「…なんでもありませんわ、それよりフィアン。ドレスを買いに行きますわよ！」

ドレス…？何それ、おいしいの？

「魔王様と謁見するのですから正装をいたしませんと、ですから今日は面白い物ですわ」

あー…、正装？ドレスというのは服のことか。まあ『郷にいつては郷に従え』だな。ちなみにこの言葉は東方の国の名言だそうだ。

「分かったあ、下行く…」

もそもそとベッドから降りると魔法で夜着と普段着をすりかえる。

「…寝起きだけでも年相応でほっとしましたわ」

隣でアリエラが何か呟いていたが、まだ少しおぼろげの頭には分からない。

私は魔法を駆使して体を清潔にする。おかげで完全に目が覚めた。

「アリエラ、待たせてすまないな。下に行こうか」

「…僅か二分で子供は終わってしまいますのね」

「？」

「何でもありませんわ。朝食の準備は出来ています、お兄様とイオはもう食べてますわ」

「分かった」

私とアリエラは部屋から出ると食堂へ向かった。

「おはようございます」

開口一番、目の前の男二人に告げる。

「おはようございます、師匠」

「おはよう、フィアン」

腕や足に包帯を巻いている二人が笑顔で挨拶を返す。

二人とも…根に持ってるな。

「アリエラさん、起こしに行ってもらってありがとうございます」

「いえ、構いませんわ。むしろ納得しましたわ、フィアンの寝起きに立ち会つと男は死ぬという意味が」

「理解して貰えて結構です」

どーゆー意味だよ、私がまるで無差別に他人を殺っているみたいじゃないか。寝起きは頭がボーっとしているから良くて重症負わせるくらいしか出来ないよ。

私は席に着いて目の前のパンをもそもそと口に入れる。

「…そういうば、魔王様との謁見っていつなんだ？」

ディアンがスープを飲む手を止めてアリエラに問いかける。

「明日ですわ」

「そうか、明日か。……っではあああああ！……！」

「お兄様、うるさいですわ」

「わ、悪い…。じゃねえよ！いきなり過ぎだろうが！」

「いきなりではありませんわ、だから今日買い物へ行って明日会っ
んじゃありませんの」

うん、正論だ。まごうことなき正論だ。

「…今度からはもっと早く言おうな」

「嫌ですわ、面倒くさい」

「……」

なんかアリエラ、私に染まってきたな。

「おい、フィアン。アリエラがお前に影響され始めてるんだが」

あ、ディアンもおんなじこと考えてたんだ。どっかで影響しちゃう
要素あったっけ？

「文句ならいくらでも聞いてあげるよ。聞き終えた後に五体満足か
どうかは保障しないけど」

「…遠慮しとく」

だんだん聞き分けのいい子になってきたな、ディアン。お母さんは
うれしいぞ。

「お前みたいなのが母親だったら俺は今、自殺してるか殺されてる」

「声出てた？」

「思いつきりな」

あちゃー…、時々あるんだよね。無意識に声に出ちゃうところ。

直そうと思ってても体は正直なのかねえ、なかなか直ないんだよ。

「さてと、ごちそうさま」

私は手をパンッと叩く。

これは東方の習慣らしく、手をパンッと叩くことで食事を終えたということになるらしい。

「じゃ、アリエラ行こうか」

「わかりましたわ。イオ、お兄様。荷物持ちお願いしますわね」

「…分かりました」

「…了解だ」

私とイオは飛行魔法で、アリエラとディアンは翼で魔界コロニー5
8『商店街』に向かった。

食卓で（後書き）

フィアンの寝起きは殺人的な可愛さです。

お買い物♪

飛び続けて僅か三十秒程で『商店街』へと着いた。とても賑わっている。

「さあ、では買い物ですね。イオも正装してくださいね」

「…はい」

「すごいな…、ここが魔界最大の商店街…。ディアン！あれなんだ？」

「魔界珍味『グレグコリット』だ。食べると頭痛・眩暈・吐き気、及び一週間高熱で生死の境を彷徨うと言われている」

「…売れるのか？」

「数少ない死体族^{アンデッド}に」

「……見た目は美味しそうなのにな。一口だけ……」

「ちよつと買ってくる！」

「は？おい……ちよ！……待て！」

私はダッシュでグレグコリットの並ぶ店へ走ると一つ購入。店の親父に値段を交渉したら2,000ジュエルのところを10ジュエルにまけてもらった。親父は「俺、死のうかな…破産だ」とか言っていた。

さて、では早速一口...

はむっ

.....う、あ.....。

.....うー.....。

.....うあー.....。

…ふっ！。

…えー？すごい期待はずれ、上手いのか不味いのかのどちらでもなくその中間なんて…。しゃーない、親父に交渉して10ジュエル返して貰おう。

と、振り返ればディアンがいた。

「はー、はー。フィアン！食ったのか！？」

両肩を捕まれて激しくシェイクさせられる。うおう…酔っ。吐く…。

「ちょ…、まつ…。よ…う」

「早く吐け！生死の境を彷徨いたいのか！」

ま、まずは…止めて…。ホントに…。

「や、やめるコラアアア！」

私は力の限りディアンを蹴り飛ばす、案の定ディアンは吹っ飛んだ。

「ぜえ…ぜえ…、お前は殺されたいのかよ…」

「す、すまん…」こぶっ

向かいの屋台は半壊状態、そして死にかけの十九才^{ディアン}。息を切らす十四歳^{イアン}となんともシニールな光景だ。

「たくっ、体ならなんとも無い。早とちりしすぎだ」

もう喋るのも困難と化したディアンに私は言う。

「師匠？何かあったん…ですね」

背後からイオの声がしたので振り返ると荷物を両手でなんとか抱えている状態のイオがいた。とゆうか何かあったんですかの疑問系じゃないんだ。あったんですねの確定なんだ。

「まあ…見てのとおり」

「…たいていは想像できます。その手に持っているものは？」

「グレグコリット。期待を裏切る普通の味」

「期待を裏切るって…。俺も頂いていいですか？」

「ん」

私はイオの口の中にグレグコリットを突っ込む。苦しそうだ。

「むぐむぐ…。……………パタリ」

イオが突然倒れた。あれ？何が起こった？まさか…嘘だろ。

私はこっそりと魔法で状態異常かどうかを調べる。

テッテケテーン『寝不足』

……はあああああああああああああああ
あああ！！！！！！！！

な、なんでだあああ！！普通ここは流れからして『死』だろうがあ
あ！何故に寝不足！？何故ゆえに寝不足！大体そうだとしたら倒れ
るタイミングどんだけ悪いんだよ！？こいつ！！

そんなに私の期待を裏切り続けて楽しいか！？おちよくってんのか、
この商店街！

何？魔界だから？そんな言い訳通じるわけ無いだろうがああ！！
はあ…はあ…、もうやだ。疲れた。けど怒りは収まらない。しょうがない…。

「イオ。これは決して暴力じゃない…。……………八つ当たりだ」

「それ変わりませんよねええ！！？」

ガバリとイオが起き上がる。チツ！！おとなしく寝とけよ！

「いやいや、自分が殴られると分かってもなお眠り続けるってどんだけドMですか！」

「お前だろうが。つーかまた声に出ちゃったのか」

「俺にはMっ気はありません」

つまんないの。まあMだったらMだったでそれも困るんだけどね。

「…そういえば師匠、アリエラさんが呼んでましたよ」

「アリエラが？ドレスか？」

「はい。俺のはもう買っていたいたので後は師匠だけです」

「分かった。あ、イオ。そこのごみ片付け^{ディアン}について！出来れば屋台も直しといってくれ」

「分かりました。しかし面倒くさいです、なにか御褒美でもあればやる気が出ます」

…なんか扱いにくくなってきたな。駄々っ子か。

「何でもやるから、とにかく頼む」

「…その言葉、忘れないで下さいね？」

イオの口角が上がる。何でも…まいいか。

私はアリエラのいるドレス店へ向かった。

「…俺は欲しい物は必ず手に入れる主義ですよ。師匠」

後ろで呟いたイオの言葉なんてもちろん聞こえるわけも無く。

「アリエラー！」

「フィアン！これどうでしょう！」

ドレス店に着くとアリエラが露出の多い赤いマーメイドドレスを着ていた。

「綺麗だな！アリエラによく似合ってる！」

「そうですか！ではこれを頂きますわ！」

アリエラは近くの店員に話しかける。

「ありがとうございます、しかしまだまだお客様に似合うものがあるにございますよ」

女性店員はアリエラを奥に案内する。

「まあ見るわ。フィアン、少々お待ちくださいませ」

「いいよ〜」

アリエラは奥のVIPルームに消えていった。

暇だなあ。

「嬢ちゃん。ドレス買いに来たのか？」

目の前に男性客らしき人物が。男は金髪の髪を後ろで一まとめに束ね、服装は東方の着物を着崩した感じた。一言で言うならチャラそうなおっさん？三十代くらいの

「そう、明日お偉いさんと会うもんで」

「そうか。おっさんが見繕ってやろうか？」

「…おっさん。シンプルは好き？」

「好きだねえ」

「じゃお願い」

「任せなさい」

おっさんは意気揚々とドレスを選び始める。アリエラを待つ間暇だし、ドレスなんてなんでもいいし。

「これなんかどうだい？」

もう選んだのか…、早いな。お主…相当な手練じゃな。

「うん、いいよ。それで」

「決めんの早いな。女ってもうチヨイこつゆつのに時間かけるもんなんじゃないの?」

「だってどうでもいいし」

「今時の子は冷めてんね…。まあとにかく着てみなさい」

「うーす」

「…何その返事」

私はおっさんの選んだシンプルな白いドレスに魔法で着替える。

「凄いね、その年で魔法をアレンジするんざ普通の子供が出来ることじゃあないよ。おたく何モン?」

「普通じゃない子供」

「…ぶわはっはっは!!!面白いねえ」

…まさかこの回答で笑われるとは。いまいちおっさんのつぼが分からないぜ。

「ははは…。あー…、面白い。いいねえ、気に入った。名前教えてくれるかい?」

「貴様に名乗る名は無い!…なんて言わないよ。フィアン、それが私の名前」

「あはは…。とことん笑わせてくれるね…。おっさんの名前はデストよ」

「デストか…。おっさんの方が気に入った。おっさんと呼ぶ」

「じゃあおっさんもフィアンちゃんは嬢ちゃんにするわ」

「そうか、また会えるといいな。おっさん」

「そうだね、嬢ちゃん」

そうしてデストことおっさんは去っていった。

不思議な奴だったな。フィーちゃんとかは寒気と殺意を感じたのに嬢ちゃんなんて言われて何も感じないどころか嬉しいと感じるなんて。

「フィアン！お待たせしましたわ！」

アリエラがたくさんの荷物を抱えて戻ってきた。

「終わったん？」

「ええ、あら？フィアンはそれに決めましたの？」

私の着ているドレスを見てアリエラが言う。

「ああ、決めた」

「よく似合ってますわ」

私は思いのほか上機嫌で屋敷に戻った。戻る間、私がずっと上機嫌だったのでイオとディアンは気味悪がっていた。屋敷までリアル鬼ごっこをした。二人を捕まえられて楽しかった。

お買い物♪（後書き）

なんとか長く出来たかなと思います。

ちよいコメデイ少なくなっちゃいました。

新キャラおっさん登場です。フィアンといい友達になれそう。

ジュエルはお金の単位、百ジュエル＝百円

魔王城にて

「入れ」

辺りに重圧な声が響き渡ると私たちの目の前にある鉄の扉がゆつくりと門番によって開かれる。

「魔王様、御久しゅうございます。此度は謁見を受けてもらい、誠に恐縮ですわ」

着飾ったアリエラは一步前に出て玉座に座る男へと一礼する。

「こちらの人間が今回魔王様に謁見を申し込んだ方ですわ」

アリエラは私を前に引つ張る。着慣れないドレスに少し躓きながら前に出た私は、目の前の男を見据える。

「はじめまして、フィアンだ。私がここに來た理由は一つ。魔王と手合わせを願いたい」

「では、用意できましたわね。行きますわよ」

買い物翌日、正装に着替えた私たちは魔王城に行こうとした。

なかなかドレスというのは動きにくいから外から分らないように内側を軽く破って動きやすくした。

けどまだ動きにくかったので膝上まで丈をばつさりと切った。

そしたらアリエラに凄い褒められた。なんでも今流行のスタイルらしくて若い魔族の女の子に人気なそうな。

「待ってくれ、アリエラ。…フィアン。今、スカートの中に何かを忍ばせただろう。出せ」

……やるな、ディアン。私の忍ばせた速さは亜音速に達するというのに。

私は忍ばせた『鳩』を出す。

「……悪ふざけはよせ」

クルッポー。ばさばさばさ！

『鳩』が割れた天窓から羽ばたく。達者で。

「……ごこそ、テンテケテーン『グレグコリット』」

「……いい加減本命を出せ。そしてグレグコリットは捨てろ、腐りかけてる」

むう…、やっぱり騙されてくれないか。やれやれ。

「テンテケテーン『吸魔鬼の生き血』！」

「いつの間に抜き取った！？」

「気絶中」

「俺か！」

「ぶぶ、アリエラです。…と見せかけ貴様だあああ！」

「うおわっ！！いきなり注射器で刺そうとすんじゃねえええ！」

「はいはい、ごめんよ。これは市場に売ってたものだからどっちのものでもないよ」

「そ、そうか…。まったく驚かすなよ、俺たちの血は特別なんだからな」

「……いつか抜き取るか」

最後は小声で言ったため恐らく聞こえてはいないだろう。

「気は済みましたの？お兄様。全く…お兄様のコントに付き合わせられてるフィアンが可哀想ですわ。ついでに五月蠅くてうざいですわ」

「俺か！俺が悪いのか！？つかアリエラ！だんだん扱いが酷くなつてきてるんだけど！」

「気のせいです。さ、イオ。フィアン。行きましょ」

私とイオはアリエラに引つ張られる形で空を飛び、魔王城に向かった。もちろんフィアンも後からついてきてたよ。なんか拗ねてたけど。

で飛ぶこと約十分、魔王城に到着。うん、イメージ道理でいかにも魔王がいますよ的な感じのお城。

そして門番の人に中を案内され、冒頭に戻る…と。

「ふはははははははははは！面白くないか、小娘」

目の前の男は腹を抱えて笑い始める。どうやら私の言い回しに気づいてくれたようだ。

「お褒めに預かり至極光栄の極みですってか。私の言葉の意味が分かったんならさっさとしてくれないかな？」

「くくくつ……。気づいたのはお前が初めてだよ」

「へえ、よく今まで隠しとおせたね。そっちに驚きだよ」

「え？何がどうなってますの？」

アリエラは絶賛混乱中のようだ。まあ当たり前か、いきなり手合わせしてくださいに魔王大爆笑だもんな。あ、ちなみにこれ『愚かな…我に刃向かうか』的な笑いじゃないから。違う意味の方だから。

「フィアン！どうゆうことだ！滅多に笑わない魔王様がお笑いになるなんて…」

ディアンも混乱中らしいが流石だな、状況把握を優先したか。

「どうもこうも無いよ。この魔王は違うってだけ」

「違う…？なにがだ！」

「本物の魔王はこいつじゃない。本物は…」

私はスカートの中に忍ばせておいたナイフを数本魔王の座る後ろに投げる。

キキキキキキイイイイイン！！

しかしナイフは壁に刺さることなく全て弾き落とされる。

「あつぶねえゝ。嬢ちゃん、いきなりは酷いんじゃないのゝ？」

玉座の後ろから現れたのは…予想道理、おっさんことデスト。

「一日ぶりだな、おっさん」

「そつだね。嬢ちゃん」

おっさんは飄々とした感じで前に出てくる。

「んじゃ、改めまして…魔王のデストです　しかし嬢ちゃんよく俺が本物だなんて分かったねえ」

「勘」

「あはははは！いやあ、やっぱり面白いねえ」

「あはは、じゃあ手合わせを願おうか…？魔王」

「うーん、そうしてもいいんだけどねえ。一先ず事態の把握をしてない方々に状況説明して差し上げたら？あ、君もご苦労さん。影武者君」

「魔王様…、もういい加減にふらふらするのはお止めください」

影武者は奥の扉の中へと消えていった。さて、じゃあ状況を把握してないアリエラとディアンにかいつまんで説明しようか。イオは分かってたみたいだね。流石私の弟子を自称するだけある。そろそろ認めてやろつかない？

「じゃあ説明するね、実はかくかくしかじか…ということなんだ」

「分かるわけねえだろうが…！？」

「なるほど…。そういうことでしたのね」

「今ので通じた…！？」

「お兄様…」

「やめて！こんなのも分からないの…？的な視線はやめてくれ！アリエラ！！」

「ディアン…」

「待て！お前にまでそんな視線向けられる覚えねええ！そもそもこの状況作ったのお前だろうが！！」

「…本当に分からなかったのか？今のは魔界MS信号という特殊なもので、伝えたいことを@波に変換登録したものを*波でさらに変換することにより確実に字数を減らしつつ相手に送るという世界大戦でも使われたものだぞ」

「まじでかああああああ！！」

「嘘だ」

「すげえ盛大な設定盛ってまで人を騙すなあああ！ちよつと信じちゃったろうが！！」

「お兄様！ですから、実は私たちが魔王と思っていた魔王様は偽者であつちのお方が本物と言う事よ」

「アリエラ！？どうしてお前はまともな説明を受けずに分かったんだよ！」

「…話の内容から普通推測できませんか？」

「あ」

ディアン…、哀れな奴。ま、これでいいでしょ。

「おっさん」。状況説明完了だよ」

「ぶくくくっ…」「ご苦労さん」

「んで？もう殺^やってもいい？」

「ストップストップ！自己紹介くらいやってよ」

「…？。やったじゃん」

「違う違う、後ろの方たち」

あ、そか。一応アリエラたちとは初対面だね。

「えっと…こっちの可愛いのがアリエラ」

「嫌ですわ、フィアン。可愛いだなんて…」

ほっとこう。

「で、これがツッ^{ディアン}コミ要員」

「待てコラアア！！説明の仕方がおかしい！！」

ナイスツッコミ。

「で、……………弟子のイオ」

「師匠！やっとなめてくれたんですか」

五月蠅い、あくまで仮だ。説明がめんどかったからだ。

「なかなか個性的だな、特に嬢ちゃん」

誰がやねん、私は至って普通ですが何か？ちょっと人と違つところあるけど至って普通ですよ。

「じゃあ今度こそ…」

「まあまあ、お茶にでもしようぜ。嬢ちゃん」

…い、いつになったら。

「だって嬢ちゃんと戦うの怖いんだもん」

「…また声に。…どーゆーこっちゃ」

「嬢ちゃんでしょ？魔界の辺境にドカーンってでっかい穴開けたの」

…でかい穴？まさか…イオから逃げてた時の…！

「あ、あれか…！」

「そ。大きすぎて塞ぐのに時間がかつちやっただからね。その際にそこに使われてた魔力、一気に嬢ちゃんのところ逆流してっただけけど大丈夫だった？」

一気に逆流って！初めてアリエラの家泊まった時の夜…足に力が入らなかった理由はそれか…。

「とにかくあゝんな怖い穴開ける人とは戦いたくありません！どうしても戦いたいなら…そうねえ、おっさんを喜ばせてみなさい！」

めんどっ！一番面どいこと言い出したよ。このおっさん！

「…ちくしょう、イオ！」

「嫌ですよ？面倒くさい」

「師匠命令！」

「…商店街の時、確か言いましたね。何でもすると。だったら俺の言うこと聞いてください、魔王を喜ばせるために面白いこととしてください。正直俺も見たいですし」

し、しまったああ！そういえば言った…。うぐぐぐつ。

しょうがない…。ここは腹をくくるか…。

「…メアリー秘伝！『か弱い女の子は大抵悪い子なのよ攻撃』！！」
私は隣にいるディアンに抱きつく。

「え？」

「うああああああ！」

ディランの体を持ち上げて背中を反らせる。

ドゴオオオオオ！！

鈍い音が辺りに響く。ディアンが頭を打ったからだろう。

静寂に包まれる空間にただ一人だけ笑い声を漏らす魔王がいた。

おっさんはなんかこうゆう系を面白がることなく分かった
のでやってみた。

ごめん、ディアン。なんか犠牲にして。

「そう思うなら最初からやんなあぁあ！！」

ガバリとディアンが起き上がる、頭には血がどくどくと溢れ出ている。地味にホラーだ。

「あ、うん。なんというか…ドンマイ」

「やった本人が言うなあぁあぁ！！！！」

魔王城に響き渡った絶叫の原因は魔王の面白コレクションに殿堂入りを果たした。

魔王城にて（後書き）

実はおっさんが魔王という…。

大抵予想してた人ーいますよね？

ていうかかなりの人が考えていたでしょうね。はい。
すみません。

魔王城にて？

「あゝ。面白かった！ホント最高だねえ、嬢ちゃんは」

おっさんは少し目に涙を浮かばせながら親指を立てる。笑いすぎやろ。

「うん。じゃあやろうか…っという流れになると思っただけおっさんと話してるとそーゆー流れ全部断ち切られるね」

「あはは！これがおっさんの特性だからねえ。おかげで部下達からは懸念されてんのよ」

まあこんなのが魔王だったらね。普通魔王というのは冷酷無比・残忍凶悪が代名詞だもんね。凄い勢いでイメージをぶっ壊してくよ、おっさん。

「あの…魔王様。我々が魔王だと思っていたあの方は誰なのですか」
ディアンが恭しく礼をしつつ口にする。固っ！！

「普通におっさんでいいのよ？いやならデストでもかまわんよ。固いのは苦手だからねえ」

「…ではデスト様で」

「固いねえ…。あの子はおっさんの一番信頼してる部下よん。おっさん、放浪癖があるから政務全般任せてんの」

「そ、そうなんですか…」

部下…か。中々の魔力の質だったからこそ強いんだろう。ま、おっさんのはそれを遥かに超えてるね。間違いなくおっさんが魔王だ。

「少しお聞きしてもよろしいですか？ 師匠」

「ん？ イオ、なんだ」

「師匠はいつデストさんと会ったんですか？」

「ドレス店だよ。そこでこの服をおっさんを選んで貰ったの」

「へえ、いい趣味してますね。デストさん」

「うん。おっさんの見たやつとは大分変わってるんだけどね」

破いたからね。ついでに魔法で少し加工したから色も水色になっているし。

「そんなことよりも魔王様…いえおじ様。フィアンと結局手合わせはしませんの？」

「おじ様…。いい趣味してるねえお姉ちゃん」

「気に入っていただけて何よりですわ」

「嬢ちゃんとか…。やったらここ辺り消し飛びそうで怖いんだよなー」

消し飛びそうじゃなくておっさんの魔力全開放だけで消し飛ばよ。
…そう考えるとやらない方がいいのか？

「そうしてください。師匠とデストさんがぶつかったら間違いなく
ここら一帯は消し飛びます」

イオ…、お前は私を何だと思ってるんじゃない。これでもれっきとした人間じゃない。

「最近、声に出ること多いな。じゃあ分かった、やめとくよ」

「随分あっさりですね」

おいおい、人間引き際が肝心って言葉を知らないのかい？イオ君。
ま、正直なところおっさんとやったら体ぼろぼろになりそうだしね。

「まね。あゝあ…、じゃあ魔界来た意味無いじゃん。どうしようかな」

「魔界観光でもしたら？嬢ちゃん。意外に面白いとこたくさんあるのよ」

ナイスアイディア！一回行きたかった魔界遊園地行こう！

「いいね！じゃあおっさん！一緒に行こ！」

「ありま、おっさんを誘ってくれるのかい？いいよ」

決まり！！

「フィアン、私も行きますわ」

「いいよ」

「俺も行きます」

「よっしゃ来い！」

「俺も付いてくぞ」

「却下」

「やっぱくと思ったよ！こんちくしょおおおお！」

「冗談冗談つ。フィアン ツツコミ要員なくなるとボケばかりが成立しちゃ
うもんね」

「そのためだけか！そのためだけの存在として俺は行くのか！！！」

「それがお前の存在意義だろうが」

「ちがああああああう！」

「…ぷはっ、お二人さん。ぷぷっもう十分だよ…。ぷはっ！」

「デスト様あああああ！！」

「さて、それじゃあもう今日は準備して明日にしようか。嬢ちゃん」
ツツコミ状態に陥り錯乱状態となったディランは私とおっさんの拳で沈んだ。現在独り言のように何かを呟きながら床に寝ている。

独り言の内容は「さ、最悪コンピ誕生だ…」と訳の分からないものだった。

「いいよ。じゃあ明日に備えてもう寝るかああ」

「なら城泊まってっていいよん。どうせ空き部屋だらけだしねえ」

ありがたい申し出だな。流石おっさん。分かってらっしゃる。

「ならそうする」

私は皆を残して空き部屋を探しに部屋を後にした。

く魔王謁見の間（フィアン除く）く

「いやあ、ホント嬢ちゃんは面白いねえ」

「どこですか！？あなたはあの顔の後ろに隠れた鬼が見えなかったんですか！」

フィアンがいなかったからといって本人に聞こえてないわけではないぞ、ディアン。

「お兄様、フィアンを悪く言うのはお止めください」

「わ、悪い。…そういえばアリエラ、イオとの婚約の話ってどうなったんだ？」

「あ、忘れてましたわ。あれは無しになりました。初めはイオに惚れてしまってつい口走ってしまいましたがよくよく考えて無しにしましたわ」

「…災難だったな、イオ」

「いえ、別に…」

「そっぴや、イオだっけ？嬢ちゃんの弟子って」

「ええ、そうですよ」

「なあなあ…弟子になった経緯話してくれよ。おっさん、嬢ちゃんの過去に凄く興味あるんだけど」

「…私も興味ありますわ」

「俺もだな。どう育ったらあんなに歪むのか聞きたい」

だからディアン。悪口言うなって、消されるって!!

「大して面白くはな…くは無いですけどこれ話したら確実に師匠に殺されるというパターンが目に見えてるんですけど」

「大丈夫だって!そんな時はディアンを犠牲にしちまえ」

「デスト様ああ!!」

「なるほど…その手がありましたね」

「納得すんなイオオ!」

哀れにもただ響くだけのツツコミ。

「では聞かせてくださいまし、イオ」

「そうですね…あれは、半年前の冬の事です。師匠と出会ったのは、滅多に人が立ち入らない『磁気狂いの森』と呼ばれた場所でした――」

魔王城にて？（後書き）

次回、フィアンとイオの過去話です。

師弟の過去（前書き）

イ才視点

師弟の過去

「…もうここまでか」

俺は『磁気狂いの森』まで逃げるもそこで力尽き、気を失った。

目が覚めたときに目の前にあったのは固い岩や土ではなく見知らぬ天井だった。

「ここは…？」

「私の家だ。人間」

ふと声がした方を見ると、そこには銀髪碧眼の少女が鋭い目で俺を睨みつけていた。

「君が…助けてくれたのか？」

「気まぐれだ。傷が治ったら出ていけ」

少女は淡々とした口調で早口に話すと扉から出て行った。

「…俺は助かったんだな。運がいいのか悪いのか…」

俺は追われていた、身内である叔父に。

捨て子だった俺が伯爵家の養子となり遺産をもらうのが許せなかったんだろう。

「おい」

いきなり水に濡れた布が飛んできた。俺は反射的に受け止める。

「それで体を拭いておけ。あと傷も早く治して出ていけ」

俺を助けてくれた少女だった。

「…聞いていいか」

「嫌だ」

即答。

「…聞いていいか？」

「十文字以内だ」

無茶ぶりだな…、いったいどんな教育受けてんだよ。

「君の名前は？」

「お前の名前は？」

…………… 会話が進まない。

「俺はイオ」

「貴様に名乗る名は無い」

…扱いにくっ!!

「冗談…。フィアン」

フィアンか…。この子の親の顔が見てみたいよ。あれ? 所謂いえば俺が倒れたのって滅多に人が入らない『磁気狂いの森』だよな、まさか!!

俺は急いでベッドから降りて窓から外を覗く。

目の前に広がるのは見渡す限りの木。

「お前の推察道理だ。ここは『磁気狂いの森』。私はここに住んでいる…というより住み始めた」

住み始めた!? こんな子供が一人で!!

「意外…といった顔だな。この森が恐ろしいなら早く傷を治して近くにある村にでも駆け込めばいい」

「ねえ、君何歳?」

「十四」

……幼っ!! 十六位かと思ってた。随分子供っぽく無いな。

「どうしてここに住んでる?」

「…人と関わりたくないからだ、まあ不運にもお前に会ってしまったがな」

「どうして助けてくれたの？」

「質問が多いな…。気まぐれと言ったろうが。もう助かった、ここにいるでいいだろう。いちいち聞くな、鬱陶しい」

冷めてるな。にしても人と関わりたくない…。か。どんな生活送ってきたんだよ。

「君、お母さんとお父さんはいないの？」

「…さあ？生きてるんじゃないか？どこかで」

酷く冷たい声だった。

「君も捨てられたの？」

「じゃないか？誰も大きすぎる力を持つ者を恐れるのは人としての防衛本能に組み込まれた反応だ。もう質問はいいだろう。寝ろ」

「あ、うん」

少女ことフィアンは部屋から出て行く。

大きすぎる力…。確かにあの子は大きい魔力を持っていた。けどそれはいけないことなのか？望みもしない力が生まれつき備わっていたせいで捨てられた…。皮肉な話だな。

…もう寝るか。……傷が疼く。

俺はそのまま深い眠りへとつこうとしたがいきなり大きな揺れが体を襲った。

「うわっつ…と」

地震かと思ったがここは磁気狂いの森…。何が起きても不思議じゃない。

「おい。じつとしていないと傷が開くぞ」

突然後ろから声がした、フィアンだ。この際どこからいつの間にというのは無しだ。

「この状況でじつとしてろってというのが無茶——」

息が止まりそうだった。いや実際止まった。

振り向くと、淡く光を発しながら浮いているフィアン少女がいた。

神々しさを醸し出しながらこちらを見る姿は御伽噺に出てくる精霊のようだった。

「安心しろ。この程度ならすぐにおさまる」

フィアンの言葉に従うように揺れはだんだんとおさまっていった。

「主の仕業だ。時々暴れだすらしいからな」

「そ…なのか」

「ああ、早く寝ろ」

フィアンはすうつと光に囲まれると姿を消した。…魔法？

俺は今度こそ寝ようとベッドに潜り込む。

しかしなぜか目が冴えてしまって眠れず、夜中ずっと苦悩しながら朝を迎えてしまった。

「…何してるんだ。俺は」

朝といっても夜明けが訪れただけでまだ人の活動時間ではない。

なので少し部屋からでて散歩しようと思った。もちろん家からは出ようなどとは思っていません、むざむざ迷おうなんて思えるほど俺は馬鹿じゃありません。

廊下を歩いていると扉が開いている部屋があつたので中を覗いてみた。

中は本とメモやらで散乱しており散らかっている。けど何よりも目に付いたのが固い床の上でごろりと寝ているフィアンだった。

「なっ！」

ベッドは存在しているのにどうしてそっちで寝てないんだ！？

俺は中に入り、フィアンを抱えあげる。

そしてベッドまで運び寝かせようとした。

「んゝ、だれえゝ？」

フィアンが目を覚めたのだ！ま、不味い！別にやましい気持ちがあつたわけではないがこの状況はなんかやばい気がする！！

俺は弁解しようとフィアンの方へ向き直る。

「むうゝ、んにゅあああ。んむう」

体中に電気が走った…今までこんな表現あるわけねえって馬鹿にしてました。すみません。今まさにその体験をしてしまいました。

だって何これ！可愛すぎるだろ！！昨日の子と全く別人だよ！

や、やべえ。ギャップがありすぎるだけに今がすごい可愛く思えてくる。

「…んむ」

コテンとベッドに眠り込むフィアン。

意識が落ちそうになった。

「…この子、狙ってやってるんじゃないよな？」

もしそうなら全国の男を落とせてるぞ。

「まあ、いいか。早く出よ」

俺はすばやく部屋から立ち去り自室…？に戻った。

どかりとベッドに倒れこむ。

「…強くなりたい」

一つの志を胸に。

「入るぞ」

ドカアアアアアアアアン！！

突如扉が吹っ飛ぶ。

「危ねええ！」

扉がまるで計算されたように俺の頭に向かってきたがかるうじて避ける。

「飯だ。こい」

さっきまでの可愛い奴カムバック！至急戻ってきて！！

つか変わりすぎだろ！！何なのこの子！二重人格！？

「変わりすぎだ！！」

「…訳の分からん言葉はやめろ。殴りたくなる…間違えた。蹴りたくなる」

どっちも変わんないから安心しろ。

とゆうか改めて思った…こいつ、強いんだっけ？

だったら…俺に残された道は一つ。

「俺を弟子にしてくれ！」

「却下」

「早アアアアアアアアアアアアアア！！！！」

師弟の過去（後書き）

次回も続きます。

師弟の過去？

「頼む！俺を弟子にしてくれ！！」

「却下」

「じゃあ鍛えるだけ！」

「無理」

「軽く揉む程度でいいから！」

「嫌^や」

…フィアンに助けられてから一週間が過ぎた。大して深くは無かった傷もじよじよに回復しある程度体が戻ってきた。

俺は叔父が許せない。たとえ血が繋がっていなかったとしても俺を拾ってくれた両親を殺し、財産を奪うために俺まで殺そうとした。

俺が生きていると知ればまたあいつは俺を殺しに来るだろう。

強く…ならなければ、母さんと父さんの伯爵家をみすみすあいつに乗っ取らせるわけにはいかない。

「頼むって！俺は強くなんなきゃいけないんだ！」

父さんと母さんの伯爵家だけは俺が守る！

「…理由を言ってみろ」

「今、叔父さんが伯爵家…あ、俺ん家ね。を乗っ取るうとしててそれを食い止めなきゃだめなんだ。叔父さんは昔から強欲な人でね…、伯爵家の財産を狙って父さんと母さんを殺しただけじゃ飽き足らず…っ！か俺を殺して財産丸々ゲットという考えをしたみたいでさ。なんか王様を丸め込んで騎士団使って俺を殺そうとしたみたいで、いきなり屋敷に騎士団が踏み込んできてね。あ、しかもそこにいた騎士団長が俺の親友で……」

「長い！！」

「っはっ！…」

フィアンの拳が俺のみぞおちにヒットした。すげー痛い。

「な、何だよ…。ちゃんと理由を…」

「長い・うざい・飽きた」

ざっくりと言われた。地味にダメージ。

「…ま、とゆうことだ。俺を弟子にしてくれ！」

「もう一つだけ聞かせろ。何故私を選ぶ？伯爵家ならば騎士団で師などいくらでもつけられるぞ」

「…だってお前、強いんだろ？」

「…………ふっ」

鼻で笑われた！？何故に！

「面白い奴だな。長い時間を生きてきたがお前のような奴に会ったのは初めてだよ」

「十四歳のくせして何言ってるやがる」

「…あ、すまん。実は私三十二才だ」

「意外に年増としま！！！」

「あほか。十四歳だ、私の好きな本の台詞を言ってみただけだ。ちなみにタイトルは『鶴と亀の貶し合い』」

「貶し合いでそんな良い台詞でてくんのか！？」

「いや、少しアレンジした。原作は『この亀野郎が！長い時間を生きてきたがお前のようなうざい奴に会ったのは初めてだよ』だ」

「ホントに少しのアレンジだな！俺原作といまの言葉大分違つかまんまかと思ってたのに裏をかかれたか！」

「ふつ。人生とは…そういうものだ」

「上から目線…人生悟りきってるな、師匠」

「誰が師匠だ、パラグアイナスと呼べ」

「誰だよ」

「反応薄い…。とつさに思いついた多分人名かと思われるような思われぬようなそれでいて人名ですらないような名前とおぼしきものの」

「ややこしっ!」

「…うしっ」

「待て今なんでガッツポーズした」

「…」

「目えそむけんなこらああ!」

「黙れ、お遊びはこの辺にして…強くなりたいんだろっ?」

「!」

「どうした?やるんじゃないのか。今頃怖気づいたか?」

「は、じょーだん」

俺とフィアンこと師匠との関係はこうして出来上がり地獄も顔負けの修行が始まった。

俺はこの時、後悔すべきだったんだと思う。己の選んだ選択肢を。

あの時素直に怖気づいていればこんな目には遭わなかったのかと過去の自分を呪った。

なぜなら…

「し…師匠…もう無理です」

「はっ、この程度で泣き言いうな」

「…腕がもげそうなんですけどおおおおお！！」

師匠についていくとそこは女の人がたくさんいる場所…いわゆる娼館でした。

なんでええええええ！！師匠十四歳だよね？人と関わりたくないと言っただけだった？

つーかなんで俺女の人に囲まれてんの？ツツコミ所が多すぎだろうがあああああ！！

「師匠！何なんですか、いきなり…そのアレな所にきたりして。まさか…師匠」

「変な誤解を生むと私の精一杯の地獄を私の持つ全ての力を使って
見せるよ」

「…イエッサー…」

「ここにいる知り合いに修行場を貸してもらっただけだ」

こんなところにいる知り合い！？まともなひとなの？ねえ！

「ん…おいシイナー！」

シイナ！それが知り合いの名前か、名は普通だが見た目は！？

俺は勢いよく顔を上げた。

目の前には…化粧をし、薄桃色のドレスを着た…

お爺ちゃんが。

「ええええええええええええええええ！！」

おっどろいた！マジでびくった。予想はとんでも美人がオカマかと思ってた。いやある意味オカマだけでも！何この爺さん！変態なの？変態でしょ？

「五月蠅いぞ。この人はこのオーナーでシイナという」

お、オーナーですか…。

「はじめまして、若い。良い体しとるの」

はい、オーナーですね。確信しました。

「シイナ。早速で悪いが修行場を貸してもらえないか？」

「む。別にいいが…いいのか？そっちの若いの…死…」

「いいから貸せ」

早業でした。シイナさんが何か言い終える前に師匠が無詠唱で出した炎がシイナさんの頭の上を通過しました。若干ちりちりしてます。わーすごい、師匠。流石ー。

「…分かったわい。頭はやめろ。数少ない毛根がもつとやばくなるからの」

「ありがたい。行くぞ」

俺は引つ張られる形で娼館を出るとまた森に戻った。

ちなみに娼館は森の近くにあつて客も毎日つはうはだそつだ。

森は心霊スポット？、娼館は例のアレ。意外に有名な二大スポットなのだそつだ。

師弟の過去？（後書き）

あともう一話続きます。

師弟の過去？

森を突き進み早数分、大きな湖のある場所に着いた。

夜の月明かりが湖の水に反射してキラキラと輝いている。一言で言うなら神秘的だ。

「磁気狂いの森にこんな場所があったとは驚きです」

「…綺麗だと思うのは初めの内だけだな」

フィアンがぼそりと何か呟いた後、聞きなれない言語を喋り始めた。

頑張つて聞き取ると何とか分かった言葉が『エヌシテイマ』支配者という
もの。

神語と呼ばれるもので喋れるものは魔術師くらいのもだった。

俺は一応勉強はさせられていたのでところどころは分かることができた。

「……………開け『水竜の扉』」アクアレイス

フィアンが言うのと同時に湖の水がカッと光りだす。

光は七色に輝くとスウッと消えた。

「…よし、繋がった」

ナニガデスカ…？

「行くぞ」

ドコヘデスカ…。

「師匠…まさか」

「水竜の集う縄張りだが」

「やっぱりですかああ！何考えてるんですか！？水竜ですよ！水竜！！たった一匹で世界を支配する力を持つてるんですよ！」

「知るか。行くぞ」

「少しは危機感を持ってくださいよ！」

「…あんな平和ボケにか？」

………は？今…平和ボケって…。

「はあ…行くぞ」

停止した俺はそのまま引きずられるように湖の中に入った。
フリーズ

…ってちよつと待ってええええええええ！！

み、湖って！？湖って！！

どぼんっ！

湖の中に引きずり込まれた俺は死因は水死になって覚悟しました、しかし水に包まれた瞬間目の前にはただっ広い白い空間が。

「え？」

再び停止フリーズしました。だって天国来るには早い気がしたものの。

「水竜…」

横でフィアンが呟きました、その単語だけで全てを理解しました。

ここが水竜の縄張りなんだと。そして今日が俺の命日なのだと。

【これはこれは…懐かしいお客じやのう、フィアン。少し大きくなつたか…】

いきなり頭の中に響き渡る声がした、理由は分かってる。

いつの間にか目の前にいた青色の竜…水竜だった。

「久しぶりだな、長^{おさ}。早速だが頼みがある」

フィアンが親しげに話す。

「こっちの男…イオと言うんだが少し揉んでやってくれ」

ってちよつと待てええええええ！！

【ふうむ…、良いのか？殺してしまうかもしれないぞ…】

いや良くない！良くないよ、それ！！

「てゆうかむしろ殺せ」

待てこらあああああ！！何言ってるの！！？

【…哀れな】

って思うならやめようよ！貴方水竜でしょ。何で人間の女の子一人に反抗できないの！？

【イオとやら…付いて来い。わしが世界をも蹂躪させる術^{すべ}を教えてやる。…死なぬようにな】

いやいいです。全力で遠慮させてください、俺が強くなりたいたいの世界を手に入れるんじゃないかって一人の人間に復讐するためだけですから。たったそれだけのために水竜様から教えていただくことは出来ません。

「がんば、イオ」

笑顔が可愛いですね、師匠。

俺はフィアンのいる場所から数百メートル離れた場所に来ると、水竜がふと話しかけてきた。

【イオよ。少し聞きたいことがあるのじゃが…】

「…はい？」

【お主…フィアンは好きか？】

「…は？」

【フィアンのことを好きか嫌いか…じゃ】

いきなり何を言い出すんでしょうか…。

「…好きか嫌いかでしたら好きですよ」

【そうか、良かった…】

水竜は安堵したように少しだけ強張っていた表情を和らげる。

「どうしていきなり…？」

【フィアンは人間といること事態が珍しいが人を好くというのは滅多に無い。なのにお主を好いていたように見えたからじゃ】

すいません、少し理解できない箇所が。

フィアンが俺の事好き…？

【むろん恋愛のほうじゃないぞ。フィアンはそういうのには疎い】

…確かに疎そう。

【あの子はあるな性格じゃからか人に好かれることは無い…がわしとしては人との繋がりを持って欲しいのじゃよ。じゃなければいつ

か壊れてしまいそうでな】

フィアンが…壊れる…。

【あの子の支えになってやってくれ】

俺が支えに…。

「…水竜様は師匠の…フィアンの事が大好きなんですね」

【ふっ、ぼこぼこにされた時は絞め殺そうとおもっていたがな】

あんた、何されたんですか。そしてフィアン、あんた何したんですか。

「…支えますよ、傍で…」

そんな言葉が口から漏れていた。

果たしてそれが本心だったのか、水竜という大きな存在に言われたからなのか…。

考えるまでも無い、本心だ。

【お主になら…渡せる】

水竜はそう呟くと、自身の頭に埋め込んである宝玉を静かに取り出して俺に差し出す。

【わしの命の核ともいえるものじゃな。お主にやろう】

命の核…そんなものをフィアンのために使ったな、あなたは。

「…ありがたく受け取ろう」

俺はそれを受け取ろうと手を伸ばす。

するとカツと水色の光に輝いたと思ったら、目の前から水竜が姿を消した。

残ったのは姿を変え、指輪となって俺の親指にはまっている宝玉だけだった。

「俺の感じていた違和感は…この思いだったんだな。いつの間にか惚れてたとか…」

思えば、初めて会った時から続いていた違和感。

フィアンと会ってからだった、初めて本気で楽しいと思ったのは。

支えて見せるよ、彼女を。

॥०॥

師弟の過去？（後書き）

やっと過去編終わりました。
次回からは本編に戻ります。

師匠の冷笑（前書き）

初めは作者視点で後半からフィアン視点になると思います。

師匠の冷笑

イオが過去話を一通り話すと辺りはシーンと静まり返っていた。

失礼、若干一名笑い声を漏らす魔王様がいた。

「ぶく…くっ！嬢ちゃん、昔から面白かったんだねえ。にしても…水竜がぼこぼこか。ぶはっ！」

どこにつぼってんだよと思わずツッコミたくなった。

「ふむ…、イオが会った時は既に時遅しでもう性格は歪んでいたのだな…」

ディアン…さつきから死亡フラグを立てまくってるよ。

「フィアンに…そんな過去が…ううっ！」

うん。そこまで重い話じゃなかったんだけどね、アリエラ。

「と、これで過去話終了です。その後は師匠に殺されかけたり逃げられたり殺されかけたりというものでした」

「にしても、イオってば水竜の力継いじやったんだねえ」

あ、そういえば…だったね。

「ええ、おかげで身体能力はありえないくらいに上昇するし水は自在に操れて便利なんですけど…炎が異常に怖いと感じるようになった」

たんですよね」

「水竜はもともと炎に弱いけど宝玉の所有者の記憶も関係してくるからな。大方何かのトラウマがあって炎を異常に怖がるようになったんだろう」

……ノーコメント。

「…今一瞬、犯人が分かったような気がしますわ…」

アリエラ…誰にも言わないでやって。水竜の誇りが粉々になるから…。

「…あ、おっさん。ちょっと用事できた」

いきなりデストがいつの間にか設けられていたお茶の席を外す。

「おじ様…」

「アリエラちゃんも行くかい？」

「はい！」

アリエラも席を外した。

「デスト様、どちらに？」

「…部下から念話で連絡が入っちゃって至急仕事せよってね。おっさん一人じゃ大変そうだからアリエラちゃんに手伝ってもらってますわ」

「分かりました、頑張ってください」

「デストさん。俺は魔王の仕事というものがどのようなものか見たいのですが…」

イオが慌てるように席を立つ。

「いいよ、早く！」

こうしてお茶の席からイオ・アリエラ・デストの三人が姿を消し、残ったのはディアンとお茶を注ぐメイドのみ。

「…さて、俺はどうしようかな」

「もうしばらくお茶を楽しんだらどうだ？」

「そうするか、メイドさん」

ディアンが振り返った視線の先には、倒れたメイドさんそして静かに佇むフィアの姿が。

ディアンは即座に体が固まり動けなくなった、頭の中は生命危険信号でいっぱいになっている。

「普通の茶では飽きてしまふと感じてな、私なりのアレンジを加えたお茶を作ってみた」

フィアンは紫と黄色の混ざったお茶をディアンの前に差し出す。色だけで既にヤバイ…。

加えて腐卵臭まで漂っている上、表面は常にマグマのようにボコボコといっている。

見るだけで分かる。飲めば一発でお陀仏だ。

「一気に行け」

ニツコリと笑うも目が氷点下をも超えた冷たさだ。

ディアンは初めてまだボコられた時の方がましだと感じた。

「いた…だきま…す」

『す』を言い終わると同時にアレンジ茶を一気に流し込む。

飲み終わるとみるみる内にディアンの顔色が真っ青になり、体中に痙攣が走った。

手と足は冷え切り、冷や汗が止まらないままディアンは地に臥せた。まるでさながら死体のようにピクリとも動かない。

「…さて、出て来い」

私はディアンを殺した後、柱の後ろでこちらの様子を伺っている三人に話しかける。

「はは…ばれてましたか」

「恐ろしいお茶ですわね…」

「嬢ちゃん、こえーなあ」

全く…、部屋の場所を聞くのを忘れてたから戻ればどっかの馬鹿が過去話とやらをしていたからな。

遊ばせようと思って放しておけば…。

「イオ、勝手に話した罰だ。デ死体ィアンを片付けておけ」

「はい」

イオは死体に触れようとしたその時、死体の指がピクリと動いた。

「これは…」

「死後硬直だな」

「そうですわね」

「おっさん、初めてみたわ」

「死後硬直って決め付けんなああああ!!」

勢い良く死体と化していたディアンが起き上がる。ツツコミは死んでも尚健在か。

「少しは生きてる!とか言ってくれよ!!何だよこれ!いじめか!いじめなのか!?!」

「当たり前だろ」

「最悪だああああああああ!!」

もう…五月蠅い!

「ぐぼあっ!!」

ディアンは再び地に沈んだ。頭に大きなこぶをつけて。

「容赦ないですね」

イオが苦笑しながら私をみた。ふと指の方に目がいく。

「お前が水竜の宝玉を持ったことはすぐに分かったが、そんな経緯で受け取ったとは知らなかった」

「水竜様に支えろといわれまして」

「…あいつも余計なことをしたものだ…。馬鹿が」

「…といって複雑そうな顔してる師匠に言われたくないと思いますよ」

「…ふん」

水竜…お前は本当に馬鹿だ。

だが、それも悪くなかったぞ…。

「イオ…師匠命令だ」

「はい？」

「…これからも傍にいろ」

「…いわれなくとも」

少しだけ心が軽くなり、温まるような気がした。

師匠の冷笑（後書き）

正式に師弟関係成立！？
でも扱いは変わりません。

出立の日

「魔界遊園地が潰れました。あはっ」

朝食を食べている最中に開口一番そんな事を言っただけなのはおっさん。

とりあえず思考が停止しました。

「…は？」

「だから、遊園地潰れちゃったのよ。つい昨日にね」

おっさんはヤベーという顔をしながら頭をぱりぱりと掻く。

「…原因は？」

「おっさんの書類サインミス」

「死ね、おっさん」

私は雷上級魔法をおっさんのいる場所へと落とす。しかし、おっさんは難なく防御。

「いやあ…おっさんもねえ、やばいことしたとは思ってるよ？けどもう潰れちゃったものはしょうが無いじゃない？とゆー訳で魔界プールランドつてものを作ってみたよ」

「…遊園地が良かった」

私は雷と炎の混合魔法『エジディシア』雷炎の爪をおっさんのもとに繰り出す。しかし今度は避けられる。

「まあまあ、意外にプールも楽しいモンよ。嬢ちゃん、だから流石にその魔力量はやばいって…。おっさんごと魔王城を消し飛ばす気？」

…私は右手に集中させた魔力を霧散させる。

「だって…」

「そういえば師匠…、泳げませんでしたね」

…ピキッ……。

「ちよっ…！すいません…！やめてください、まじ洒落になりません…！」

「黙れ、イオ。泳げないんじゃない。水が私を取り込もうとするだけだ」

私はイオの首にくつきり跡をつける。イオめ、ごほごほ五月蠅いやつだな。食事中くらい静かにしなさい。

「フィアン、が泳げない…か」

なんかフィアンが含みのある笑いをしたのでとりあえずイオと同じ目に遭わせた。

「嬢ちゃん、泳げないのか。んじゃあ…プールは無理だな」

やけにあっさり引くな…、おっさんなら無理やりでもプールといい
そうなのにな。

「あら、やめるんですの?」

「考えてみな。嬢ちゃんが水ん中溺れてみる。何かが降臨してきそ
うだろ」

「…それもそうですわね」

え? 納得された? めっちゃ腑に落ちないんだけど…。私ってどんな
風に見られてんの?

「では…最近人間界に出来たという『テーマパーク』に行ってみま
せんか?」

「テーマパーク…か。だが、客が減多に入らない最悪ランドと聞い
たぞ」

「大丈夫ですわ、お兄様。それは山奥に存在しているので人間は立
ち寄らないそうです」

「なら、いいか。フィアンもいいだろ?」

「ああ。もしつまんなかったらディアンを消す」

「なんで俺!!?」

「そうゆう役はディアンに任命されたじゃん」

「いつ任命された！？全く覚えが無いんだけど！」

「私の夢の中」

「ようは言っていないことだよな」

「言う暇なかったんだからしょうが無いだろうが！！」

「逆切れ！！？」

「はっ！」

「そして鼻で笑われた意味が全くわかんないんだけど！」

ああ…ほんとに良いツッコミするなコイツ。まるでツッコミが手と足を持ったようだ。

「師匠…」

おっと…顔がにやけてしまった。いかんいかん…。

「すまない。じゃあディアンを遊ぶ^{イジ}るのもここまですて行こうか」

「マテヤこら。明らかにおかしい一言が組み込まれてんぞ」

「ナンノコトヤラ」

「わざとだろ。片言わざとだろ！」

「だから何だってんだよ！俺は…俺は…お前の事…」

「いきなり逆ギレされたかと思ったら変な台詞が！？」

「遊ぶ^{イジ}ために…！」

「最悪な一言来たーーーーー！！」

〇〇先生『良い台詞集』から抜粋。

「どこが！？どこが良い台詞！？」

「分からないからこそ良い台詞なんだよ」

「なるほど…って今納得しかけた俺が憎い…！」

「…お二人とも。そろそろ行きますわよー」

いつの間にか出立の準備をしていた他の三人はぼっかり開いた穴の前に立っている。空間を裂いたのか。

私は魔法でドレスを物質変換してＴシャツとジーパンに服を替える。

「今から？」

「そうよ、思い立ったが吉日ってゆっじゃない」

「おっさん。いいこと言ったー！」

「褒められちゃった てことは魔界遊園地の件、許してくれ…」

「なわけないだろうが。それとこれとは話が別だよ、おっさん」

「…目が怖いよ、嬢ちゃん…。絶対目だけで人を殺せるタイプだよ
ね」

褒められちゃった、照れるな…。

…なんだよおっさん。その褒めてねーよっていう目は…。

「まあ、師匠に睨まれれば誰でも力エルになりますよ」

…蛇に睨まれた力エルって事？酷くない？私の目ってそんな怖いかなあ？

「怖いですよ」

すっぱりといわれました…ええ。躊躇いどころか0・1秒の間も無く。

「私の心の声ってとっても漏れやすい気がするんだが…」

「体は嘘を付けないみたいですわ」

「イオ…なんだか卑猥に聞こえますわ…」

「…気にすると負けですよ、アリエラさん。それにどうせ師匠はその意味分らないですよ」

「何の話だ？」

「ほらね」

「そうですね」

「嬢ちゃん、純粹だなー」

…何でだろ、すごい馬鹿にされた気がするのは何故だろう…？

「…そんなことより早く行かないか？」

ディアンがいらいら風味を添えて腕を組みつつ私たちを見る。

「分かった」

私は一番乗りで黒い空間に入り込む。

ぐにゃっ

初めて魔界に渡ったときに使った荒業に入ったときと感覚が似ている。

ということとは…頭痛が…。

いやだ！絶対頭痛はやだ！普通の頭痛ならまだいい…が！

この場合は頭が裂かれるように痛くなる。分かりやすく言うのなら生爪を一気に剥いだ痛さが頭に延々と続く感じだ…。なんか余計分かりにくくなったかも…。

とにかく痛い！これを回避する方法は…魔力を固定して頭に巻く。

これで痛みは結構軽減される、タンスに小指をぶつけた痛みぐらいに。あれも地味に痛いよね。

そんな事を考えている内に光が見えてきた。

光は私を包み、来たるべき場所に私を導く。

光が徐々にひき目を開けると、周りに白い服を着た人がたくさん。

そして私はその中央。

ふと目線を下にさげるとあるのは大きな魔方陣。

.....
あれ？

出立の日（後書き）

まさか…これは…。

白悪魔（ノヴァ）（前書き）

異世界トリップじゃないです。
人間界です。

白悪魔（ノヴァ）

暗闇から抜けると、そこは想像していた遊園地ではなくて白い服を着た者が数十人ほどいる白い部屋だった。

一体何が起きたんだ？

私は軽く混乱気味になったがここは一先ず状況の把握だな。

「おい、お前。ここどこだ？」

目の前にいる金髪の青年に話しかける。

すると青年は顔を輝かせ、私の前で恭しく一礼した。

「我々の召喚にお応え頂き誠に有り難うございます、白悪魔^{ノヴァ}よ。ここは人間界でございます」

へえゝ人間界。てことは人間界には来れたんだな、よしよし。

…この際意味の分からない単語はスルーで行こう。軽く頭痛がするから面倒くさい。

「白悪魔^{ノヴァ}よ。貴方呼び出した理由はただ一つなのでございます」

一つじゃなかったらいくつ理由あんだよって話だね。大変だね、白悪魔^{ノヴァ}さん。

てゆうか人間界って分かったんなら早く遊園地行きたいんだけど…。ふう…イオ達はどこいったんだよ。

「お願いします！我が…我が一族をお助けください！！」

「知るか」

はい、一蹴。知るかなもん。私は早く遊園地で遊びたいんだよ。
しかも『お願い』だったら断ってもいいよね。

「……………そんな…」

なんでこんなにショック受けてんの？普通断られること想定してる
よね。

「ど、どうしてですか！？我々は貴方に尽くしてきました！それな
のに恩を仇で返すなど…」

うーわー。恩着せがましーわ、コイツ。

さつきから言ってる白悪魔^{ノヴァ}さんや。可哀想に。

「私は白悪魔^{ノヴァ}って奴じゃない。一般市民だ」

「…はあ？」

「一発で理解しろ、青年。どう見たら十四の女が悪魔なんてモンに
見えんだよ」

「それほどの魔力量持ってたなら誰でもそうおもっだろうが！」

「口調変わってんぞ。魔力は生まれつきだ、文句あんなら二度と動
けない体に解体してやる」

「…ごめんなさい」

ふむ…こいつ、もしかしてツツ^{ディアンと同じもの}コミの才能が眠っているのかもしれ

ん。

…どうでもいいか。

「トート！やめんか！その子は白悪魔^{ノヴァ}じゃなかるーて。確かに魔力は大きいが髪色に姿は全くちがわい」

「じ、じじ様！」

お、話の分かるような奴が登場か。

「あの方はもつとこう！ボンツキュッボンとした体形じゃ！こんな子供じゃないわい！！」

うん、殺そうか。ここじゃ制止役^{イオ}はいないから暴れられる。

死ね。くそじじい。

私は片手に魔力を収縮させ、大きな氷を造りじじいの中に閉じ込める。

凍死まで残り三十秒。

「じじ様！おのれ…出せ！小娘！！」

お前も同じ目にあいたいんか、青年。

「う、うわっ！あああああ！！」

青年を地面に這いつくばせて見る。重力を青年の周りだけ強くしたのだ。

ははは。愉快だ。

「おいおい…嬢ちゃん…。死んじゃうぜえ、お二人さん」

この声は……。

私は後ろを振り返ってみると声の主であるおっさんがそこにいた。

「おっさん！」

私はおっさんに氷つぶてを当てる。

「イタツ！いきなりなにすんのよ、嬢ちゃん！」

「全然遊園地じゃない！」

「あはっ」

「分かった。まずはその立てた親指をへし折ってほしいんだな」

「たたっタンマ！！やめてっ、おっさんも反省してるって！昨日の夜急いでプール作ったから寝不足でつい……」

「知るか、子供の期待を裏切った影響はでかいぞ。おっさん」

片手に炎を発生させる。

焼かれて堕ちろ！命名、サンタさんが来ると信じて朝まで待っていても結局は来なかった子供の気持ち！！

「ながつ！ つーか今関係無いよねええええええええええ！！？」

おっさんは炎に包まれるが次の瞬間には炎が消え、中からは無傷のおっさんが。

チッ！やつは殺れなかつたか…。

「嬢ちゃん…今のマジで殺る気だったろ…。おっさん恐怖というものを味わったよ」

「期待を裏切ったサンタは子供達の報復によって死んだんだ」

「…子供って怖いわぁー」

「そういう風に成長していくのが子供だ」

「嬢ちゃんだけでしょ」

パライイイイイイイイン！！

突如氷の割れる音がした。

どうやら回りにいた白服達がじじいを助け出したみたいだ、てゆうか今頃かい。

じじい、凍結しかけてんぞ。

あ、青年も今頃か…。引き出されたんだな。

…少し横に広がってる気が。

「貴様らああ！よくもじじ様とトート様を！許さんぞぉ！」

白服の一人が叫びだす。うっさいな…。

「待って待って。おっさん何もしてないって、やったの嬢ちゃんだから」

「罪を擦り付けなしてくれ。どうやったら十四歳が大人を二人も倒せるんだよ」

「擦り付けられたのこっちだよ。嬢ちゃん、こんなときだけ子供になるなんていい性格してんねえ」

「ふっ、いかに何を上手く使うかで人は決まるんだ」

「かつこいー」

白服は少したどしく後ろへ下がる。おいおい、何でだ。

「貴方達！一体これはなんなの！」

ん？いきなりきんきん喚かないでくれ。頭痛がぶり返すだろう。部屋の扉から白髪の女性が入ってきた。ぶっちゃけ面倒くささ百%。関わりたくありません。

「嬢ちゃん、なんか言ってるけど？」

「ここは『三十六計逃げるに如かず』だ。捕まれおっさん。転送！」

私はおっさんの手を掴み、転送を試みる…が。転送できない…。

「ふふん、お馬鹿さんね。ここは魔法が使えない神聖な場所なの。捕らえなさい！」

途端に白服共が沸いて出る。

お馬鹿…？面白いじゃないか、小娘が。

「…嬢…ちゃん…？」

自分でも分かってるさ、子供じみてることくらい…。
ただ今回ばかりは抑えれないな…。

「おっさん、離れてろ」

そこからは、記憶が無い。

「うめんな…さっ」

あれ？目の前に白髪女が…しかも泣いてる？

「ごめん…な…さい」

なんで謝ってる？反省するにしたって泣かなくてもいいじゃないか。

「嬢…ちゃん。やめたれって…ぐっ！」

おっさん？なんでそんなにぼろぼろなん？

私は辺りを見回すと白服が倒れていた。

…？

「何コレ？」

私は手に握っているモノを見る。

何かの…毛？

「わ、ワシの…毛根…」

じじいが私の持っている毛に手を伸ばす。これあんたの？

なんか…なにがなんだかさっぱりだ。

もしかしてこれ…私の仕業ですか…？

「おっさん…何が起きた？」

「覚えてないんだねえ…。はあ、これはプツンきちゃった嬢ちゃんが暴れまわった結果だよ。幸い死者はなし。…いや、死者を出さなかった…かね。まさしく白悪魔^{ノヴァ}みいだったよ」

「私がやった…のか？死人を出さずに？」

「そ。その暴れっぷりはまさに、太古に暴れた白悪魔^{ノヴァ}ごとく…。嬢ちゃん、まさか本当に奴だったりしないよね」

…信じられないな。切れたとはいえ、感情制御はできる。記憶はないし感情を制御も出来なかった…。おかしい。

一体、私に何が起きた？

白悪魔（ノヴァ）（後書き）

フィアンに異変が…。

次回にイオ達出ます。

ツッコミないとやりにくい…。

廻る齒車

…あの後、イ才達も空間の裂け目から出てきて無事再会は果たしたのだが一つ困ったことが。

そう、私の暴れた後だ。

イ才達は呆然と佇んでいる。

幸いにも血や重症人は出ていないらしく、辺りは赤く染まっではない。

「師匠…感情制御が出来なかったというのは本当ですか？」

「うん？ああ…」

「…おかしいですね。なんかありました？」

「いや…頭痛くらいしか」

「頭痛？」

「お前達もあつたろう。空間の裂け目を通ったとき」

「………そういえば前も師匠は頭痛がすると言っていましたね。俺達はなんともありませんよ」

「え？そうなのか？」

「はい。私達はなんともありませんわ」

…つむ、私だけ頭痛に異変か。気に入らん…。

もし誰かの仕業だったらすいつを生き地獄に遭わせてやる、頭痛痛
つてーんだかな。

それにしてもまずは遊園地だ。

「なあ…遊園地は行かないのか？」

思わぬところで遊園地の声が。

ディアン…やけにそわそわしてると思ったら、行きたかったんだね。

「うん、行こう」

「嬢ちゃん。奴^{やつ}さんは簡単には通してくれないみたいよん」

目の前を見るといつの間に増援を呼んでいたのか、白服が増えてが
つちり周りをホールド。

てゆうかこいつらは一体何なんだろ…、めんどくさい事この上ない。

「姫様の敵^{かたき}だ！皆、かかれー！」

白服たちはその声に従い、私達に襲い掛かる。

だが、手に持つその刃が届くことは無かった。

何故なら私達は一瞬にしてそこから消えたのだから。

種明かしをしようか、簡単にいうなら走った。全力で。

ありえないことじゃあ無い。アリエラ・ディアンをイオが担いで走
ったのだ。

イオは水竜の力を持っているし、おっさんは魔王。私は普通に走っ
て姿を消せる。

全力で走った私達は、部屋をでて数分後。

ー遭難しました。

「はっはっ…ここまで来れば、魔法使えますかね…」

イオは片手に水を具現化させる。

チャプンと水の球体が空に浮いた、使えるな。

「いきなり…何が起きた？突然イオに掴まれたかと思えば…多大な吐き気が…」

ディアンは顔を真つ青にして唸っている。

亜音速に達した速さで走ったからきつかったろうな、ぶっちゃけ私も軽く気持ち悪い…。

「にしてもどこよここ…。逃げたはいいけど遭難したみたいよ」

「一難さってまた一難…か」

「今にピツタシな言葉だねえ」

「…まあ一先ず、転送する？」

「どこに？嬢ちゃん」

「…王都？かな。そこしか座標知らないもん」

「王都…ねえ。ま、いんじゃない？」

決まりだな。私はそこから王都へと転送した。

「白の教会」

「おのれ！おのれえ！あの小娘共、許さない！今すぐ王都に連絡を取り、抹殺命令を出しなさい！！」

フィアンらの去った部屋で姫様と呼ばれた女性は白服らに命令を下す。

「姫様。どうぞ落ち着きを…」

金髪の青年、トートは姫様を抱きしめる。

「トート…」

「姫様…申し訳ございません。あんな奴の言葉を信じ、召喚など行つてしまつたばかりに…」

トートは顔に苦悶の表情を浮かべ、過去の奴のことを思い浮かべる。

「そうよ！奴はどこなの！？絶対成功するからって！失敗しないって言つたのは…奴なのに！！」

「すまないが、僕は成功率は高いと述べただけだ」

ふと暗闇から声が響き渡る。

「…っ！その声！！」

「それに君達には悪いが僕はただ妹に会いたただけでね。魔界にいと連絡を仕入れたから君達を利用したただけなんだ」

「なっ！！？」

「本当に悪いとは思っているよ、けどね母から妹の事を聞いた途端会いたくなつてね」

「そん…な、そんな事のために！私達を！！」

「…ああ、そろそろ時間のようだ。…消えてくれ」

グシャっという音と共に肉片が辺りに飛び散る。

暗闇の男はゆっくりと歩みを進める。

光に当てられ、現れたのは長身でフィアンと同じ銀髪碧眼の男だっ

た。顔は端整に整い、爽やかそうな顔立ちだ。

「すまないね。第二皇女サマ…と騎士団長サマ」

顔には笑顔だけが張り付いているその男はさらに歩みを進め、扉の前まで来ると立ち止まる。

クスリと笑い、彼は口角を上げる。

「ふふっ…。王都に向かったんだね。そっちは僕の手駒が大勢いるよ」

フィアンですら使うのが困難な世界最高魔法のうちの一つ『千里眼』を彼は難なく使い、見る。

「待っててね。まだ見ぬ僕の可愛い妹のフィアン♪」

心底楽しそうに、そして愉快に嗤いながら彼は扉を開ける。

フィアンらの知らないところで歯車は廻り始めていた。

廻る齒車（後書き）

何か…ヤバイ奴登場？

もしかしたらフィアンの上をいっちゃいます。

ちなみに姫様とトートはいちお愛し合っていた仲でした。

兄の登場

私達は王都に着くと、城へ向かうこととなった。なんでもおっさんと国王は飲み友らしく仲が良いのだそうだ。つーか飲み友って…。おっさんの性格が現れたような友達だな。国王と魔王が飲み友って普通あるかな？

「んじゃ、城へ向かいましょうか」

おっさんの一声で城へと向かうことになった。もちろん城下というものを楽しみたいので歩きで。

城下には様々な物が売っていて、中でも目を引いたのが『サクツと逝きたい方へ、グレグコリットの内臓五味！*注：惚れ効果もあります』が飲んだ瞬間、逝ってしまいますので効果はありません」

ディアンは「何だよコレ！注の書く意味ねえだろうが！」と言っていた。

私は他にもツツコミ所があるだろうと叩いたら「ありすぎてツツコめないから！」といわれた。

納得。けど面白くない返しだったのでデコピンした。
勢い良く吹っ飛んだ。

「フィアン！見てくださいますし！怪魚が泳いでますわ」

アリエラの指差す方向には大きな水槽の中で魚が泳いでいた。

…アレを魚とっていいのだろうか？

魚は思い切り人の顔だし水の中で溺れかかってないか。

心なしか背中らへんにチャックが見える。

「師匠、これあげます」

イオが私に首飾りを見せる。真ん中が淡い青色に光っており綺麗だ。

「ありがとな」

「喜んで頂けたなら嬉しいです」

…凄く嬉しいよ。イオ。

「付けてみてもいいか？」

「俺が付けますよ」

イオがふわりと私の髪をかきあげると首にひんやりとした感触が降りる。

贈り物…貰うとうれしい物だ。

「フィアン…綺麗ですわよ」

「ああ、似合ってる」

「女の子って感じだねえ」

正面から褒められると流石に気恥ずかしい。

「とっても可愛いです」

全身の血流が顔にいったのかと思うくらい顔が熱くなった。なんだか妙にむずがゆくなり顔を背けてもう一度礼を言った。

「さて、皆。城下ではしゃぐのもここまでにしてそろそろお城行かないかい？」

おっさんがいつの間にか買っていたキャンディやチューインガムにお面、ポップコーンと何かのぬいぐるみを抱え、お城を指差す。
一番はしゃいでる人に言われたくありません。

「そうですね、国王に会ってみたいですから。そのついでに遊園地の座標を聞けばいけますからね」

「そうと決まれば早く行かないか？遊園地が楽しみなんだ。俺は」

ディアン…言っちゃったよ。遊園地楽しみて言っちゃったよ…。
どんどんイメージが塗りかえられていくな。ツツコミー戻って来い！。

常識人の君が消えてくよー、本体に戻れー。

「お兄様！子供じゃないんですから。いくら小さいときに遊園地へ行こうとした前日に魔王様失踪事件が起きて行けなくなった過去があったとしてもお兄様はもう五百歳なんですよ！」

まさかの事件発覚。結構つらい過去だね、それは。
しかも五百歳って…意外にいつていたんだね。
あれ？じゃあアリエラって…。

「おっさん、謝ったれって」

「えー？おっさんのせい？」

百%。今の話で違うといえる奴は脳の思考回路が違う風に組み込まれてる奴だけ。

「えーと…悪かったねえ、ディアン君」

「いえいえ！！トンでもございません！魔王様はこれっぽちも関係ありませんよ！！」

はい、ここに脳回路のおかしい奴がいます。

今度いい医者知ってるから教えてやるよ。解体好きのマッドサイエンティストだけだ。

「…もういいからいきませんか？」

イオが切り出す。うんざりという顔だ。

「そうだな。早く遊園地に行きたいし。イオ！アトラクション全制覇するぞ！」

「悪いけどそれは駄目だよ」

……………え？

突如謎の声が城下に響く。私達は一瞬固まる。

「…誰だ？」

何でも凍らせられるような冷たい声を出す。

「嬢ちゃん……」

「ああ」

私達は何が起きているかは全く分からないが何かがヤバイという事だけはひしひしと分かった。
辺りにどんよりと暗い影が広がる。
なんだ？何が起きてる？

「はじめまして、僕の可愛い妹さん」

辺りに警戒は飛ばしていた…はずなのに。

何故目の前に人がいる…？

いきなりだった、いきなり目の前に人が現れたのだ。

一瞬混乱のあまり固まってしまったがすぐに状況を理解する。

「…………ツ！うらああ！！」

目の前の人を投げ飛ばす。

そいつは吹っ飛び向かいの店に突っ込む。

ぱらぱらと煙が上がり吹っ飛んだことは確認できた。
全力でやったから気絶はしているものとおもった。

なのに…なんで……

無傷で立っている…？

ありえない…まさにその一言に尽きる。

奴は人間か…？

「ひつどいなあ…いきなり投げ飛ばすなんて…。あ、そうか。自己紹介が遅れたね、僕の名前はノヴァっていうんだ」

いや…それよりも最初…奴はなんと言った…？

「君の生き別れの兄妹だよ、フィアン」

「そんなの知るか」

私は目の前の男に吐き捨てる。男は目をぱちくりさせる。

兄妹？知るか、んなもん。こっちはシリアスなんて入れる気無いんだよ。

分かったらさっさと帰れや。無駄にシリアスさを振りまきやがって兄妹？いきなりで驚いたがそれだけだ。

こっちは別にそういうのは興味ないんでね。

さっきまでの楽しい雰囲気ぶち壊しだよ。ああむかつく。

「え…？」

「兄妹だから？何？いきなり現れて鬱陶しいこと極まりないんだが。血の出所が同じ。で、それがどうかしたのか？」

「…もつと驚くのかとおもってた」

「期待を裏切つてすまないが私には興味すらわからない話だ。分かつたら消えてくれないか？」

男は驚きを顔に表すも楽しいといった顔だ。

こうゆう輩は一番面倒くさい。

「おっさん、行こう。早く遊びたいんだ」

「ぷっふふ…。兄妹告白に少しも動じないなんざ嬢ちゃんらしいねえ…」

そいつはどーも。褒め言葉として受け取っておこう。

「フィアン、いきなりで驚きましたわ。けど興味がないという点では激しく同意できます」

「…俺の事じゃないよな、アリエラ。そろそろ悲しくて涙が落ちてきそうなんだが」

ディアンは目頭を押さえる。

「師匠…」

「イオ」

「……………遊園地、全制覇しましょうか」

「…ああ、もちろんそのつもりだが」

私達は男をスルーし、通り抜けようとするが腕が掴まれる。不覚。

「まさかスルーまでされるとは思って無かったよ。けどそうさせる気、僕には全然無いから」

「知るか、そっちの都合だろうが。私は関係ない」

「関係…あるっていったら？」

「それでも無視するまでだ、いつまでも変人と関わりあう趣味は私には無い」

「ふふつ。兄を通り越して変人扱い何て、面白いねフィアン」

うわっ…今寒気が…。名前呼ぶなよ。

「面白いこと好きなんだな」

私は手を振りほどいて城へと向かった。

「またすぐに会うことになるよ。今のはただの顔合わせと宣戦布告…かな」

「ほざいてろ、二度と会うことはない」

「必ずまた会っよ。必ず…ね」

含みっぷりが気に入らない。

私はその場からすばやく離れ、城へと向かった。

兄の登場（後書き）

次はお城です。

魔王の飲み友登場。

名前は出しません。

拉致（前書き）

国王とおっさんのキャラを酷似しすぎました。

拉致

私達は城に着き、謁見を申し込むと国王がすぐに会いたいといった
そうだ。

さすが飲み友。

ついさっきの嫌な気分はまだ続いている。

平静を装ったがかなり驚いた。

自分にまさか兄がいるなんて思いもよらなかったし私の攻撃に無傷
で耐えたんだから。

…まあ、気にしないのが一番だな。

今頃家族に会いたい等とは思わないし、どちらかというと二度と関
わりたくないな。

「師匠？謁見に行きますよ」

イオが私の顔を覗く。

「分かった。今行くよ」

私は皆の元へとかけると大きな扉の前で立ち止まる。

「あの…お兄さんの事気になるんですか？」

ドキリと心臓が跳ねた。

「……………驚いたが気にはしてない。どっちみち二度と会うことは無
い」

「随分バツサリですね」

「当たり前だ。家族など興味は無い」

ふんつと胸を張ってみせる。イオは苦笑。
そんなこんなのに扉が開く。

ギイイイイイ……ドバンツー！

「おひさ〜！デスちゃん！！」

ドバンと扉を蹴り開けたのは目の前にいる白髪の三十代。
瞬時に理解した。

コイツおっさんと同類の人間だ、と。

「ヤッホー！オーサン！！」

おっさんとその同類はガシッと抱き合う。

…おっさん同士の抱擁。見てて気分のいいものじゃないな。
つかテンションの高さについていけない…。

「今まで何してたの？デスちゃん！わしめっちゃ心配したのよ！」

「ごめんねえ、オーサン。ちょっと面白い子達に会っちゃってさあ」

「マジで！わしにも紹介して！」

すげえ……。第二のおっさんだよ。略してニーサで。

多分国王……なんだろうけど…ね？今までの情報からすると…。

「こつちが吸魔鬼のアリエラちゃんにディアン君！」

「よろしく！わしは国王よ！王様…だから気軽にオーサンって呼んで！」

「んで、イオ」

「…？なんか聞いたことあるような…」

「気のせいですよ。国王」

「うゝん…？」

「最後は本命！嬢ちゃんことフィアン！」

「うひょおお！！この子が…あの伝説の『零氷大武神』れいひょうだいぶしんかあああ
！！」

「え？何それ？」

「デスちゃん、知らんのか？この子は世界に名を轟かしてる最強の人間よ」

「マジでか！嬢ちゃん、強いと思ってはいたけどそこまでとは…！」

「何度も騎士団に勧誘してんだけど断られてんの」

「当ったり前じゃボケ。騎士団なんかめんどくさい、お前が命令出してたのかよ。」

「てゆうか何？その名前…。初めて聞いたんだけど…」。

そういえば城下で凄く見られていたな。名前も呟かれてたような…。

「中々入ってくれないから嫌がらせにフィアンちゃんの名前に写真、プロフィールを国中にばらまいたの!」

「てめえの仕業かああ! 国王おおお!」

「あは 入れ」

「断固却下!! 国ごと滅ぼすぞ!」

「サーセンした、マジやめて下さい」

なッ! これは…東洋秘伝の…土下座!!

しかも僅か二秒で…。

こやつ、やりおるわ。

「国王…分かっているな…」

「ふッ、〇〇先生の『究極の土下座の仕方』やっていれば報われる
」を分かつとは…。零氷大武神の名は伊達ではない…」

「ふふふ」

「ははは」

「うん!」

「ふむ!」

ガシッと右手を固く結ぶ。ここに友情が生まれた。

「…何？この茶番…」

ディアンのツツコミは無視で。

「よし！フィアン！朝まで飲み明かすぞお！！」

「おー！！！！」

「待て待てこらああああ！！まだ昼だし！フィアンは未成年！まだ酒を飲んじゃいけないから！！」

「酒は何がいい？」

「一番強いので」

「俺の言葉は無視すんなあああ！止めろ！止めろって！」

バシッと国王の懷から出された酒がディアンに奪われる。初のお酒だったのに！

「…というわけで遊園地の座標を教えてくれ」

「ああ…あそこはあ…ひつく…3068」

「ふむ…分かった」

王の謁見の間にはふさわしくない酒瓶があちらこちらに転がり、兵士は呆然。

床には血の跡とディアンにお酒に漬れたイオとアリエラ。

おっさんは私達と一緒に酒をがぶ飲み。

そう…ディアンから酒を取り返し、お酒体験満喫中なのだ。

私はお酒に強いほうらしく、国王やおっさんの二倍以上飲んでも意識ははっきりとしている。

「さて…そろそろ行くか。おゝい起きて」

私は手当たりにイオとアリエラを起こす。

するとアリエラは起きたがイオは未だに意識不明である。

「ふいあん…頭がくらくらしまずわ…」

「遊園地…行くよお」

「分かりましたわ…」

アリエラはよろよると立ち上がる。

よし、一人オーケー。

次は…

ドゴオオオオオオオオオン！！

突如扉が吹っ飛ぶ。ワット？

もくもくの煙の中から現れたのは銀髪が一番会いたくない奴、ノヴァ。

「やあ、フィアン。君を攫いにきたよ」

ついに頭のいつちゃった感じが？

わらわらとノヴァの周りを兵士が囲い始める。

あ、侵入者には反応できたんだ。偉いじゃん。

「屑が僕に寄らないでくれる？」

しかし兵士はあっけなく吹っ飛び気絶。よわッ！

「さ、フィアン」

いやいや、その手は何ですか？取らないからね？

とゆうかおっさん達は何してんの？

「ストレートロイヤルフラッシュ！！」

「うがぁ！負けたぁ！」

なんでポーカーやってんだぁああぁぁぁ！
今の状況に何の危機感も無しかよ！？

「フィアン…あの人…」

「…アリエラ。私の傍を離れるなよ」

アリエラは私の服をキュウつと掴む。

今この状況に対応してるのは私とアリエラのみか…。
さて…どうするかねえ。

「ツーパー！」

「まだまだあ！フォーカード！！」

よし、あっちの二人は後で殺すか。

状況察しろや、おっさん馬鹿二人組みが。

「くすッ。フィアン…、助けは無いものと思ったほうがいいよ」

アホか。誰が助けなんているかよ。お前ぐらい簡単に殺せるがアリエラの前で殺したくは無いだだけだ。

「兵士さん。やっちゃって」

とんつと軽い音が頭の中に響く。

「なッ…」

ふと視界に入っただのは先程吹き飛ばされた兵士の数名が私に矢を打った姿だった。

矢は腹に命中し私は倒れこむ。

アリエラは既に倒れていた。いつの間に…！

「ぐッ！ああ…」

腹に手をあて気を失うのだけは防ぐ。

「うおっしゃああ、フルハウス…！」

「ぬあああ！フラッシュ…！」

いいかげん気づけえ！！あの二人！！
まじでポーカー止めるオ！

「ふふっ。気を失うのを耐えるなんてね。けど毒を塗りつけてあるよ。もう体が痺れ始めてるんじゃない？」

目の前の男は笑みを絶やさずそう言う。
何を企んでる？こいつ…。

「…毒ごときに、負けるか…ッ！『エルシエント』…！」

私はノヴァの上に雷性を帯びた炎を落とす。

「惜しい」

何なりと破られたが。

「氷炎…それは魂をも…焼き尽くす絶対零度の炎…具現化せよ
アイ……」

毒のせいか上手く口が回らない。体には激痛が走り、意識もボウツとしてきた。

く…そ…。

がくんと意識が暗闇に落ちた。

「危ない危ない。流石に最上級魔法はねえ。毒が回ってくれてよかった、おやすみ」

最後に見た奴の後ろにはイオが横たわっていた。

イオの…馬鹿。

拉致（後書き）

…？

話がおかしくなってる？

閑話…とある兵士の一日（前書き）

兵士の視点です。

前話とリンクしてます。

閑話：とある兵士の日

ギイイイイッと王の謁見の間の扉が開いていくのを俺、兵士Aは静かに見ていた。

なんと今日はかの有名な『零氷大武神』が来るとか。

この人は聞いた話によるととにかく最強らしい。

魔法は最上級魔法を使いこなすわ武術は騎士団を素手で全滅できるんじゃないかというほど。

…化け物か？

更にはあの水竜をも倒し、平伏させたとか…。

しかもまだ十四歳の少女らしくその姿は可憐だとかで俺達兵士では超人気である。

零氷大武神の他にまだまだ通り名はたくさんある。

人と接触を好まない事から『孤高の少女』、冷たい性格から『氷の姫君』。

実は面白いことを好むことから『可憐なる帝王』と。

騎士団の中ではファンクラブまであり、筆頭は騎士団創立者である。国王もファンクラブメンバーだとかとにかく大人気なのだ。だから…謁見の間は大きく静まり返り扉が開ききるのを待つ。

しかし！王は玉座から飛び降り、扉を蹴り飛ばした！

何故だあああああー！！

きつとここにいる兵士全員の思惑だろう。

普段は冷静沈着、賢王と名高い国王がよりにもよって扉を蹴飛ばしたのだ。

しかし驚くのはコレだけではなかった。

国王のキャラが壊れた。こうしかいえないだろう。

だって！何あのキャラ！？普段の冷静沈着のあんたはどこへ行った

んですかあああ！！

国王は扉を蹴り開けたかと思ったらいきなり目の前の三十代くらいの男性と抱き合い、友好的に話しているのだ。

「最後は本命！嬢ちゃんことフィアン！」

え？つと俺は意識を元に戻す。

中央に立つ少女は間違いない写真で見た『零氷大武神』の姿。

さらさらとした光輝く銀髪に海を思わせるような深い青色の瞳が白い肌によく映えている。

…服装がTシャツにジーパンというのに高級な服装に見えるのは俺の目がおかしくなったのだろうか。

それに彼女だけでなく隣にいる男もかなりの美形だ。

整いすぎている顔に黒髪黒瞳がヤバイほどあっていて男の俺でもクラリとした。

その後ろにいる女性も美人…金髪カールがお嬢様風味を与えている。

更には紫色の髪と瞳を持つ男はクール系で切れ長の目がかっこいい。

……何？この美形集団。

何気に国王と抱擁を交わしている男性も渋くていい男って感じだし。

ん？あの黒髪の男って…半年前に失踪した伯爵家の長男に似てるな。

そつえば…あそこも今大変なんだよなあ。伯爵家は俺のものだとか言い出す変な男…もとい子爵家の当主がでてきててなあ…。

ま、今は関係ないか…。

にしても…ホント可愛いな、フィアンちゃん。

ちなみに俺もファンクラブ入ってます。？1834と随分下だけど

ね。

「断固却下！！国ごと滅ぼすぞ！」

うわあああお！いきなりびくったあ…。

あ、あれは…フィアンちゃんか。国ごと滅ぼすって…。

ああ…かつこいいな…。

あんな可憐な容姿にそんな言葉って…。

ヤバイ…って、萌える…。

後ろを見れば兵士仲間達が悶えていた。

端から見ればドン引きだろうが悶えたい気持ちはよく分かるよ！同志よ！

「あはははっ！もっと飲めっておっさん！！」

「ちよっ！無理！！ガボガバツ！！」

…少し見ない間に何があったんだろうか？

さつき国王と抱き合っていた人がフィアンちゃんに無理やりお酒を…

っとお酒ええええええええええ！！？

待て待てえい！！ここ神聖な謁見の間だよ！

なんでお酒！？てゆうか国王もちやつかり飲んでるうっ！！

国王うっ！あんた本当にどうしちゃったんですか！

フィアンちゃん！その手に持つてるお酒！飲んでないよね？あなた未成年だよな？

「あはは！お酒最高！！」

飲んでたあああ！！しかもあれアルコール度数80の『神墮とし』

だ！

大人でも一口で意識不明なのになんで平気なの！？

「あ、そういえば国王。私達遊園地行きたいんだけど座標知らないんだ、というわけで遊園地の座標教えてくれ」

「ああ…あそこはあ…ひつく…3068…だっけ？」

おお…。国王…俺達の貴方への尊敬度が急降下していきますよ。
なんで酔っ払うほど飲んでんですか。

俺…兵士志望理由に貴方みたいな尊敬される国王を守ってゆきたい
と書いたのが馬鹿らしくなってきました。

俺は軽く絶望に打ちひしかれていると突如大きな音が部屋に鳴り響
いた。

大きな音は扉が吹っ飛んだことみたいだ。

……って冷静に分析しちゃったけど！どうなってんだ！！？

中から現れたのは銀髪のキラキラ美形男。

ちくしょう…また美形かよ…。リア充爆死しろ。

…少しブラックになっちまったぜ。

こんなこと考えてないで早く侵入者を！よくよく考えれば俺は兵士
だ！！

俺は美形男に勢いよく突進する。

「屑が僕に寄らないでくれる？」

はい。ごめんなさい。爽やかなお顔が見事なまでに合わないお言葉
ですね。

次の瞬間、俺は男の起こした突風のようなもので吹っ飛ばされて壁
に激突。壁の大理石が痛い。

ちくしょう、無駄なところで金かけんなよと尊敬しまくっていた国王
に殺意を抱く。

ふと見ればポーカやってるし…。

危機感無いですか。そうですか。

ざけんな、ちくしょおおおおおおおおおお！！！！

俺の心の中は円グラフで表すと、
国王への信頼・尊敬が1%と99%の国王への殺意だな。我ながら
なんて簡単な円グラフだろうか。線を一本引くだけだ。

(ズキンッ)

先程壁にぶつけられて痛めたのか背中から腰がズキズキと痛む。

ちくしょー俺も兵士として敵をなぎ倒して出世して女が寄ってきて
…。

なんて痛い夢なんだ、くすん。

「ぐッ！ああ…」

なんか…痛みに耐えたような声が…。

!!!!!!!!!!?

フィアンちゃん!!!!!!

なんとフィアンちゃんが腹に矢を打たれているのだ！

しかも打った弓をもっているのは…兵士仲間のデイソン！！

なんで…！

デイソン…お前！？456だろう！！そんなお前が…！

「おやすみフィアン。とっても可愛い僕の妹」

いつの間にか気を失ったフィアンちゃんが男に抱きかかえられて何
処かへ連れ去られようとしている！

フィアンちゃん！

「待ちなさい！フィアンは…連れていかせませんわ！放しなさい！

この…変態!!」

なんと!金髪カールの女性はわき腹に刺さっていた矢を抜き、立ち上がったのだ!

にしても美形を変態呼ばわりとは…勇気あるな。

「あれ?君のにも毒が塗ってあったはずんだけど」

「吸魔鬼に毒は効きませんわ!…痛みは効きますが」

「へえ、吸魔鬼なんだ。どうでもいいけどあまり大きな声で叫ばないでくれるかな。フィアンが起きちゃうよ」

「それは好都合です。フィアン!起きてくださいまし!連れてくれますわ!!一緒に遊園地へ行くんじゃないやありませんの!」

「遊園地へは連れて行かせないよ。この子はこれからずっと僕と一緒にいるんだから」

変態発言!?!だが美形がいうとそう聞こえないのは美形の特権か!?!羨ましいな、こんちくしょう!

ってこんなこと考えてる場合じゃないって!立ち上がらなきゃいけないのに!

(ボキッ!!)

あっ……………、どっか折れた…。
くふっ…………。

「…貴方はなんなんですか。いきなり現れたと思えばフィアンを攫おうとしたり変態発言をしたりと、一体何が目的なんですか!?!」

「…もう、うるさいなあ」

う…ん？

はっ！美形が金髪美人の首に手刀をおとし気絶させて抱えあげた。

（ズキッ）

おう…ふ…。

「面倒くさいから一緒に連れていこうか。向こうで殺っちゃえばいいや」

そのまま男は破壊された扉から去っていった。

残されたのは、吹っ飛ばされた俺含める兵士多数と、

床に横たわる黒髪美形と紫男にまだポーカーに夢中の国王と相手方の三十代男性。

俺…兵士をやめていいですか？

閑話・とある兵士の一日（後書き）

もしよろしければ感想をお願いします。

目覚めたら…（前書き）

そろそろ…後半戦？

中盤戦かな？

目覚めたら…

「…ん、あ……？」

「おはよう、フィアン」

ふと気が付くと何故か目の前の銀髪の男が至近距離でニッコリと笑っていた。

微かに吐息もかかっているほどに。うん、近いな。

「お前は……」

「随分なぐっすりだったね。寝顔、とっても可愛くて食べちゃうとこだった」

「よし、まずは状況整理だな。

えーと…気絶して、目の前にコイツがビクアップ。

はい。整理完了。

って納得できるわきゃねーだろうが。

そっういえば攫いにきたよとかなんとか…。

攫われたってーことはこいつのアジトかな？ここは。

「一先ず聞かせて欲しいことは1634個あるんだが面倒くさいから3つにまとめよう」

「うん、どこをどうまとめたらそこまで減るのか不思議でしょうがないけどね。いいよ、聞いて」

「…………お前の名前なんだっけ？」

「うわああ。地味に傷つくなあ。僕はノヴァだよ、かっこいいでしょ?。」

「そうか、頭のイカレた犯罪男だな。ピッタリな名前だ」

「…弁解をさせてもらっても…」

「二つ目、ここは?」

「あっさり無視なんてすごいね、フィアン。ここは『血の大海』だよ」

知らないところだな。なんて物騒な名前なんだ。

「三つ目、好きな殺され方は?」

「…なんて物騒なことをきくんだろっね? 君は」

「安心しろ。しっかりと望みを叶えてやるから」

「あはは。遠慮しておこうかな」

しばらく笑いあった後に、私は今自分がどんな状況なのかやっと気づいた。

なんと足首と手首に重厚な鉄かせがはめられているではないか。ご丁寧に魔力封印も施してある。

「さて…と。えいや」

バキリッ！

「よし」

「…一応凶暴な上位魔族を捕らえられるものなんだけどね」

私は鉄かせを引きちぎり、自由を手に入れた。

…とは言えないか。

なんか結界もはってあって魔力が使えない。

しかも妙に腹が痛いぜ。

あ、矢が刺さったんだった。

「さーとー、行くか」

「どこに？」

「城」

「行かせないよ。君は僕と一緒にいるんだから」

…犯罪男はグイッと顔を近づける。

（ドカツ）

あ、反射的に手が…。

「いたた…」

「すまん。とゆうわけでさらば、私は魔王と国王を地獄に落とす使命が残ってるんでな」

「…どこがとゆうわけかわかんないけど、行かせないってば。…人

質もいるんだよ」

「人質？……………」

「そこまで考えて結局分らないんだね。吸魔鬼の女だよ」

（ドッ！！！！）

私は瞬時に男の腹に拳を減り込ませ、ふっ飛ばさせる。
ざけんな、こら。

アリエラはお前なんかにはやらん！

とゆうか地味に本気で殴ったから逝っちゃったかな？逝ってるよね？

（ドオン！）

吹っ飛んで瓦礫の中に埋まった犯罪男は何食わぬ顔で出てきた。
ちなみにどうでもいいがここのお城？結構豪華なんだけど。
私の下もやけにふかふかと思ったらベッドじゃん。

「いきなり酷いね。大丈夫、まだ殺してないから」

…安堵しているのか、悪いのか。

まいいか、救出してこっから出ておっさんら殺って遊園地行こつ。
そうと決まれば…脱出。

「まだ…ねえ。アリエラどこ？」

「隣の部屋で寝てるよ」

ふむ…おらあッ！

（ドンガラガッシャン！）

隣の壁をぶち破る。なかなかもろい…。

隣の部屋を覗けば眠っているアリエラがベッドにいた。
よかった…。無事みたいだ。

見た目無事…、手錠もなし！

私はアリエラを抱えてバルコニーへと出る。

「どこ行くの？」

後ろからゾクリとするほどの冷気を感じる。

「…言つたろ、城」

「出ない方がいいよ。下にはゾンビがいるんだ」

「ゾンビくらい薙ぎ払えるが？」

「下には魔方阵が敷いてあって、そこに乗ると生命力を吸い取られちゃうんだ。君は無事でもそっちの子はどうなるか分からないよ？」

む…面倒くさいことだ…。

確かにアリエラに負担はかけられん。
困った困った。

「じゃあ、どうしようか…？」

「ひとまず座って。テーブル用意したから」

「はいよ」

私は部屋の中央に置かれているテーブルに座る。
アリエラはベッドに戻して。

「やっと…話ができるね」

「こっちは話すこと無いが」

「あはは、僕が君をどうして攫ったとか聞きたくないの？」

「…ああ。そういえば」

「簡潔に言つとね、僕が君を攫ったのはある事に協力してもらいた
いからなんだ」

「面白いことなら協力してやろう」

「ふふつ。協力してもらいたいことはね…」

「はい、ふざけんな」

レッツ即答。

「ふざけてないよ。至って大真面目さ」

「どこをどう考えたら魔族の殲滅なんて考えが出てくる？人と魔族は上手くやっている。別に魔族が脅威なわけでも無いが？」

「うん、確かに上手くはやっているね。反吐が出るくらいに」

「…一応理由を聞いておこうか？」

「魔族ってね、いるだけで世界に害を与える存在なんだって知ってた？魔族は体から微量に瘴気っていう毒を出すんだよ」

…それは初耳だな。

だが害悪とは聞き捨てならん。

「僕の愛しい人が瘴気に汚染されてね。治すには原因となっている

魔族を殺さなきゃ駄目なんだよ」

「ふん。恋人とやらか、それは大変だな。結論から言えば協力する気は無い」

「それは困るなあ。僕の力だけじゃ魔王をやるなんてのは無理だもの」

私を利用するとは面白い考え方をするものだ。

だからいきなり現れては攫って協力仰ぎか。馬鹿馬鹿しい。

今思えばあのときの宣戦布告というのは魔族であるおっさんとアリエラ達に言ったものだったのか。

「そうだな、お前ごときではおっさんの力に太刀打ちできないだろうな。諦めて恋人の最後でも看取ってやれ」

「僕の恋人だけで済むと思う？もしかしたら君の大切な人も瘡気に汚染されちゃうかもよ。イオ…だっけ？あの子なんて魔族の傍にいるんだから」

「イオは水竜だ、それは無い。残念だったな」

ぐつと男は言葉をつむぐ。

流石に私を利用するという考えは捨てて欲しいが。

「さて…話はコレだけか？ならば帰るか、そろそろ逃げられないふりも飽きた」

途端にパアンと何かの弾ける音がする。

結界をやぶったのだ。

こんな結界は初めから破ることは簡単だったが、少し探るために逃げられないふりしてみた。

「アリエラ、起きろ！」

私はアリエラが目覚めきるのを待たないまま、アリエラを掴み王都へ転送。

その場から私とアリエラは消えた。

「くすつ。君が逃げないふりをしてたことくらいわかってたよ、わざと弱くはっていたんだから」

残った男は不敵に笑い、言葉を呟く。

「君には必ず協力をして貰うよ。そのために君という存在を知り、生かしてきたのだから。」

……………絶対に助けるよ、

僕の愛しき人
エリアーラ……」

男の頬に滴るモノは誰にも見られることはなかった。

目覚めたら…（後書き）

ノヴァの目的がやっと分かりました。
フィアンはそれに巻き込まれてます、
確実に。はい。

二界のトップに地獄を

「ただいま」

「まじサーセンした!」

転送術で城に着くそうそう目の前には頭を床にこすり付けた国王と魔王。

中々に見れないんじゃないか?二界のトップの土下座って。

「あはは、今まで何してやがったのか簡潔に答えてみやがれ」

「ポーカーです!」

素直なお二人さんだ。まあ嘘をつこうものなら理性がはじけ飛んでたかもね。

「うん、まさしくその通りだね。危機的状况に…ポーカーと」

「すいませんっした!つい…!」

さつきから腰低いなあ。仮にもトップだろ?

「ついで済まされるはずねえだろうが。とりあえず地獄を見せてやる」

瞬時にその場から二人が消える。

逃げ足が速い…。

本能で危険を察知したのか…?

（パリリ）

ん？何か一枚の紙が…。

『国王：3 4 連勝 5 1 連敗。魔王：8 3 連勝 4 連敗』

……………ぶちっ。

「……………おい、そこで寝ている兵士共」

私は紙切れを握り潰し、後ろに転がる兵士に呼びかける。

兵士は何かを感じたのだらう。瞬時に飛び上がり、私の前にひざまづく。

「奴らを見つけ出してここに連れ出せ」

あくまで静かに言葉を放つ。

兵士共はすぐさま立ち上がり、城中に散らばる。

ざけんなよ？あの二人。なんだ？あのでたらめな数字は。

私達が消えてもしばらくは…いや私達が帰ってくるまでやってたのか？

ふふ…面白いなあ…おい。

あの二人………殺す。

「う…うあ…？フィ…アン…？」

ふと抱えていたアリエラが目を覚ます。

「おはよう。傷は平気か？」

「ええ…。……っ！フィアンこそ！」

アリエラは飛び起きると、私の傷の部位に触れる。

「…無事…ですのね…」

ほうつと安堵の溜め息をつくアリエラに私は心がじんわりとあたたかくなる。

嬉しい…というものだ。

「零氷大武神様！！連れてまいりました！！」

大きな声が部屋に響く。

そちらを見ると国王と魔王の二人が縄でぐるぐるに縛られていた。思わず口角が上がってしまう。

国王を裏切るのか！とか、おっさん、魔王だよ！とか騒いで抗議しているがそんなこと知ったこっちゃない。

むしろ国王、民をまもるあんたは私を助けなかったよな？

「二人とも、とりあえず…死のうか？」

もう陽が傾いた夕方、王城から大きな悲鳴二つが城下まで響き渡った。

「と、そんな事があつたんですか？」

おっさん達にお仕置きをしてから翌日、朝食を食べているときにイオとディアンに昨日あったことを話した。

ちなみに国王は昨日から寝込んでいるらしい。おっさんも。

「ああ。ノヴァの目的は魔族の殲滅」

「……俺達の体からそんなものがでているのか？」

ディアンは自分の体をまじまじと見る。知らなかったんだな。アリエラは少し悲しそうな顔だ。

「本当はおっさんと国王にも話を聞いて欲しかったんだが寝込んでいるからな」

「その原因を作ったのはお前だが？」

「さらにその原因を作ったのはおっさん達だが？」

そう、言うなれば自業自得だ。

「とにかく私は利用される気はないし、アリエラを殺させるわけにはいかない」

「俺とデスト様が含まれてないのはわざとか？」

「もちろん、どうでもいい」

「……はは」

乾いた笑いをするディアン。なんか全てを諦めたような顔だな。

「で、どうするんですか？ノヴァはまた師匠に接触してくると思い

ますが？」

「そんな時は…無視だ。それが一番だ」

「うーん…。それが出来れば…ですけどね」

確かに…それが出来たなら攫われることも無かったなあ。

「まったく…遊園地へ行く気分じゃなくなっただじゃないか。下手すれば世界的問題に巻き込まれてんだから」

「師匠、考えてみたんですが。ノヴァの言っていた瘴気って…少しおかしいような気がします」

なんだ？いきなり…。

「ご存知のようにこの世界には神界・人間界・魔界と三つの世界が存在しています。神界と魔界は対照的な存在です。そして聞いた話によると神界に住む天使は清気というものを発するようです。もし二つの種族が対照ならばその…それぞれの発する瘴気と清気は対照ですので打ち消しあうことが可能となります。つまり…互いの種族は互いのモノを打ち消しあうことで今までこの三界は成り立っていたと思われます」

「なるほど？魔族の発していた瘴気は天使が打ち消していたため、今までノヴァの恋人のような瘴気汚染者はいなかった。だが汚染者が現れたということは」

「はい。神界に何か異変が起きたのかと」

そう考えれば全てに辻褃は合うな。
イオ…頭いいな。

「そうと決まれば神界へ行ってみるしかないな。何が起こっているのか気になる」

「分かりました。じゃあ、神界管理局に行きましようか」

「その方法もいいがあそこはいろいろと面倒だ。おっさんに空間の穴を開けさせて行こう」

「…とことん追い詰めますね」

私はおっさんの寝る客室へと向かう。

すると部屋から何か暗いオーラが漏れ出ている。
どーゆーこっちゃ。

「入るぞ、おっさん」

キイツと扉を開けると、中でおっさんと国王が向かい合って談話中。何故か妙に暗い上やつれている。

「何のようだい？嬢ちゃん」

全身ミイラみたいに包帯ぐるぐるのおっさんのくぐもった声が部屋に響く。

「神界に行きたいんで空間に穴、開ける」

「……嬢ちゃん、おっさんぼろぼろなんだけど？」

「そんぐらい治せるだろ？おっさんなら」

「まあそーね」

おっさんはゆつくりと体に巻かれた包帯を解いていき、無事な姿を現す。

国王は流石に人間だから無理かな？

「で？なんで神界なの？」

「話せば長くなるからおいおいと話す。神界で何か異変が起きているのかもしれない」

「…物騒だねえ、神に何かあったのかな？あいつとは最近会ってないけど」

「まあとにかく行こう」

「わかったよ」

おっさんが片手を前に差し出すと空間がガバアッと裂ける。

「あ、アリエラとディアン。お前達はここに残れ」

「え、何ですかの？」

「お前達には少しやって貰いたいことがある。耳を貸せ」

アリエラにそっと耳打ちするとアリエラは真剣な顔つきでコクリと

頷いた。

「とゆうわけだ、頼む。ディアンは後から聞いてくれ」

「…分かった」

「じゃあな」

私とイオ、おっさんは黒い空間の中に入り、いざ神界へ。頭痛は不思議としなかった。

しばらく中を浮遊しているとパアッと明るい光が射す。

光が体を覆いこみ、目を覚ますと綺麗な庭園と思われる場所にいた。

「…着いた、みたいだな」

周りは緑が生い茂り、蝶々や小鳥が囀っている。

庭園の奥に見えるのは白い宮殿。

ここが神界…。魔界とはまさに対照だ。

魔界はじめじめしてたけどこっちは空気が澄んでいる。

「嬢ちゃん、ひとまず神にでも会いに殴りこみに行く？」

「なんで殴りこみなんだ？普通に謁見で…簡単に会えないのか？」

「うん、無理。まず謁見申し込みして、長ったらしい書類を書いて許可を得るのに3ヶ月。そこから更に順番待ちで約5ヶ月。やっと謁見と思えば身分確認に謁見申し込み理由と危険性があるかないか調べるのに12カ…」

「殴りこみだ」

「りょくかい」

「…いいんでしょうか？」

イオの不安げな声は聞こえなかった。

だっておかしいでしょうに、魔界では一日がこっちじゃ軽く一年超えるってどうよ。なにこの差。

「そろそろ行こう。神の住む城へ」

「お前、神の神殿に行くのか？」

ふと空から声が降ってきた。見上げるとそこには羽の生えた子供が。羽は純白で小鳥のようなふわふわした感じのもので無性に触りたい。

「お前は？」

「名乗るときはまず自分から名乗れよ、このちび女」

「…むか。」

何だコイツ？確かに名乗らなかったのは悪かったかもしれないがうぜえ…。

落ち着け…私。相手は子供だ。むきになるな。

「…黙れ、餓鬼」

やっぱり駄目だったか。
むきになってまった。

「なっ！お前……！この俺によくも……」

「うっせー、しゃべんな。せっかくの空気が汚れる」

「こ、この人間……！」

餓鬼は顔を真っ赤にして私に掴みかかる。

おう……いい度胸じゃなか。

「ば、馬鹿！やめろっつてがきんちよ……！」

おっさんが餓鬼を抑える。

「こ、この……！放せよ……！この爺い……！」

「落ち着きなつて！あとおっさんはまだ爺いじゃない！おっさんだ……！」

どっちも変わらん気がするぞ、おっさん。

どんなポリシーがあんだよ。

「とりあえず二人とも落ち着いてください。師匠も無意識に魔力を溜めないで下さい」

イオが制止に入る。

なんといつの間にか溜めていたとは……。我ながら恐ろしい。

「……っ！お前……！」

突然餓鬼がイオをみて叫ぶ。

「イオ！なんでこんなところに！！人間界でゆつくり余生楽しんでくるって言ってたじゃねーかよ！！！」

「…はい？」

「はいじゃねーよ！もう戻ってくるつもり無いから、あとよろしくなって俺に全部押し付けて出て行ったじゃねえか！！！」

「…あの、すいませんが話が…」

「だいたいなんだよ！？そのキメエ笑顔にうさんくせえ口調は！！！」

「…キッ…！」

「どーゆー事だよ！！説明しろ！！！」

「とりあえず五月蠅い」

私はまくしたてる餓鬼に一発拳を腹に当てる。

ゴホッゴホツツと咳き込む餓鬼。

「な、にすんだ！いきなり…！」

理由は言っただがな？

とりあえず五月蠅いっつーの。

「話が読めない。まずお前の名前とイオの事を知っているのかは知らんがイオの事。あとここはどこなのかと神への殴りこみ経路。話せ」

「偉そうに話すな！最後のなんて意味わかんねーんだよ！」

「いいから話せって」

「嫌だ！だれが偉そうに言われて話すか！！」

…しょうが無いな！

私は餓鬼にゆつくりと歩み寄り、城下で購入したポケットの中身を餓鬼の口に突っ込む。

「むぐツ！……グハアツ！！！！うああああああああああああああ！！！！！！！！」

餓鬼は吐き出してもなお苦しみ続ける。

そう、突っ込んだのは『グレグコリツトの内臓五味』

おやつ代わりに食べようと持ってきたのだ。

さすがに買うとき、コレだけはやめときなつて町の人に必死で止められたから食べるのにちよつと抵抗があつたんだよね。

うん、案の定。

食べなくて正解かな？

「お、まえええ！何…食わせ…ツああ！！！！」

いまだに苦しみ続ける餓鬼を哀れなまなざしで見る二つの視線と愉快そうな視線で見つめる一つの視線。

「お味は？」

「不味いに…決まってるだろうがぁ！！」

あらま、冷や汗すじ。

「さて、ここに超強力味消しガムと臭い消しスプレーがあります。いますぐ跪いて話すなら良し。嫌なら更に強力な『グレグコリット』の髪の毛と唾液、脅威の組み合わせ！食べるときは遺書のご用意を」
「*注：逝ってらっしゃい」をお口の中に追加します」

「話す！！！！」

餓鬼は私の手からひったくるようにガムとスプレーをとり、口の中に入れる。

「あ、言い忘れてたけどガムのやつね『超強力に味を増量してしまふ消しゴムのようなガム』っていうのが本名なんだよ。略してみたんだ」

「ごばあああああああああああ！！！！」

餓鬼、撃沈。

クスリと笑う私を見て、後ろの男二人は震え上がっていたそうなの。

二界のトップに地獄を（後書き）

フィアンは確信犯です。

イオの秘密（前書き）

『驚く』という概念が師弟には存在しません。

イオの秘密

「ざけんな！！この人間！俺にあんなもの食わせやがって！！死んで償え！！」

…目の前の餓鬼はあれから30分後に目を覚ました。
そして起きたかと思えばいきなりこの台詞。

30分も起きるのを待ってやり、殺しもしなかったというのに…。

「とりあえず話せて。覚えてるよな？私が話して欲しい内容」

「ッ！……俺は、シーマ。神界軍の副將軍だ」

びっくり。こんな餓鬼が副將軍とか神界軍どんだけ落ちぶれてんの？
あ、あれか。平和ボケしすぎてとか？
うわー、まじ無い無い。

「そして…そこにいるイオは、

神界軍最高責任者、將軍の地位を持つ者だ」

わーお。更にびっくり。

イオが將軍…てーことはイオって天使？

「すごいな。イオは天使か、羽だせ」

「無茶言わないで下さい。俺は人間ですよ、シーマさん」

「…キメエ…。お前が俺に…さん？づけ？？」

「何気に失礼ですよ、貴方。俺はそんな將軍とか変なものになったつもりありません」

「はあああああ！！？ざけんなっつーの！お前がいなくなっただけ大変だったとおもってんだ！將軍が消えて軍は混乱するし上層部は混乱どころではなく大騒ぎ！！拳句の果てに俺へ軍全ての仕事回ってくる！！あの苦しみ！！」

「知りませんってば。同姓同名、顔が同じの方と人違いです」

「お前みたいのが二人もいてたまるか！！」

…とりあえずこの餓鬼五月蠅いんだけど。沈めていい？沈めていいよね？

にしてもイオが將軍か。けど本人全く知らない様子。どうなってるんだ？こりゃ。

「とりあえず落ちつこーね、お二人さん。餓鬼んちょ、どうか静かに話せるとこない？」

おっさんが仲裁に入るとシーマ…もとい餓鬼はしぶしぶと引き下がり、庭園の奥にある扉に入っていく。

付いていくと、中は何も無い白い空間。

あるのはひたすらに白のみ。

私達は床にポスリと座り込む。

「さて…百歩譲ってイオが將軍だとしようか。だがイオにはそんな

記憶は無い、これはどうして？」

「…そこにいる馬鹿は今から13年前、突然將軍やめるとか抜かしやがったんだ」

「ふんふん」

「もちろん上層部は猛反対。百億年に一人と言われるくらいの逸材だったからな」

「ほおー」

「だが反対を押し切ってイオは人間界へ逃走。その際に空間を裂く刀を使っただが、それがいけなかった」

「んむ？」

「イオは…空間を裂く為に刀の副作用で人間へと堕ちた。元々刀は罪人が人間界へと落とされるために使われるものなんだ」

「うはあ」

「人間に堕ちた天使は天使の記憶を全て失うから、それが原因だ」

「うつひょおー」

「……って何やってる!!!？」

「む？」

「む？じゃねエ！俺の羽を人間が触れんな！！」

そう、私はコイツが長ったらしい話をしている間ずっと羽をもふもふしていた。

さわり心地抜群。

筆って毛布にしたい。

「いいじゃないか、別に。で、話は終わったのか？」

「…も、いい…」

「ふん？」

「ねえねえ、餓鬼んちょ。結局イオは將軍なの？」

「当然、この俺が間違えるはずねえ。とゆうわけでイオ！記憶がないとか人間とか関係ねえ。とにかく神に会いに行くぞ」

「全く話が飲み込めません。却下です」

「はあ？今説明…」

「話は聞きました、理解もしました。しかし承諾はしていません。俺はただの伯爵家の養子です」

「…ちっ！そーゆーとこだけは変わってねーのかよ。相変わらず食えねえ奴」

羽をもふもふしている間に話が進んでいたらしい。イオは少し複雑そうな顔だ。

まあ、いきなり貴方は神界軍將軍ですなんて言われて納得は無理か。けどあいつが將軍と言われて否定できないのは分かっているからだろう、辻褄が合うのを。

確かイオが捨てられ拾われたのは5歳。そしてこちらのイオが消えたのは13年前。

イオは今…18歳。計算が合うものな。あれ？だとしたら…。

「おい餓鬼。イオが人間界で拾われたのは5歳だ。お前の知っているイオは何歳だった？」

「24歳だ。おそらく5歳になっていたのは人間界に適應するためだろうな」

意外にいつていたとは…。じゃあ本当は…42!!
うわ…おっさんよりも上やん…。

「ふむ。…42」

「師匠」

「はは、すまん。とりあえず18ってことにしておいてやる」

「…さっきから思っていたがお前は俗に言う変な奴だな。ちび女」

「そっくり返そうか、餓鬼。餓鬼のくせして妙に大人びた喋り方しやがって」

「師匠も人の事言えないですよ」

なにイツ！！私は…私は…こんな餓鬼と…同レベル！！？

「イオ、嬢ちゃんが固まったよ」

「そこまでショックを受けることですか？」

「…そんな…ッ」

「お前、地味に傷つくぞ。ちび女」

「ーかちびちびうるせえなコイツ。私はこれでも150あるぞ！

「そういえば、ちび女と爺いの名前なんだよ？」

「おっさんだつつうの。おっさんはデスト、魔王」

「………パラグアイナス、偽名」

「堂々と偽名使ってンじゃねえよ。本名教えろ」

「ひゃっはー。パラグアイナス最高ー！」

「意味わかんねエ叫び声あげんな！本名教えろつつたんだよー！」

「フィアン」

「…随分あっさり。ふうん、フィアンね。いい名前じゃん、今人間界で話題になつてる零氷大武神とおんなじだな」

「………本人なんだけどねえ、嬢ちゃん」

「なんか言ったか？デスト」

「いんや」

おっさんを軽く睨みつけるとおっさんはぶんぶんと首を振る、うん。私はそろそろ神に会いたいのでこの場に留まる時間が増えるような話題は避けたい。

（クラリ）

おっと…眩暈が。

最近、体がおかしいな。妙にダルイ。

…これはいわゆる『風邪』だろうか？初めて病気にかかった。うおっしやあ！！

「師匠、風邪で喜ぶ人は普通いませんよ。あと風邪なら早く帰ってお布団で寝ましようか」

「ふふ…風邪か…。私に勝てるかな？」

「なに風邪に対抗心燃やしてるんですか？勝たないと駄目に決まっています。とゆうか発症するのも怪しいですよ、師匠だと」

「面白い…。風邪め、この私を焦らすなど。…やるな」

「誰もそんな事言ってません。…焦らされてるのは俺のほうです」

ふとイオが呆れたように言う。

はっはー、風邪よ！我に立ち向かえ！返り討ちにしてやろっぞ！！

「おーい、嬢ちゃん？そろそろ行くって」

はっはー…は？

「神さんトコ。餓鬼んちよが案内してくれるらしいよ」

…どうやら既に話が纏まってしまったようだ。
まあいいか。

「イオ、行くか！」

「…手、貸してください」

「は？」

「出してください」

私はすつと差し出す。
見ると赤く染まっていた。
なんと、いつの間に。

「乾いています。おそらく昨日からでしょう、気づかなかったんですか？」

「…ノヴァ？か。まったく気づかなかったな。なにもうつ治ってるさ」

「駄目ですよ」

イオは私の手を取ると魔法で浄化していく。
終わると私の手はいつもどおりに戻っていた。

「イオ、やるな」

「当たり前です。俺は師匠の弟子ですよ？」

言うようになった。

流石…、

私の弟子だ。

イオの秘密（後書き）

どんどんいい感じに近づいてますかねえ？
フィアンは恋愛方面だと扱いにく…ゴホン！
これからもよろしくお願いします。

神の城（前書き）

まともな美青年、登場。

神の城

「着いたぞ、ここが神の住む城だ」

シーナに案内されて神の城へと着いた私達は白く神々しい大きな扉をくぐり抜ける。

中は白よりも銀色に近い色で統一されていた。

心なしかおっさんは気分が悪そうだ。聞いてみると「おっさんは魔王だからねエ。こつゆう色は体が拒否るのよ」とのお返事。

そういえば魔王城は黒…いや灰色で統一されていたな。

「この先に神がいる。粗相のないようにしろ」

そう言うときシーナは何処かに去っていった。

「んじゃ、入りますか」

私は5メートルくらいの大扉を蹴り飛ばす。

扉は吹っ飛びはしなかったものの大きな穴が開いた。

「…何事だっ」

中から重圧的なしかし焦りの分かる声音が響く。

私はもうもうと立ち込める煙の中、穴をくぐって部屋の中に入る。すると目の前には玉座に座る一人の青年がいた。

銀色の髪に黄色い瞳が神々しいオーラを醸し出すその姿にコイツが神だと理解した。

「初めまして、神。私はお前らのせいで妙な面倒ごとに巻き込まれ

ている人間だ」

「…人間だと？人間がどうして神界に……ッ！魔王……！」

神は私の後ろに立つおっさんを見て玉座から腰を浮かせる。

「ヤッホー。元気？」

「ヤッホーでは無い！魔王が簡単に神界へ来るな！」

「ひどいわねエ。おっさんだって来たくて来たわけじゃないのよ？」

「じゃあ何が目的だ！」

「それは嬢ちゃんに聞いて。おっさんは嬢ちゃんに空間開けさせられただけなんよ」

「嬢ちゃん……この小娘か？何用だ」

…何この高圧的な態度？神だからか？

「…まず本題の前にさ、イオって知ってる？」

「ッ！…何故その名を…ッ」

「ここに本人いつから」

私は隣のイオを指差す。

「な、イ…オ？何故お前…」

「あの…そうやって人の顔見て驚き顔を連発されると俺も流石に悲しくなってくるんですが」

「…なんだ？その…気持ち悪い口調に……笑顔…」

「酷くありません？これが俺の普通なんですけど」

「……ああ。人間に堕ちたんだったな……記憶がなくて当然か……すまない。あまりにも気持ち悪かったから」

「なに神がさらりと酷いこと言ってるんですか」

イオは呆れ顔に大きな溜め息。

いちいち相手してたら疲れると悟ったのか？なんか諦めた感が。

「おい、神。お前はイオを知っているんだな。ここにいるイオは元天使、將軍で間違えないのか？」

「…間違いない。魂の色が同じだ」

「だってイオ。良かったな、自分が捨て子じゃないことが分かって」

「…まだ頭が追いついてませんよ。実感も何も無いのに」

「ゆっくり理解していけばいいさ、それにお前が昔天使だったとしても今が変わるわけではない」

「……そうですね、師匠」

少しだけ強張った顔に安堵の色が入り込む。

我ながら良いことを言った。〇〇先生の『綺麗事』の言葉を丸ごと引用したことは黙ってしよう。

「で、神よ。本題なんだが最近人間界で瘴気汚染者が出た。この意味がどういうことか分かるよな？」

「瘴気：汚染者だと？馬鹿な、瘴気は天使達が清気で抑えているはずだ。それはありえない」

「ありえないって言っても出たんだからしょうがない。こつちで異変が起きたわけではないのか？」

「異変など、そこにいる元天使が消えたこと意外は何も起こっていない。考えられるのは魔族が異常発生したかその汚染者が瘴気に直接触れたかだ」

「：魔族は一定の数意外増えてはいないよ」

おっさんが顔をしかめる。

とすれば考えられるのは一つだけ。

「汚染者が瘴気に直接触れた…」

イオの呟きが耳に響いた。

：とりあえずツツコンでいいですか？

確実に悪いのその汚染者じゃん。巻き込まれたのってただの不遇じゃん。

ノヴァめ…。あいつが勘違いしたせいでこんな変なことに巻き込まれたってことじゃん。

今度会つたらもういいや。地獄に落としてやる。

ただの勘違いからノヴァは魔族殲滅すれば恋人が助かると思って私を利用しようとしたってことね。

「そうすると俺達は…ただの勘違いに巻き込まれただけってことになりますよね」

「イオ。とりあえずノヴァを殴りたい」

「果てしなく賛成です。師匠」

「おっさんも」

ここにノヴァを殴ろう同盟が誕生した。

次接触してきたら地面に埋め込む。

「物騒なことを唱えるな、事情も読めていない私はどうしたらいいのだ」

神が大きな溜め息をつく。

「短く説明するなら一人の男の勘違いで魔族殲滅が目論まれているんですよ。俺達はそれに巻き込まれたとゆうことです」

「それは穏やかではないな。魔族が消えれば瘴気が消え、人間界に清気が溢れかえってしまう。そうなれば人間界は清気に汚染され正気を失い、たちまち絶望の地へと姿を変える」

「…考えたんだが、ノヴァを殴って恋人の居場所を吐かせてその恋人を天使に触れさせば治るんじゃないのか？」

「それは名案ですね、師匠」

「…確かにそれなら良い。ならばここに汚染者を連れて来い、私が治してやる」

神じきじきに治すとは気前がいいな。

「それならまずはノヴァ探しだ」

「待て、もう今日は遅い。今夜ここに泊まっていくといい、部屋を
用意する」

「悪いね、神」

「魔族殲滅など事情が事情だけにほおってはおけん。少し頭の中
を整理し、明日出発するといいい」

私は神の好意に甘え、先に休むことにさせてもらった。
神界に着いてから体が妙にだるいしな、風邪め…。

部屋を出てから少し歩くと客室と書いてある部屋に着いた。
私はここに入り、奥のベッドに横になる。
すると襲ってきた睡魔が私を闇の中へと誘った。

…どのくらい眠っていたのだろうか。

私はふと目を覚ました。

窓を覗くと明るかった空が暗くなっていた。

深夜…か。

私は少し夜風に当たろうと窓から身を乗り出す。

すると隣から声が聞こえた。

荒立っているような声とそれを宥めるような声だった。

耳を澄ますと会話がはっきりと聞こえた。

「だから！あの小娘の色が『あいつ』に似ていると言っただけだ！」

「それだけで嬢ちゃんを『あいつ』って決め付けんなっていったん

の！」

「落ち着いてください！隣で師匠が寝ているんですよ！」

…神におっさん、イオ？何を話してる？

「私はあの小娘を見て驚いた！何故あんなにも『あいつ』に似ている！？」

「ただの他人の空似かも知れないってば！嬢ちゃんは嬢ちゃんだ！」

話しているのは私の事…か？

私が…誰に似ている？

「ならばあの顔立ちに髪、目！それに魔力量！！なによりも魂の色が無い！」

「…ただの偶然じゃあ…」

「無いに決まってる！必ず何らかの関わりがあるはずだ！」

「あつたとして！それでどうする！嬢ちゃんに伝えるのか！？悲しいだけだろう！」

「ですから落ち着いてください！ヒートアップしすぎです！この件はまた今度にしましょう。とにかく今は…ノヴァの方を優先しましょう」

三人の声がすつと消える。

…何の話だった？私が…なんだよ。

『あいつ』に似ている…？

あいつって誰だよ、私はフィアンだ！
だれにも似てない！

結局その夜は眠れなかった。

ただ、頭の中に三人の話がぐるぐる回るだけだった。

その翌日、私は三人の話については何も聞かなかった。

神の城（後書き）

三人の会話は一体なんだったのでしょうか？

過去と今（前書き）

まずは制裁？

過去と今

「それじゃあそろそろ行きますか」

神の城で朝食を食べてから数時間後、荷物をまとめて出発することとなった。

…昨日の話の事については一切触れていない。
何故か…聞いたらいけないような気がした。聞いたら何かがおかしくなるような気がしたんだ。

「…神。世話になった」

私は神にお礼を言い、おっさんの開けた穴に向かう。

「待て…少しだけ、いいか？」

ふと神が私の袖を掴む。

「…道を違えるなよ」

神はそれだけ言う私の袖を離れた。

どうゆう意味なのか全く分からなかったがひどく心に響く言葉だった。

「…じゃあな」

私は身を翻し、穴に勢いよく飛び込んだ。

グアッと変な感覚を通り超えると目の前が広い草原に変わったいた。見渡す限りの広い草原の真ん中には私とイオ、おっさん。

…そしてもう一人、ノヴァがいた。

「…よく僕がここにいるなんて分かったね」

「君の魔力を辿ればね。おっさんは魔王よ？あんまり舐めないでね」

「で？僕に何の御用かな？おとなしく力を貸してくれる気になったのかな、フィアン」

「…そうしてやってもいいかもな」

「わあ、それはうれしいな。じゃあ一緒に魔王をやっちゃおうか」

「ただし…まずはお前に制裁を与えようか」

ズガアアアアアアアアン！！！！

ノヴァのいる場所に大きな稲妻が走る。

しかしノヴァには傷一つつかない。そんな事は想定済みだ。

「イオ！おっさん！！」

ドゴオ！！！！

掛け声と同時に大きな爆発音が草原に鳴り響く。

イオが氷魔法でノヴァを突き刺し、おっさんは蹴りを繰り返す。

「うわつとと、危ない危ない」

ノヴァはイオの氷魔法で確かに突き刺さったはずが血は一滴も出て

いない。服が破れたただけだ。

おっさんの蹴りは多分骨も砕くだろうけど少し赤くなっている程度。

「いきなり何？」

ノヴァは私達とある程度距離をとる。

「…言つたろ？制裁だ。お前には制裁を与えなきゃな」

私は地魔法で草原の土を剣の形に変え、手に握る。

「制裁？僕はそんなの受けたくないな。とゆうか流石に魔王と水竜に零氷大武神とやりあうことって自殺行為だよね、ここは一旦引かせてもらおうかな」

ノヴァは風魔法でふわりと浮き上がるがここで見逃す私達がいるはずない。

私は土の剣を強化魔法で鉄以上の固さにし、ノヴァに切りかかる。ちなみにノヴァが浮き上がってから切りかかるまでおよそ0.8秒。しかし風魔法の影響か、ガキンと跳ね返される。

私は闇魔法で風を打ち消し、ノヴァに一閃を入れる。

ノヴァの腕に赤い一筋が入る。そこからは血が滴り落ちる。

「っ…。痛つたいなあ」

「お前から赤い血が流れるんだな。人間のように安心した」

「…僕は何だと思われてたのかな？」

「化け物？」

「君に言われたくないなあ。僕は禁じられた魔法で化け物みたいな力を手に入れたんだ」

「禁じられた魔法？禁呪か、馬鹿だな。何を憑依させた？」

禁呪というのはあまりに危険なため使うことが禁じられた魔法の事。これを使うと魔界から魔族を呼び出し自分に憑依させることで強化することが出来る。

しかしリスクは半端ない。憑依時には常に体が瘴気に犯され続け、体には激痛が走り続ける。

最終的には魂が喰われ、残るのは『無』のみ。

ノヴァ
「白悪魔」

「真正正銘の馬鹿だな。魔界最強と謳われた魔族を憑依けるとは。…体はもうぼろぼろなはずだ。それでも禁呪を使い続けるのは恋人のためか？」

「そうだよ。エリアーラを助けるためなら僕は悪魔に魂を売ろう。魔族殲滅さえすれば助かると彼は言っただ」

ノヴァは静かに笑う。いや微笑んだ。

…『彼』か。ノヴァに魔族殲滅を吹き込んだ奴のことだな。そいつに騙されて禁呪にまで手を伸ばしたのか。哀れな…。純粹に恋人を想うゆえの過ちだ。

「助からない」

「…え？」

「お前の恋人は、助からない」

「…助からない？」

「魔族殲滅でお前の恋人は助からない。お前は騙されたんだよ」

「ちょっと、嬢ちゃん…っ」

「助からないんだ。お前のしようとしていることはただの大量虐殺だ」

「師匠…！」

もう少しだから…待ってくれよ。

言い過ぎなのは分かってるさ、これでも人間だ。

だが、言わなければならないんだよ。

認めたくは無いが一応兄妹なんだよ。

「僕の、エリ…ア…ラ…は助からない…？」

「ああ、お前のやり方ではな」

「嘘…だ」

「嘘じゃない。現実を受け止める、ノヴァ」

「…じゃあ、このまま黙って死ぬのを看取れとでも言うのか！」

「それもいいかもな」

「そんな…」

「私の話を聞け、私はお前のやり方では助けるのは無理と言っただけだ。助かる方法はある」

「っ！」

「そのためにはお前の恋人を見る必要がある。原因が私達の考える通りなら彼女は助かる」

「本…当に…」

「お前の意思で決めろ、私達を頼り恋人をみせるか。…『彼』の言うとおり魔族殲滅をするか」

「…僕の意味」

「ああ、明日この草原に來い。それまでに答えを決めておくといい」

私はノヴァに背を向けて草原を去った。

—先ずこの先にある村に行こうと思う。

少し行くことに戸惑いを感じるが…。

「イオ、おっさん。行こう」

私達は転移で村の入り口に辿り着く。

村は寂れた感じだがまばらに人の姿が見える。

「師匠、ここは？」

「…私が磁気狂いの森に行く前に住んでいた村だ」

「嬢ちゃんの？興味あるわ」

「余計な興味は持つなよ」

…あまりいい思い出はない。

さて、村人が私の事など忘れ去ってくれていればいいが。

「ここには小さいが宿がある。そこに行こう」

私は村に一步足を踏み入れる。

…少し震える足がばれてないといいが。

無意識に溜め息をついてしまう。

村に入り、村人となるべく目を合わせないようにして村の奥にある宿へと向かう。

村人はまったく知らぬそぶりで安堵の息をつく。

そんな調子で宿へと着くと鐘を鳴らして宿内へと入る。

「いらっしやい！何名様………ッ！！フィアン！！？」

宿に入ると受付の女は手に持っていた野菜やら果物の籠を地面に落とす。

「師匠のお友達ですか？」

「嬢ちゃんの？気になるねえ」

「…知らんな。私は全く知らない人間だ」

嘘だ。コイツの名前は確かアンジユ。他の大人を引き連れ、筆頭で私を迫害したんだから覚えられていて無理も無いか。

まあコイツが何かを言おうものなら殺す準備は出来ている。

「な…んで！あんたが！！で、出て行ってよ！！この…化け物！！」
アンジユはカウンターに置いてある置物を私に投げつける。
避けようと思いい体をそらしたがイオが軽々と置物を受け止める。

「…客に取る態度では無いですね。いきなり置物を投げるなんて」
地を這うような低く冷たい声が宿内に響く。

「そつだよねえ。流石にいきなり物を投げるのは酷いよねえ」

いつもの軽い口調なのに少し声のトーンが低い。

「あ、あんた達！は、知らないの！！この化け物はね！村に災厄を運んだのよ！！」

アンジユは声を張る。

「あ、あんたさえ！村に来なければ！村が襲われることも無かった
！！」

…あの事が。

「で、てつてよ！二度と来るな！！化け物！！」

私達は追い出されるように宿を出た。

「…すまないな、二人とも。今夜は野宿になってしまいそうだ」

「気にしないで下さい」

「そうよお。嬢ちゃんは気にしなさんな」

こうゆう時は気を使われるのが一番辛く、嬉しい。

私達は村の外にある街道脇で眠ることにした。

もう日は傾いて今は夕方だ。

「で、話してくれるのは無理かな？嬢ちゃん」

魔法でキャンプの用意をしている最中におっさんが唐突に切り出す。

…話せないとは言えないな。

「…座ろうか。長くなりそうだ」

私は地魔法で作った椅子に座る。

イオとおっさんもだ。

「私は物心つく前から、この村で迫害を受けていた。石なんて投げられるのは通常だった。が魔力のおかげで石が当たるなんてことはなかった。だが罵声や悪口までは流石に魔力では防げなかった。信じられないだろうがその時の私はとても泣き虫でな、私の心はぼろぼろだったさ。そんな日々が続く中で私はある日一匹の水竜に会った」

「それは…長ですか？」

「ああ、お前の指にはまっているモノだ。私は水竜と何故か仲良くなり、よく遊ぶことがあった。しかしある時ふとしたことで私が村から迫害されていることを知った水竜は村を襲った」

「それは… 同感しちゃうかも」

「はは、ありがとな。だがそれをきっかけに私はもっと迫害どころか肉体的に体を酷使させられることとなった。私はもういろいろと限界だったんだと思う。ある日、魔力が暴走して村を壊滅寸前まで追いやった。それがきっかけとなり私は村を追い出され、磁気狂いの森へ行つたのさ」

「…そこで俺と出会ったんですね」

「ああ、最初は随分と戸惑った。お前が目覚めたときどう接しているのか分らず高圧的になってしまったがな」

「あれが素じゃなかったとは」

「今はこれが素だがな」

「…まあ、いんでない？おっさんは今の嬢ちゃん好きよ」

これが村で起こった過去の出来事。

私は弱かった。やめての一言も言えなかった。けどいまなら言えるよ。

私は変わった気がするんだ。

イオ、お前に会ったあの時から…。

過去と今（後書き）

フィアンは昔は弱い女の子でした。
イオと出会ったのは必然だったのかもしれませんが。
感想お待ちします。

白悪魔（ノヴァ）の登場（前書き）

魔物、それは少しでも魔力を保持する生物の事。
魔法を使うことが出来るのは魔怪物と呼ばれる。

白悪魔（ノヴァ）の登場

キャンプを敷いた私達は夕食のカルデラ（街道近くで捕れた魔物の
お肉で少し痺れ毒が入っていたらしくスパイスのようで美味しかった。
イオとおっさんは辛いのが苦手なのか一口で気絶した）を食べ、
一泊。

神界との時差ぼけのせいであまり寝付けない上におっさんの足が無
駄に当たってくるので外に吊るしておいた。

そして朝、見てみると死んだように動かない屍が存在していた。

「おはよう、おっさん。気分は？」

「まず何がどうしてこうなったのかおっさんには皆目見当がつかないんだけど」

「そうか、じゃあ後3時間時間をやるから見当をつけておけ」

「え？あ、待つて。降ろしてくれないと頭が弾ける！もうやばいから！頭の中で何かが破裂しそうだから！！へ、ヘループ！」

さて、雑音は無視して朝食を用意しよう。

料理は得意な方だ。イオは幸いまだ起きていない。

イオと一緒に暮らし始めてからはイオが家事全般をまかっていたからな。

（まずは…卵と肉、は…と）

私は辺りを見回す。

するとなんと都合の良すぎることに卵を産むコケラー（鶏に手が生

えた魔物」と多分肉が獲れると思う名前は知らない大きい魔物が通りかかった。

2匹は追いかけてっことをしている。コケラーが名前の知らない大きい魔物に追いかけられているのだ。

私はすぐさま地魔法で槍を造りだし魔物にめがけて投げる。すると魔物は倒れ、狩猟完了。

コケラーはいきなり現れた槍に恐れ固まっていたところを何なりと捕獲。

コケラーを脅…説得？うん、睨んだら卵を提供してくれた。

（さて、次は…パンか。幸い近くに集落があるから拝借しよう）

私は昨日の村にコケラーを送り込み、パン3つを確保。

材料は一通り揃ったので料理開始。

まずは手早く魔物を風で切り刻み、炎で炙る。

次に卵を炎で卵焼きにする（直火）

最後にお皿に盛り付ければ完成。

「いい出来だ…。最後に香り付けでコケラーの生き血でも…」

その瞬間、コケラーは時速150キロはあるであろうスピードで逃げ出した。

「…ま、いいか」

「師…匠…？その謎の物体達は何ですか…？」

後ろから少し震えた声が聞こえた。

振り返るとイオが青い顔で立っている。こらこら、美形が台無しだぞ。

「見て分かるだろ？お肉に卵焼き、パンだ」

「どう調理すれば肉が粉末状の黒い炭となり、卵焼きの黄色さがオレン…ジ？になるんですか。パンなんて何故かふやけてる上に潰れてるじゃないですか！？」

「肉は見た目が変わったただけで味は大して変わらないと思う。オレンジ色の卵焼きも色鮮やかだ。パンはどうしたんだろ？そういえばコケラーを送り込んだ時にコケラーの目から涙が…」

「確実にコケラー、恐怖で動いてるじゃないですか。潰れたのはあまりの恐怖で握り潰したんですね」

「なんだ？村が怖かったのか、悪いことをしたな」

「100%師匠が原因ですって。コケラーの涙には猛毒が仕込まれてるんですよ、唯一マシそうなパンもだめじゃないですか」

コケラー、よく目が腫れないな。

てゆうかマシってなんだ、マシって。どれも自信作だぞ。

「どれも大丈夫だ。私は料理が得意だしな」

「すぐにその認識を改めてください。今すぐに。料理が得意という方はそんな謎の物体を作ろうと思っても作り出すことは確実にできません」

「とにかく食べてみろって。水竜は涙を流すほど感動して食べていたぞ」

「水竜に恐怖を与えるなんてただですか、その料理。俺は食べませんよ」

「まったく好き嫌いが激しい奴だ。おっさんに完食してもらうか」

「…デストさん」

イオが目頭を抑えて肩を小さく震わせる。…？

よし、おっさんを地面に降ろして食わせてやるか。

私はおっさんを吊るした木に向かい、なんかダラつとしたおっさんを降ろす。

「おーい、おっさん？」

「……………う…あ？あ、じょーちゃん…。はへ…、おっさんねえ花畑で閻魔大王って人と話す夢を見てたよ…」

「そうか、食事だ。来い」

「え…おー…い、じょーちゃん？おっさん動けないよー。頭がなんかぐるぐるしててふらふらだよー」

「早く来て食事にするか、もう一度吊るされるかどっちがいい？」

「断然食事で」

シュバッという効果音が付きそうな速さでおっさんはテーブルにつく。

私はおっさんの前に食事を差し出す。
するとおっさんの表情が一瞬にして固まった。

「…嬢ちゃん。…なんか謎の物体オンパレードが開催されてるけど。
朝食は…？」

「何言ってる？これが朝食だろうが。おかわりも用意してあるぞ」

「…イオの姿が見えないんだけど？」

「イオ？朝食がいらないらしく何処かに消えたな」

「イオオオオ！！逃げたよ、あの子！！おっさんに全てを放り投げたよ！！」

「はいはい、絶叫は耳に響くからやめないと吊るすぞ。さっさと食べ、食後に茶の用意もした」

「いやあああああ！！茶ってアレ！？デイスト君を殺ったアレ！！？」

「五月蠅い」

「ちょ、待つ！！待って！無理やり口に…っ！！ガホゴホグハアアアアア！！？」

私はおっさんの口の中に肉（黒い粉末）を押し込み、卵（オレンジの物体）を流し込む。

最後にパン（猛毒）を突っ込んで私特製の茶（殺人茶）を飲ませる。
おっさんは卵を流し込んだ辺りから動かなくなっただけで全てをやり終え

た後の数時間後に目を覚ました。

ちなみにパンを突っ込んだ時、心臓が一瞬止まっていたような気がした。

「デストさん……。お疲れ様でした、よく生きましたね」

何処かに行っていたイオもおっさんが食べ終えた頃に戻ってきた。

「イオ……。恨んでいいかい？おっさんに全てを押し付けたでしょ」

「人生、早いもの勝ちです」

「かつこいい。けど今のおっさんにはめちゃくちゃ悲しい言葉よ」

イオと会話後のおっさんは何故か沈んでいた。

周りから黒いオーラみたいなものが漂っている。もう視認できくくらいに。

「さて、キャンプの片付けは終わったことだし草原へ向かうか」

「はい、分かりました。デストさん行きますよ」

「……ほい」

キャンプを片付けたので私達は昨日の草原へと向かう。

もちろん転移で、だ。

歩くのもいいがぶつちゃけ面倒くさい。無駄は省く主義だ。

転移で草原に移ったところ、目の前には案の定ノヴァがいた。

どこかふつきれた感があり、顔がすっきりしている。と思うのは気のせいかな？

「…決まったか、選択」

「うん。…君を信じてみることにしたよ、フィアン」

ノヴァの口から迷い無く出たその言葉は本物だろう。
私は一歩前へと足を踏み出す。

「こうゆう時は…いい選択？だなののか？」

「なんでそこが疑問系？いい選択って言いつてよ」

「わからんからな。とにかく恋人を見せてみる」

「君は本当に思ったことをはっきりと言っね。だからこそ信じたのだけれど」

「御託はいい、こっちはいい加減この面倒事を片付けたいんでな」

「ふふ。少し待っててよ」

ノヴァが後ろを振り返り、私に背を向ける。

ノヴァが一歩前に足を繰り出すその時だった。

ズドンッと草原に似つかわしい鈍い音が鳴り響く。

突然、目の前にゆっくりと赤いモノが広がる。
これは…。見慣れた色、それは赤く艶めく…。

血の色。

私は視線を少しずらすだけ、で何が起こったのかが理解できた。
目の前のノヴァから血が噴出していた。

それは主に全身から、血が暴れるように噴出している。
噴出す血は留まらず草原を赤く染める。

やがてズシャアっとノヴァの体は倒れこむ。

「あ…、ノヴァ…？」

やっと出た言葉がこれだと言うのだからお笑いだ。

ノヴァの体から出た血が徐々に形を形成し始める。ノヴァの体は全くといって動かない。

血は人型のような形を取り始め、それがさらに人間の精密な部分をも作り出す。

最終的にそれは完全に人間となる。

血から形成されたはずが色は人間の肌色となり髪の色はノヴァと同じ銀髪で顔立ちはノヴァとはまるで違うが美形といってもいいほど整っている男性。

「な…んだ、一体…」

それは閉じていた瞳をゆっくりと開き、赤眼の瞳を表す。

その瞳はひどく血を浮かばせる。

「初めまして…か。今は…フィアンだったか」

男は瞳を少し細めて無表情に近い表情で言い放つ。

「…えーと、イオ」

私はとりあえず目の前の男を無視してイオに話しかける。

「はい？」

「人間って血から生まれるんだっけ？」

「まずは否定させて頂きます」

「じゃあ次、ノヴァに一体何が起きた？」

「確定はできませんが恐らくは禁呪のリスクでしょうか」

「なるほど。じゃあ目の前のコイツは白悪魔^{ノヴァ}か」

「の可能性ががあります」

私は男に向き直るとまずは睨んでみる。

すると男も睨み返して来た。

むむっ、やるな。

「まず聞こうか、白悪魔^{ノヴァ}で間違えないな？」

「…そっちはフィアンか」

「名前を知られている理由は聞かないでおこうか、一体ノヴァに何をした？」

「…別に。飽きたから出てきた、ただだ」

「ふーん。ノヴァは死んだのか？」

「だろうな」

「なんであんなタイミングで出てきた？すごいバッドタイミングだったけど。打ち合わせでもしてたの？」

「…あいつは契約違反をした。だから、そうなった」

…恐ろしく口数の少ない奴だ。

しかもキャラが読めない。なんだ？白悪魔^{ノヴァ}ってこんなにイジリが…愛想の無い奴だったのか。

しかし契約違反か…流石に守秘義務があるから答えんか。にしてもこいつが魔界最強ねえ。

魔力は隠してるのがばればれだな。強いのか？10年前は災害どころの騒ぎじゃなかったらしいが。

「はー、お前。…強いのか？」

「当たり前だ」

言い切ったよ、この人。

「何の目的で人間と契約を交わし、禁呪を使った？」

「…目的のため」

「聞こうか」

「……………魔族の殲め……」

「二度も同じネタを私に聞かせようとはいい度胸してるな。さっさと答えないと本当に怒るぞ」

「……俺の目的は、

世界の終焉だ」

とかふざけたことを言う第2号がいたのでとりあえず殴りました。

白悪魔（ノヴァ）の登場（後書き）

白悪魔登場、にもかかわらず殴ることでのこの回を終わらせてしまったフィアン。

虚偽炎霸導神（前書き）

後半突入！

お付き合ってください！

虚偽炎覇導神

「いきなり何をする、馬鹿力め」

目の前にいる白い悪魔サンをとりあえず殴りました。

もうとにかく意味の分からない目的を聞くことが面倒だ。

また面倒ごとに発展するって、絶対。

とゆうかまじで私は関係ねえ…。

何コレ？実は私って巻き込まれ人生の持ち主だったのか？

「うつさい、黙れ。白男」

「…シエルだ」

「白男で。そっちの方が都合がつく」

「何の都合だ」

「そこは聞いたらいけない絶対不可侵領域だ」

「…師匠、ただ単に覚える気が無いと言っただけ…」

「イオ、世の中には言わなくていい事がたくさんあるんだぜ」

「すみませんでした」

少し声に冷気を含めるとすぐにイオはひいた。

物分りのいいやつめ、飴をやろう。

…今は痺れ薬用飴とグレグコリット味しか持ち合わせがないな。

仕方ない、どっちももつたない気が…。後でイオにはグレープで、別にどっちも食べたかった訳じゃないんだからな！

「さて、白男よ。茶番には…付き合ってた。お前の本当の本当の目的を言うがいい。ちなみにこれがラストチャンスだ」

瞬間、白男の眉がピクリと動く。

そう、白男は確実に世界終焉など子供じみたもんが目的じゃない。本当の目的は別にある。

勘なんていうつもりは無いさ。本当の目的が別にあると分かった理由は至極単純。

たんに精神魔法で奴の本心を探った。もちろん隠蔽してるから気づかれてない。

この魔法を仕掛けたのは殴ったとき、魔力を奴の体に流し込んだ。だから奴の本当の目的なんてのはもう分かっている。…あまりにもスケールがでかい。

「…何の事だ。俺の目的は…」

「虚偽炎覇導神、きょぎえんはどうしんの復活」

私は誰もが言葉にするのですら恐れるソレを口にする。

白男の瞳はかつと開かれる。

「…なぜ」

「何故わかったって？どつかの馬鹿に魔力を流し込んで読み取った」

「…不覚っ」

白男は視線を下げ、唇を軽く噛む。
ふと後ろを見るとイオとおっさんが固まっている。

『虚偽炎覇導神』

この言葉は人間、魔族に天使族。この地に生ける全ての生命、空に住まう神でさえも恐れを抱く。

5000年前、突如として現れたこの神は圧倒的な力で一つの大陸を滅ぼした。

何でも残っている文献によると小さな可愛らしい少女の姿だったようだ。

少女は軽く手を振るだけで地を衝撃で抉り、息一つで大岩が吹き飛ばほどだったらしい。

大陸を滅ぼした理由は暇だったからという理由だったそうだ。何と
いう面白みの無い…。

ちなみに異世界から呼び出された勇者により封印されたそうなの。

勇者は恐ろしく正義感MAXの最強勇者で少女と死闘を繰り広げた後に仲間の力と共に少女を『封印の祠』に封じたんだと。

王道すぎるって、せめてもう少し捻れや。

「白男、お前の最終的な目的は分かんないけどさー。止めときなつて。あんな化け物が復活しちゃったら本当に終わっちゃうよ？なっ
たって暇潰しで大陸を終わらせた奴だよ」

「あの方の復活は俺の悲願だ」

「ふーん。好きだったんだ」

「なっ！？ばっ…！違う…！」

途端に白男の顔が赤くなる。

凄いうるたえ方…。正直ここまで反応するとは…。

なんだ、こいつ。意外とからかえるじゃないか。

とゆうか一瞬で分かった私ってすごいな。…まさか！これが女のカン…か！

「ほっほー。好きで好きでしょうがなかったけど封印されちゃったから想いが伝えれず諦めきれない、と。粘着だなー。しかも気弱ときたか。は、魔族最強も形無しだな！」

やばい…にまにまが止まんないかも。まさか自分にここまでいじらせようとは。

こいつ絶対隠れMだ！

「ち、違う！俺は…っ、伝え…」

「そういうのって俗に言う負け犬の遠吠えだぜ？白サンよお」

「っ、伝えたけど！そう受け取って貰えなかったただけだ…！」

「要するにフラレタんでしょ」

「っ…！！？」

白男が地面に臥っせる。

愉快すぎる。まじで面白い！

私は笑い声を堪えきれずに高々と笑う。

「…えげつないわぁ、嬢ちゃん」

「師匠は本当にドSですね。流石に可哀想ですね」

後ろの二人が何か言っているが気にしない！
今、猛烈に楽しいぞ。

この白男、見た目クールそうなのにイジリがいありすぎる！（特に恋愛系方面？私は興味ないが、いじれるなら関係ない）

「俺は…俺は…っ」

「諦めなつて。どーせまた振られるのがオチだよ。傷は浅いつて」

「嫌だ！俺はあの方のことがっ！！」

「本人いない場で好きとも言えない奴が本人の前で言えるの？」

「い、今なら言える！！」

「ふっーん。じゃあ今大声で言ってみなよ。練習と思つてさ」

「…すっ……………っ！！」

白男は顔を真っ赤にして俯く。

すごい…予想通りのリアクション！

「…師匠、師匠。目的変わってます。元の目的と大分かけ離れた方向に行ってますよ」

後ろからイオの声がかかる。

目的…？…あ！

ひとまずこの事件を終わらせるんだった。
あまりに楽しすぎて忘れてたな。

「…コホツ。えーと雑談はここまでにしておいて…お、お前の野望を打ち砕いてやる」

「後半かつこいいけどねえ…前半が全てを台無しにしてるね。嬢ちゃん」

うつさい、おっさん。

「…やってみるがいい、小娘。俺は命に代えてもあの方をこの世に復活させよう！」

「あれ？こつちも乗ってきたぞ？さっきまでの話を消そうとしてるよ…！」

ナイスだ！白男。

「では…勝負だ！魔界最強と謳われた白悪魔^{ノヴァ}の力…とくと見せる！」

「望むところだ！零氷大武神の力…俺にぶつけてみる！」

「待て待て待て！なにこの雰囲気！さっきまでのとまったく違うんだけど！なんで？なんで当たり前のように雰囲気を変えられるの！？つか台詞が無駄にベタなんだけど？おっさん、ついていけないよ！」

おっさんがツツコミの才能を開花させたか…。

「おっさん！何してる、早く構えろ！相手は魔界最強と謳われた奴だ。おっさんがやられるとは思えないが警戒はしておけ！」

「…あー、イエッサー。もういいよ、何も言わないよ」

ツッコミがしぼんだ！？早ッ！！

「師匠。マジでこの流れでやりあう気ですか？絶対おかしいですよ、これ」

「ここまで来たらやるっきゃないだろ？イオ！」

「それもそうですね。…相手側は早くさっきの羞恥を消したいみたいですしね」

イオがスッと懷から小型のナイフを二つ取り出す。どうやら本気みたいだな。

おっさんも手にナックルをつけている、おっさんは近距離タイプだったのか。

私は普段素手だが流石に今回は自分の武器を使おうと思う。

…魔力を右手に溜めて形を造形し始める。

パキパキと形作られていくソレは私の身長をゆうに超えてしまう

鎌。

黒く染まる刃は何も切り裂く。

「さて…行くぞ…」

「来…」

白男の言い終わる前に私は間合いを一気に詰め、先手必勝！鎌を一閃させる。

「ッ…」

不意をついた為、あっさりと腕が切れる。白男の腕から血がツウッと流れ落ちた。

「卑怯なッ」

白男は傷を受けたほうの手で私の腕を掴みこみ投げ飛ばす。しかし風魔法でなんなく着地。その隙にイオがナイフで急所である首を狙うがぎりぎりのところで避けられる。

「チィッ」

「くッ！」

イオに拳が入りおっさんの方向へ吹っ飛ぶがおっさんはイオを受け止める。

「イオ。もつとコンパクトに行きましょう」

「…ありがとうございます」

私は強化魔法で体の限界を高め、白男の背後に回る。反応速度の遅れた奴に一閃。血が飛び散る。

「ぐっッ!」

白男の首から血が湧き出る。

……おかしい。

はつきり言って……弱い。

もっと…楽しめると思っていた。苦戦すると思っていたのに。
あまりにも…弱いだろう。

「…やめた」

私は手の鎌を霧散させる。
見るとイオとおっさんも武器はしまっている。

「…何のつもりだ」

白男は訝しげな顔をする。

「やーめた」

「どうゆうつもりだ。殺されたいのか？」

「…気づいた、よー」

「…何？」

…多分、気づいてないのはこいつだけか。

コイツは…弱い。魔界最強と謳われたのを疑いたくなるほど。けど…わかった。コイツが強いと言われていた理由、は。

「初めましてじゃのう」

きつと最強と恐れられた者に力を魅入られたからか。

私はそつと目の前から視線をはずして後ろを見る。
そこには…。

私と同じ銀髪をした紫色の瞳を持つ少女がいた。

白男の惚れた相手であり、白男が最強と言われた理由。
少女、『虚偽炎霸導神』。

「…初めまして、大陸消滅の原因サン」

私は薄く笑みを浮かべて話しかける。

「会えて嬉しいぞ」

そう微笑む彼女は悪魔の微笑を浮かべた。

ラスボス登場早すぎだつての。台本読め。

虚偽炎霸導神（後書き）

補足：白悪魔が魔界最強と言われていたのは虚偽炎霸導神の力を借りていたからですが、その力は虚偽炎霸導神復活の際に消えました。つまり少女は10年前にすでに目覚めていたということです。

出来れば最後までお付き合いください！！

隠された秘密（前書き）

そろそろラストパートエンジン…オン！

隠された秘密

「…とりあえず、お名前は？」

「クククッ。妾はウォーと言う」

見た目は可憐な少女のウォーはそう言う。

はははー。登場早いつて、せめて白男と戦い終わってから出るものでしょ。

王道っていうのはやだけどさ。

せめて空気ぐらい読もうぜ、ウォー。

「私はフィアン。驚いたよ、あの虚偽炎覇導神がこんな少女なんてね」

「妾も驚いたの…。あの状態でそなたが生きておったとは」

「あの…すいませんが勝手に人殺さないでくれますか？白男ごときで私をやれるとおもったのか？」

「ククッ、思うてなどおらぬわ。そなたを殺せるのは恐らく妾でも難しいからのう…やっとな殺したと思えば…」

（は、話が読めない！上に噛み合っていない気がするのは私だけか！？）

「生きていたとは…驚きの限りじゃ。最もその様子では…記憶を取られたらしいがのう」

……ウォー、私の記憶力舐めんなああ……！！

いくらなんでも自分が殺される時の記憶は脳に刻みつくわ！！
いつだよ！その話！？

私は殺された記憶なんて全く無いぞ……！！？

この14年間の出来事は全て記憶している！中でも殺される記憶なんて覚えてないとおかしいものが無いなんていうことは……。

そんな出来事は無かった！！

ということになる……が！ちよつと……待てよ。

もしも……忘却魔法をかけられていたんだとしたら……！

や、やばい！その出来事は無かったとも否定できなくなる！

「あの時、まだ目覚めたばかりだったからのう。手当たりしだいに飢えを満たしたかった、そんな時じゃそなたにあったのは。ククッ直感したぞ、本気の殺し合いができるとな」

ウォーは話を続ける。顔は何故か恍惚とした表情だ、なるほど戦闘狂か。

「戦いは予想以上に楽しく激しいものであった、妾はあんなに楽しいとおもったことはない。双方血に塗れながら相對する……良き物であった」

確実に戦闘狂に巻き込まれてるよ？私かもしれないその子。

「しかし決着はあつけなかった。突然乱入してきた神とその忌々しい魔王によって強制終了させられたのだ」

「おっさん、もうちょい早くは無理だったのか？戦っていた子が可

哀想じゃん」

「うん、かなり急いだんだけどねえ。乱入が難しかったのよ、一歩踏み入れば切り刻まれちゃう感じだったから」

「その際に妾は神の牢獄に閉じ込められたが10年前に脱獄し、再びそなたを探していた」

ウォーが向ける指先の先は私。

いや待とうか。するとさっきの戦い相手は私か。

なるほどって納得できないって。記憶ないし、知らないし。

第一戦闘狂と関わるのってぶっちゃけ面倒。

「私は探されてもお前の事知らんしな」

「それはそうじゃろう。そなたは神と魔王に記憶封印魔法をかけられ、赤子に戻されていたらしいからのう」

……まさかの衝撃事実！！

「……おっさん、一から説明」

「ごめんねえ、あん時おっさんが助けたとき嬢ちゃんは8歳で体は血まみれのがたがたでかなりやばかったのよ。ま、8歳で神も魔王

も恐れる奴と戦い生き残るなんてありえなかったけど、嬢ちゃんの心にはもちろん傷跡が深かった。体も心も駄目になってた嬢ちゃんをどうしようか考えてたら、神がもう一度人生を歩みなおして貰おうってな感じで記憶封印して赤子に戻して集落に落としたのよ。魔力はその封印の副作用で大幅に上がり、身体能力もずば抜けたのよ。…それとねえ、嬢ちゃんの家族なんだけど、嬢ちゃんのこと説明したときにとっても泣いてたよ。けど家族がいると何らかのきっかけで記憶の綻びが生まれるかもしれないと危惧した神は家族と嬢ちゃんを切り離れたんだ。…嬢ちゃんは捨てられて無かったのよ、全てはウチの問題に巻き込まれちゃったせいなの。ごめんね」

意外と長かった話を聞き終えると、不思議と全てを納得できた気分になった。

すると突如、私の視界が暗闇に覆われた。

（なんだ？突然…）

暗闇となった視界の先に淡く輝く光が見えた。それはゆっくりと私に近づく。

【コンニチワ、モウヒトリノワタシ】

発せられた言葉は無機質なものだっただ。

【ワタシハアナタ、アナタハワタシ。フタリデヒトリ】

正直、言っている意味が分からない。

【アナタハイマノ、ワタシハカコノ。キオクホジ】

ああ、過去の私ってことか。にしても分かりにくい…。

【キオクウケトツテホシイ。カンケイナイケドマキコマレタ、サイ
ゴマデツキアツテヤリタイ】

巻き込まれ人生って大変だよな。

【オネガイ、コノジケンオワリニシテホシイ。ワタシミタイナギセ
イシヤ、ウミタクナイ】

本当に過去の私が疑いたくなってきた。私こんなクリーンなこと言
うか？

【綺麗ごと…そう言って貴方は笑うでしょう。でも…あなただって
本当は分かっていたいるんじゃない？】

おおっ、いきなり声質が変わったぞ。

【巻き込まれた…いいじゃない。最後まで巻き込まれてあげましょ
う…仲間、のためにね♪】

…なんかズバツと言いたいこというな。そこだけは似てるね。

いいよ。巻き込まれたあげよっか。

淡い光は一際大きく輝くと暗闇が音を立てて崩れた。

次に目を開けたとき、目の前にあるのは二人の少女が血まみれになり戦う姿だった。

（これが…過去、ね。たしかに…私だ）

一人は紫色の瞳を持ち、口角を上げている。もう一人…私は短剣を血で染めて真剣な顔つきで相対している。

「面白い！面白いぞ！そなた…ッ！人でありながら…この私に深手を負わせようなど！」

虚偽炎覇導神であるウォーは叫ぶ。

対して私の顔は、恐怖と生への執着としか浮かべていない。

この時の私はとても弱い。魔力も少ないし短剣を扱う手も不慣れといった感じた。

生き残れているのがふ不思議なくらいだ。

「もっと…もっとじゃー！」

戦闘狂スギだろ…。

ウォーは鋭いつめを構え、私に襲い掛かる。

それを私はただ呆然と見つめたかと思うと短剣で軌道を逸らしぎりぎりでかわす。

しかしその場しのぎでしかないそれは、次の攻撃には対処できずに腕の肉を抉られる。

「うッー！」

私はその場でうずまる。

馬鹿、死ぬぞ。動け…

「どうした？さっきの威勢が消えたのう…」

「そんな…わけ…無い！」

すると突然、ウォーの足元の地面が痛々しい棘へと身を変え、ウォーに襲い掛かる。

「く…ッ」

見事にクリーンヒット。

ウォーの肢体は傷だらけになる。

なるほど…少ない魔力を駆使してちまちま罠を仕掛ける…か。頭は回る方らしいな。

「ククク…やるのう、だが…」

ウォーは高速で私の背後へと回り、爪を一閃させる。爪あとに悶える私を更に切り付ける。

「うあッ…！」

背中肉はほぼ抉りとれ、筋肉の繊維が見えるほどになっていた。もう、動くだけで気絶してもおかしくないほどの激痛があるだろう。案の定、私は地面に平伏し身悶えていた。

「さて…楽しかった。そろそろ終いにしよう」

『飽きた』。

その感情がウォーの表情には浮かべられていた。
そしてウォーの爪が私の心臓を貫く。

「が…あ…ッ!!」

貫くウォーの手が赤く染まり、私の顔は苦痛に歪みもがく。

しかしそれもほんの少し。すぐに私は目を閉じて動かなくなった。
それを確認するとウォーは手を引き抜き、その場を去ろうとした。

「はあ…はあ…虚偽炎覇導神！貴様を神の名において拘束する！」

が、いきなり天空から舞い降りた神がウォーの腕を掴む。

「やりすぎだよ…。心臓が潰れちゃってる…」

同じく天空から魔王…おっさんが降り、私の死体??をまじまじと見る。

「なんだ、そなたらか…。放すが良い、妾はまだ遊びたいのじゃ」

「お前は神の牢に繋ぐ。もう…人を殺すな」

「…嫌じゃ。妾は遊びたいのじゃ。牢など退屈じゃ」

ウォーは神を睨みつける。駄々っ子か。

「いい加減にしろ！あんな子供を殺して…ッ」

「子供？ああ、そいつか。意外と良い玩具であった」

玩具？ああ？ざけんなコラ。

元の世界戻ったら私が玩具にしてやるよ、はは。

私は自分の死体に歩み寄る。すると、驚いたことにまだ生きている。ただおっさんは気づいていないみたいだが。

その私の瞳には『生きたい』の文字だけが浮かんでいた。

…私は何故そんなに生きること执着しているんだ？

……………しょうがないなあ。

私はこの世界で使えるのかも分からない、魔力を行使する。

すると魔力は難なくと使えた。どうやらこの世界に干渉することができるらしい。

私は自分の死体…ではないけどソレに精神魔法で精神を乗っ取る。

ひとまず後で傷は治してやるよ、過去の私よ。

今は、殺された…のかわかんないけどウォーに無念を晴らしてあげるよ。

とか何とか言つて本当は個人的な理由だけだ。

誰が玩具だ。元に戻ってからじゃなくて今、やってやるよ。

私の使った精神魔法は高度と言われるモノで、使えば相手の体を使うでなくて憑依する。

つまりは自分が精神体となって相手に憑依するから、自分の魔力や能力をそのまま使えると言っことだ。

ということだ。

もともと精神体でこの世界に来ていた私は私の体に憑依すると体中にいきなり激痛が走る。

（いったッ！！先、治したほうが良さそうだ…）

私は治癒魔法を通り越して再生魔法を使い、体を完璧に元に戻す。

「ちょ…ッ！君！！？」

多分急激に膨らんだ魔力と傷の無くなった私に驚いたおっさんが私に話しかける。

「…おっさん。来るの遅すぎ…」

「え…ッ？」

にこりとおっさんに微笑む。

「…おい、ウォー」

「…！。何故妾の名を…。しかも心の臓をつぶしたはず！何故傷がなくなっておる！？この膨大な魔力は何じゃ！？」

「…とりあえず黙ろうか。いっぺんに聞かれるとイライラして殺したくなる…」

「ッ！！お前は…誰じゃ！？こ、んな高度な…精神魔法……」

何か気づいたっぽい。

「私か？…そうだな、零氷大武神…と言う」

流石に本名出すとまずいと思ったので、虚偽炎覇導神にちなんで。

「零…氷大…武神？何者じゃ…妾でさえ、驚くほどのこの魔力…」

魔力は一応最大限解放してます、精神魔法の弱点その一で普段抑えている魔力は精神魔法の副作用で抑えられず漏れるわ漏れる。

多分、私の最大限解放では死人も出そうなので普段は極力抑えてます。

それでも結構あるって認識だけど。

「んと…とりあえず神さん。早く連れてったほうがいいでない？」
「バインドゲーティア」

私は魔法で超合金で作られた竜でも噛み切れない縄をウォーにきつめ。

神は呆然としている。同じくウォーも。

「はーやーくー」

「……………はッ、あ…分かった…」

急かすと神はウォーを連れてまた天へと飛び立った。

私はおっさんの方に向き直る。

改めて見ると、おっさんはまだ若くおっさんよりも青年といった感じだった。しかも中々の美形。

「やッ！おっさん。まだ若いねー」

「失礼でしょ。私はまだ24だよ、人間で言っと」

「ははッ。悪い悪い、結構驚いてな。にしても来るの遅すぎだって、死んじやっただけど？」

「ごめんねー。それでも急いでたんだよ？それより君は誰だい？」

「ふ、それは自分で確かめるんだな」

「意地悪だね」

「お前は知ってるだろ」

「…ね、どつかで会ったことある？」

「あるよ。ずっと遠くにな」

「そっか」

「…じゃあそろそろ行くな」

「うん？ばいばい」

「またな」

私は精神魔法を解除する。

するとみるみる私の体には傷が広がり、あっという間に血だらけになる。

やっぱりか…干渉の切断。

と言う事は、過去も終わりか。

【そうよ、ありがとね。私を守ってくれて】

待て、成り行き上そうなったただけだ。

【照れちゃって、さ、これで過去の出来事はおしまい。元の世界に戻りなさいな】

分かったよ。

【向こうの時間は止めて置いたから。じゃあばいばい】

スウッと景色が流れ、周りは元の世界へと戻る。
帰ってこれた。

つーか過去長かったなあ。

周りを見るとイオやおっさんが固まっている。もちろん白男とウオ
ーも。

さて、時間を解除しよう。

そして、巻き込まれた私はその渦中で最後まで踊り続けよう。
全ての終わるその時まで。

隠された秘密（後書き）

感想よろしくお願いします！

決着（前書き）

戦闘描写に関しては生暖かい目をお願いします。

決着

私は右手を前に出し、パチンと指を鳴らす。
すると時空魔法は解除されて全てが動き出した。

「…ウォー、あの時の…決着をつけようか」

私は静かに言葉を紡ぐ。

「…思い出したのか、いいじゃろう…。今度こそ黄泉の門へと送り届けてやろう」

ウォーは腰にさしたサーベルを引き抜く。

…武器ありかい。

「ふ…、それは無理だろうな。私は…生きて…遊園地は行くからな」

「クッ、遊園地じゃと？どこまでも笑わせてくれるの…。あの時は油断したが、今回はせん」

ウォーの顔に真剣さが醸し出す。

…本気かよ、うわあ…長引きそう。

私は手始めに魔力を全解放してみるか。
イオとおっさんなら耐えられるでしょ？

ドオオオオオオオオン！！！！

全解放。

辺りの草や土が抉れ吹き飛ぶ。

イオとおっさんは冷や汗を浮かべる程度。…目の前の少女も。

「さて…こつちもホンキってやつ…いつてみましようか」

私は手に鎌を形成する。今回は魔力の密度を高めて硬度ならダイヤモンドが豆腐みたいにすっぱり切れるレベルにまで固めた。

しかも付加効果でももなく刃に触れると魂を削り取れて廃人にさせちゃう機能付き！

今ならお値段なんと…とんでもなく高い*****ジュエル！！お徳だね！

…ってふざけてる場合じゃなかった。お電話は060-*****
*****！

と…心の中でふざけているとウォーが近くまで来てサーベルを振り下ろしてきた。

うわーお、あーぶねえ。

ぎりぎりでかわして、鎌を振り上げるとすっぱり切れた。

きれいなお顔に傷をつけた私はニヤリと笑う。

「ク…。不意打ちは効かぬか…中々、鎌のリーチが広いの…」

ウォーは顔の血を拭いつつ、笑っている。結構ホラーですね。

だってほら、拭ってるせいで血が取れるどころか広がって顔血塗れ。しかも笑ってるからね。

するとまたもやウォーが突っ込んでくる。

切りかかってくるかと思えば、サーベルを投げてきた。

サーベルは私に向かって一直線！しかし難なくかわすのが私です。

かわしたからサーベルは後ろにいるイオにザクっと。

なんか変な音が聞こえたけど気のせい気のせい…。

「…師匠。…恨んで、いいですか？」

後ろを振り返ると頭にぎっくりとサーベルの刺さっているイオの姿が。やっべ。

「うん、まあ…ごめん。…そ、それよりも手え出すなよ！これは私の戦いだからな！」

「だったら他人を巻き込まないで下さい。確実に止めましたよね？」

「私は無駄なことは省く主義で…」

「もういいです。聞いた俺が愚かでした」

イオは治癒魔法を施しながらサーベルを引き抜くと溜め息をついた。

「余所見をしておってよいのか？」

背後からずぶりと短剣を刺される。どこに隠し持ってたん？
背中からジンワリと痛みが広がる。

…油断した！。

「うーん。さっきから不意打ちばっか…」

「それでもせぬと勝つのが難しいからのう」

「ひとまずどいてくんね？」

魔力を固体化させてウォーを引き離す。

どくどくと血のあふれ出る箇所再生魔法を施して、傷を消す。ただ、血色に染まった服だけがその箇所には残った。

「…恐ろしいのう。再生魔法を無詠唱…、しかも魔力の固体化。そなたは本当に人が疑いたくなるのう」

「できるもんはしゃーない」

そう言っただけで私たちは距離をとりつつ睨みあう。様子見もここまでかな？

ウォーが少し揺らめき、クスリと不敵に笑う。

「では、そろそろ…本番に入るとするか」

ウォーから黒い気体が揺らめきだち、それは徐々にウォーの形を変え始める。

メキメキと音を立てて骨格を作り変え、黒く艶めく黒き翼が現れる。爪と歯はキリキリと伸びて鋭く尖り、銀色の髪は黒く染まっていく。服装も何故か白いワンピースから灰色の際どいゴスロリ系の服へと形を変えた。

すっかり天使っぽかったのが悪魔っぽいものになった。

しかもオプシオンで頭に羊のような角ありでかなり男性には需要頻度が高いと思われる。

正直、何のコスプレかなと思いましたがウケ狙いかなと言うことで納得。

心の中でしっかりと爆笑させていただきました。外にはもちろん出しませんが、そしたら雰囲気壊れて確実にスベルって。

【これが妾の本来の姿じゃ。中々に美しかろう？】

どちらかと言うと可愛い系ですよ。

【この姿を見せるのはそなたが三人目じゃ。神と魔王にしか見せておらぬ】

これっぽっちもありがたみが沸きません。

【ありがと思うがよい】

沸かないって言ったばかりなんだけど？ま、聞こえてないかー。

私はまじまじとウオーを観察し終わると魔力解放に歯止めをかける。そして、鎌も霧散させる。

【何をしておる…。妾と戦うのが恐ろしくのうたか？つまらぬぞ】

んな訳ないでしょうが。

ただ、ホンキ見せてくれた相手にホンキ見せないのはまずいでしょ？ホンキを見せてくれた相手に人としてのホンキじゃだめでしょ。だから私も見せたげるよ。

自らの強さを求め、魔力と武術を最大限に利用できることを可能とした私の最高状態。

名付けて『最終形態：アデイスヘルギティア神装焰舞鎧』

今まで一度も試したことは無い最強技。

私は魔力を最大限に外へと引っ張り出して、自らに纏わせる。思っ

たより大変だな。

纏った魔力を固定化させそのまま体に纏い、私のイメージするモノへと変えていく。

魔力を最大限外に引つ張り出したことで回りに地響きが鳴り続け、周りの地面は吹き飛び抉れ続ける。

私は魔力の固定化を完全化すると両腕と両足に鎌と同じ硬度の素材を巻き付け、体には意思で変形可能の鎌よりも更に魔力密度の濃い素材を巻き付ける。

すると私の姿は絶対に破ることが出来ない白銀の鎧で覆われる。

しかもさらに白銀の鎧の上に一瞬で限りなく溶解度の高い鉱物であるミスリルも気体にする業火を纏う。

私の姿は完全に燃え盛る人だ。…客観的に見たらかなり怖くね？

とゆうかかなりの最強装備だ。何でも灰にしちゃう炎の下には硬すぎる鎧だよ？

あ、炎はちゃんと制御してるからね。一応熱くないよ。

【…勝てる見込みが低くなったのう。そなたはどこまで人離れをしておる】

「あー…いけるトコまで、かなあ？とにかくこれでお互いホンキだよね」

【ククク…じゃのう。妾をここまで熱くするのはそなただけじゃと思っぞ？】

「あっそう。さ、殺り合おうか…」

言い終わると同時に私は地面を一蹴りし、間合いを詰めると同時に

生成した武器でウォーの腹部を狙う。

しかし、ウォーは一步引くことでかわし、間合いを取る。

【……そなた、何じゃ…その武器…】

ウォーは私の手に収まる武器を見て驚愕の表情を浮かべる。
私の手に持っているのは、

柄にヒヨコのぬいぐるみの乗ったと
んでもなくでかいフォーク型の槍。

【ふざけておるのか？】

いえ、至ってマジメですよ？ははは、ふざけてませんって。
ただこのままだとシリアス風な戦闘になっちゃいそうだったので避
けたかったです。
だって基本コメディ目指してんのおかしいでしょうが、このマジ
メな感じの戦闘。
なんか性格に合わないから雰囲気のおつ壊しを狙ったんだよ。

「冗談だって。はいはい、本命はこっち」

私は槍を霧散させると、魔力を集中させて刀身の見事な刀を作り上
げる。

これは初めて作った、けどいろいろ付加効果を付けすぎたから恐ら
く私の持つ武器の中で2番目に最強かな？

名付けて『零刀：新月紅』しんげつこう

中々、ネーミングセンス良くない？

ま、けどこっちはあくまで時間稼ぎかなあ。

「じゃ、行くよ」

刀を持って駆け出す私は魔法を使い地面の土でウォーを縛る。効果音的にはズリョオオって。

そしてそのまま一閃し、さらに蹴りを繰り出す。

しかし刀は指一本で受け止められて、蹴りも軽く止められる。わーお。

【単調じゃのう…。今度は妾から行くぞ！】

ウォーが土を弾き飛ばし、サーベルを魔法で4つに生成すると投げ飛ばしてくる。

そっちも単調じゃね？

とも思ったが今は集中集中！サーベルを4つとも指で受け止め、握力で砕く。

意外にも硬かったが無残にも散る。

サーベルを砕くといつの間にか生成していた大剣をもって突進してくるウォー。

私は刀で受け止めるとつばぜり合いに持ち込む。

【ふん…サーベルの強度は誇っていたのだがのう…】

「認識改めやがれ」

キーンっとお互いに金属音を鳴り響かせ、一旦離れるてから高速で

剣を打ち合う。

ガガガガガガガガキキイイインン！！！！

と多分常人では腕が消えているレベルでの打ち合い。達人でも見ることは難しいレベル。

金属が鳴り響きながら的確に急所を突いてこようとするウォーの足を払い、ひるんだところに刀を突くが避けられる。

「ちツ！うらあ！」

避けられたが片方の素手で頬をめいっぱい殴り飛ばす。
流石にこれには反応が遅れたウォーはそのまま吹っ飛ぶ。

煙がもくもくと上がる中に更に私は追い討ちをかけるべく、煙の中に突っ込む。

すると視界の効かない煙の中で突然腹部に激痛が走り、私は煙の中から吹き飛ばされる。

「くツ…。誘い込まれたか…」

【そんな器用なことはできはせぬよ。本能が殴れと呼びかけたのじゃ…ッ！】

殴られた腹部に痛みが走り続ける。

この様子じゃ肋骨とか内臓とかいろいろやばいかも、馬鹿力めあれ？なんか、言われた気がする単語のような…。

ウォーは口の中を切った感じで血を流してる。

頭蓋骨吹っ飛んでもおかしくなくらいの力加減だったけど…。

私はその時ふと上を見上げる。

そしてふつと口元を緩めて微笑を浮かべる。

「本当に強いな…ウォー」

【…そなたもな。妾の頭蓋骨にひびを入れるとは…。なかなか痛いぞ？】

あ、ひび入ってたんだ。それだけですむなんて頑丈だなあ。

「…そろそろ終わりにしない？戦闘だけってのは暇で飽きたし」

【同感じゃのう。ちまちまよりも一気にやるほうが良い】

うん、やっぱり気の合うところあるなあ。

けどね…ウォーの言ってる決着の付け方と私の付けたいのとはちょっと違うかも。
だって……。

「フイアーン！！持って来ましたわ」

空から響く声。見上げると…そこにはしばらく見なかった姿、アリエラ。

久しぶり♪

「見つけるのに時間が掛かってしまいましたわ。けど、言われたものは持って来ましたわよ」

降りたアリエラが手に持っているものは私が磁気狂いの森に封印的な形で置いてあったモノ。

「お疲れサマ、ありがとね。じゃ、離れてて。威力が凄いから」

私が受け取ったソレは私が人生で作上げた至上最高の傑作品。
胴体は銀色に美しく染まり、柄の部分は黒く光沢がある。
大きさは私の身長ぐらいもあるソレは…

ファンタジー最強武器：口

ケットランチャー♪

決着（後書き）

なんか次回は一方的な展開になりそうです（笑）

決着？（前書き）

最終話です！かなりむりやり感があります！！

決着？

「ははッ！いくよ！」

ドゴオオオガアア！！！

ロケットランチャーを片手に飛び回り撃ちまくり地面やら遠くの山を消し飛ばす。

【何じゃあ！？それはああああ！！！？】

ウォーは驚きの表情をしながらロケットランチャーの射影範囲から逃げ続ける。

なかなか当たらない…。

「いい加減おとなしく当たれええ！！！」

私はウォーを狙い続けて28発目。

【ぐああああああああ！！！！】

ロケットランチャーの弾がウォーに炸裂。弾は魔力で造り続けているので無限です。

「当たったか！？」

もろに炸裂したウォーの姿を確認するといろいろな所から血を流しているウォーがいた。急所は避けたようである。

【ぐっッ…。反則じゃのっ…。なんじゃその武器は…】

ウォーは再生能力があるのか切り傷などは治り血も既に固まっている。

けどダメージはしっかりと受けているらしい。

ロケットランチャー、暇潰しの産物なだけに最強だ。

「偶然産まれたものだ。中々良い威力だろ？」

【どこまで…反則なんじゃ…。もう人間と呼べぬではないか…、と
ゆうより人間と名乗るのをやめた方が良いぞ】

「失礼だな。元はと言えばお前が私を殺したりするからだろっが」

【こんなこと想像できるわけなからっ】

などと会話しながらも私は打ち続けてウォーは避け続けている。
よっぽど威力を思い知ったのか、かなり必死な様子で避けている。

…こんなことの繰り返しが数十分ほど。

はつきり言って飽きました。

だからロケットランチャーに付加効果を持たせようと思います。

「…神々を冥府に送りし地獄の沙汰。舞え、血に刻まれしその罪よ
…。…最上級付加呪文『神魔』」

ぶつぶつと呪文を唱えるとロケットランチャーがピカッと輝く。
よし、オーケー！

「終わりだ！」「神魔：威力最大チャージセット」発射！！」

ロケットランチャーから目を潰されるかもしれないほどの光が溢れ出る。

ビリビリと腕に振動が伝わり、次の瞬間！

ドゴオオオオアアアアアアアアアアアアアアアア
ア!!!!

光の塊がウォーに向かって放たれる。

腕が吹っ飛ぶほど重いッ！威力加減し忘れた！！

【グ……ッガ……アアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！】

ウォーが光に飲まれ、叫び声をあげる。

普通こんなシーンではやったか！？って思っのにとっちかと言つと
叫び声で鼓膜が！！って感じたな。

絶対世の中の主人公は叫び声を聞いて一番思うだろうよ、歓喜の声より。

あれ？私だけかな？

目の前の視界が晴れていくとウォーがまだ立っている姿が見えた。まだか？　って思うと同時に敵がゆっくりと倒れるのが王道。

しかしそうならないのが邪道であり、コメディなのだ！

：　と思つて見ていると、ウォーの体がゆつくりと朽ちはじめる。

【…っちい…。体が耐えられなかったのう…】

ウォーが朽ち行く体を見ながら呟く。
もう一度言おう、王道か！？

【できればもう少し楽しんでいたかったのう…。中々良きものであった】

待ってくれ！やめてくれ！！

今更王道街道に入ろうとするな！！もう道は戻れないところまでずれているんだ！！

頼む…諦めてくれ！！

【…最後に種明かしをしようではないか、小娘…いやフィアンよ。知りたいことを教えてやろう】

ええええ？何？マジで王道か？？

その申し出は物凄く意味分らない…。

知りたいこと？え、例えば…なんで復活したーとかなんで戦う羽目になったーとか？

聞きたいことが王道に限られるんだがー。

「…あ、えーと…じゃあ、知ってること全部で…」

うあああああ！…慣れてないよ！！…こういう空気！！？

【ふ…、いいじやろう。ではまず…妾が復活したところから教えてやろう…】

どうでもいいところから始まるんですね。ああ、聞きますよ？ふざけられる雰囲気じゃないです。

【妾は…ある日突然大きな光に包まれた。光はとても大きくまぶしかった、それは封印解除の光である事を知ったのはすぐ後。目の前に白の坊やがおった】

はい、質問です。白の坊やってアレですか？あそこで私の魔力に当てられて寝ている白男の事ですか？

白男…、男として見られてなかったんだね。完璧に子ども扱いだよ！。

【坊やは妾に世界の頂点に君臨してほしいと言ってきおった。…初めは何を言っておるのか分からず、殺そうとしてしまった。その際に殺すのを躊躇い坊やから貸し与えていた力を取り戻し、どうゆう事なのか一から説明させたところ……三界のバランスが崩れ始めていることを知った】

はい？

【文献で妾は大陸を理由も無く潰したと綴られているが、否定をしたいのう。…妾が滅ぼした大陸は瘴気で満たされ汚染されていたのじゃ】

…はい？

【理由は一人の天使が堕ちたことによるもの。その天使は…力が強大すぎた、ゆえに他の天使が気づかぬ内に自然とその一人の天使のみが人間界に溢れ出る瘴気を自らの清気で打ち消していた。…つまりその天使が堕ち、打ち消しあわれていた瘴気は一気に人間界に押し寄せ人間界を汚染し始めたことで三界のバランスが崩れ始めたのじゃ】

……えー…。

【そのことを知った坊やは一人で瘴気が人間界に入るのを妾が復活する3年間抑えていた。しかし、ついに人間界に瘴気が漏れ始めたときに妾を復活させ世界のトップに立たせることで三界のバランスが崩れるのを防ごうとした。妾ならば瘴気の進行を止める事が出来るからのう】

え…じゃあ……。

【しかし妾は復活したばかりで力が無かった。じゃから…力を取り戻すために…魔力の濃い人を襲った。魔力が欲しかったからのう、その時に会ったのがそなたじゃ】

まさか…ウォーは……。

【そなたの持つ魔力は今ほどではないが濃かった。じゃからつい我を忘れ、狩ってしまい神に捕まって妾は人間界に干渉できなくなってしまった。そのせいで汚染者が現れ、このようなことになってしまったのじゃ】

…三界を守るため………？

【これが…真実じゃ】

マジかい……。

「待ってくれ。じゃあ…お前は、ただ世界を守ろうと動いていたのが裏目に出てた…ってことか？」

【……じゃのう】

「白男は…世界を守ってたのか？」

【……うむ】

「ノヴァは………本当に、苦しんで…たつてのか？」

【坊やに体を預けた小僧か…。あやつは汚染された恋人を癒すために体を傷つけ、妾の復活に協力した…】

「…うわぁ」

マジかよ…。じゃあ本当に全部誤解じゃないか。

悪役的存在が実は世界を守るために働いてました、ちゃんちゃん…
…ってふざけるとゆうか現実逃避は中止！

全部、勘違い！！？

「ウォー！じゃあ全部…全部を守るために、お前達だけが苦しんだのかよ！？」

ウォーにもう一度向き直る。

【…それについてはノーコメントじゃ、そろそろ朽ち果てる…】

ウォーの体がボロリと大きく崩れた。

こっわ！！？

「……苦しんで、また苦しんで…果てるのか」

やばい…王道的な言葉が出てくるぞお？
なんだ…？雰囲気か！？雰囲気がこの言葉を出させるのか！？

【ふん…。それも…悪くないがな】

ウォーがバラリと粒子に成り果てる。

おいおい…、王道貫いたよ？

とゆうかさつきから私の心中と外側の言葉が大きく矛盾してるなと
思うのは私だけだろうか？

「ウォー…」

ほら、こういうの。

何？実は私って二重人格だったのか…？それとも演技の才能がある
のか？

どっちにしろ自分が恐ろしくなってくる。

「嬢ちゃん。これから…どうすんの？」

ふとおっさんの声が聞こえて後ろを振り返る。

するとイオは自分を責めているのか複雑そうな顔をしていた。

当たり前か、確実にイオのことだったもんな。あの話。

おっさんも若干苦笑い。

今まで殺戮兵器的な悪役が世界を救おうとしていたただもんね。

アリエラなんか涙目。

相手に同情かな？どこまでも優しいね。

三人とも違う思いを胸中に抱いている。

けど…同じ思いが瞳に見え隠れしていた。
それは…私のこれから言う言葉を待っている瞳。

「…戻そうか、世界を」

そう、三界のバランスが崩れ始めているのなら戻そう。

『巻き込まれた…いいじゃない。最後まで巻き込まれてあげましょ？』

いつか聞いた言葉が脳裏によみがえる。

巻き込まれたんだったら最後の最後まで付き合ってあげよう。

僅かな間、戦った馬鹿で強くて一人で抱え込もうとしたあの^{ウォー}子に。

「いいよ、そうしようか。嬢ちゃん」

おっさんが頷く。

「ええ。協力いたしますわ」

アリエラがニツコリと笑う。

「…俺に、否定する理由があると思いますか？」

イオが優しく瞳を細める。

「そんな訳ないだろう？」

「言ったはずですよ？師匠に一生ついていきます、と」

「そうだったか？」

「はい、師匠に惚れた時から」

イオが私の頬にそつと触れる。
途端顔に熱が上り始める。

「なッ……！！」

「会った時からずっと好きでした。この意味分かりますよね？俺は師匠が恋愛対象として好きなんです」

イオの無駄に整っておる顔が近づく。
流石に恋愛に興味が無いとはいえ、決して鈍感なわけではない。
面と向かってこんなことを言われればどんな意味かなんて理解できる。

「愛しています、結婚してください」

満面の笑みで言われた私の顔は更に顔が熱くなる。
もうボシユーッと煙が出ていてもおかしくない、きつと今なら頭でゆで卵がいけそうな気がする。

「イ……オ……、お前……！」

今ここで言うか！？と言おうとした言葉が突如覆った影によって遮られる。

「お返事は？」

覆う影がイオの腕の中だと気づくのに数秒。固まる私。

「師が弟子を嫌いと言う…はず無いだろう…ッ」

頭がぐるぐるぷしゅーっとして出た言葉、馬鹿だろうか？

「オーケーと言う事で受け取ります」

イオの顔が降ってきた。

というのがこの時思った事。

次に起こった事は理解できなかった。

私の唇に何か暖かいモノが触れた。

こうして弟子による『師匠捕獲作戦』は半年をかけて完遂されま

した。

決着？（後書き）

ここまで付き合っていたいただいた皆様、ありがとうございました。
コレにて終了ですが、これからは番外編を更新していきたいと思っています。

なにかご意見があればご連絡をお願いします。

本当にありがとうございました！！

番外編：その後…（前書き）

番外編一話目です。

本編で説明できなかったことを綴っていききたいと思います。

番外編：その後…

虚偽炎霸導神：ウォーが消えてから数ヶ月が経った。

今は世界の現状を神や国王と協力して直している。

もちろん私も協力しろと言われて手伝っている、最後まで巻き込まれてやることを決めたからな。

だから今日も手伝うために神界へと向かい、神に会おうとして謁見の間に足を踏み入れる。

「こんにちは、師匠。今日もご苦労様です」

だが何故こいつがいつもここに居るんだろう？

「…ああ」

あの後、私はイオを突き飛ばして逃げる形で草原から逃亡して魔界へと身を隠した。

とにかく恥ずかしかった。

それから探しに来てくれたアリエラと数日間屋敷で過ごした後、神の使いである天使に呼び出されて神界に向かった所にイオと再会。

何故か会った瞬間、異様に近づいてきた。

それが恥ずかしくも怖くも会った事からイオと会わないように今は魔界に住んでいる。

イオはどうやら特例と言う事で天使に戻され、今は元の將軍職に復帰しているらしい。

その時のイオはかなりゴネたらしいがシーマと神に押さえ込まれて無理やり戻された、とのこと。あ、お忘れかもしれないがシーマとというのは前に神界で会った餓鬼の事なんだが…思い出さなくても問題ないか。

「師匠に会えてとても嬉しいですよ。なんでも最近魔界に住んでいるとか…、俺は將軍とか変なものに上げられて魔界へ行くことが出来ないのでもっとも寂しいです」

ニツコリと笑う顔から恐怖を感じたのは気のせいだ。

「そうか、出来ればそのままその職に縛られている」

負けじとニツコリ笑い返す。

「そうはいきません。…師匠を一人にして他の男を寄せたくないもので」

スッとイオが近づく。このやり取りはこの数ヶ月間何度もあったので流石に対処法を覚えた。

「離れないと最終奥義の試し撃ちの的にするぞ？」

「…それは離れたほうが良さそうですね」

イオがサッと離れる。うん、これは使えるな。

「じゃあな。私は世界平定の手伝いをしなきゃいけないからな、お前も頑張れよ。暇があったら……見に来る」

私は踵を返しざまにそう言う。

「ありがとうございます。俺は押し付けられる仕事をシーマさんに押し付けてサボってから会いに行きます」

とんでもなく一人に多大な犠牲の降りかかる話を聞いた気がする。
どんまい、餓鬼。

恨むなら上司を恨め、私は一切関与していない。

「じゃな、イオ。…あ、言い忘れてた事があつた」

「何ですか？」

私は振り返り、イオに近づく。

「今度…遊園地、行こう」

若干赤くなつてそんな気もする顔を伏せながら言う。

するとイオは驚いたように目を見開けた後にフッと笑った。

「はい」

私はその言葉を聞くと途端に羞恥心が湧き上がり、謁見の間に入つていった。

前はこんなこと聞くのは簡単だったのになんかイオの言葉を聞いてから無性に意識するようになってしまった。

ああ、おかしい。

絶対こんなの自分じゃないと分かっているても何故か顔が赤くなる！
今度、医者に行こう…。

「嬢ちゃん！遅いよ」

謁見の間に入ると、目の前にはおっさんと神と国王がいた。

「そこで水竜の元人間天使に会っていたからな」

「イオか……。あいつ、また訓練を抜け出したな？お前が来るという報告をどこで掴むのか分からないがお前が来るときに必ずあいつは訓練を抜け出すという報告がはいるのだが？」

「うわー……。愛が深いねえ」

神とおっさんが呆れたように言う、私のせいなのか？

「そんなことよりも世界の瘴気はどうなっているんだ？この前に試した清気の集中放射の効果は？」

「その成果は上がっている。というよりイオが戻ってきたことで確実に世界のバランスは戻りつつある」

神が安堵の表情を浮かべながら話す。

「じゃあこのまま問題なければオーケーだな。なら私は魔界に戻るよ、今日はアリエラとお茶会をするんだ」

「アリエラちゃん？おっさんも誘われたよ？」

「一緒に行こうか、おっさん」

「いいわよ、おっさんどーせ暇だし」

そうして魔界に戻ろうとしたときに少しだけ忘れていた存在の国王もといオーサンが声をあげた。

「そついえばフィアンちゃんって『ルア』に似てるよね?」

ルア?

いきなりの聞きなれない単語に首を傾げる。

何のことかおっさんに聞こうと振り返ると何故か固まっている、何
いっちゃってんの?こいつ。みたいな顔をして。

神の方をちらりと見てみると神も同じような反応を示していた。

なんじゃい、一体。

「オーサン、ルアって?」

「うん?ああ…ルアってのはね……」

直後にオーサンが消えた。

はい?と思う方もたくさんいるだろうね。私も思ったよ。

正確にはオーサンが口を開きかけた瞬間におっさんと神が口を抑え
て逃亡。

なんのこっちゃい。

「…なんやねん」

「俺様が教えてやるよ!!ちび女!」

上から降ってきた声に聞き覚えを感じつつ上を見上げると神界軍
副將軍サマの餓鬼が浮いていた。

いきなり現れて何あの暴言?殺されたいの?

「……………シー…？シマ？…や、違う。……………ローマ？……………久しぶりだな、餓鬼」

「そこまで考えて分からない上に結局餓鬼って何だよ。しかも国名が混ざってたぞ」

冷静にツツコミ返しをされるとは…。

いや、まあボケたつもりはないんだよ？ほんとに分かんなかったんだよ。

「…ま、いい。この俺様がお馬鹿なお前にルアの事を教えてやるよ！感謝しやがれ！！」

「うん、分かったからさっさと喋れや」

満面の笑顔で言うと餓鬼は青ざめて、ゆっくりと話し始めた。

「…ルアって言うのはだな、昔ここにいたすげー綺麗な巫女のことだよ。ちょうどお前ぐらいの年でお前に似てた。あ、もういねえかな。何年か前に死んだんだよ。理由は不明だけど死んだって事だけは神界中に伝わったからな。そいつはすごく慕われてたから神界で追悼の儀って日があるくらいだ。とにかくすげー人間だったんだよ。分かったか？」

餓鬼は一気に話すと一息つく。

巫女なんていたんだな。なんか堅苦しそうだし合わないだろうな、性格とか。

てか何でそんだけの話でオーサンが攫われたか分からない。カムバツク、オーサン。

「ご苦労さん。今訓練だつて聞いたぞ、もう行け」

「…可愛くねー女。せっかく説明してやったのによ、礼くらい言えよ」

「ありがとう、副將軍サマ。感謝致します、ですからさつさと去れ」

「最後、命令形!!?」

「黙れ、二度と話しかけんな」

「流石に酷くねーか!?!お前!!」

「…こんなところに居たんですね、シーマさん」

突然影が降りかかる。この声はイオだ。

目の前の餓鬼はその低い声に恐怖を感じて固まっている。とゆうか若干涙目だ。

「……イオ?いえ…將軍…」

餓鬼が搾り出すように声を発する。

分かるよ、その気持ち。なんか後ろから冷気をめっちゃ感じるもん。

「訓練を抜け出した上に師匠に手出しですか?面白い真似をしますね?」

「い…や…これは…」

「問答無用です。俺と一緒に稽古を殺し合いしましょうか?」

「あ……待て……！ごめんなさい！！許し……！ちび女、助け……ッ！！」

「イオ、頑張れ」

「はい、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。しっかり躡けてきます」

「待て！！躡けるってなんだあ！！ちょッ！！ホント待ッ……」

ボタンと扉が閉まる。

あいつはやっぱりからかいがあるかもな。

「嬢ちゃん、お待たせ。オーサンはちょっと用事を思い出したみたいで帰ったよ」

奥から出てくるおっさんの頬には返り血らしきものがついてるんだが一体どうした？

神なんて手が血だらけなんだが？それオーサンのじゃないよな？

「そうか、じゃあ聞きたいんだが巫女のルアは私に関係あったのか？」

にこりと笑いながら聞くと二人は再び固まった。

「答える、おっさん……あの夜の話もどうせソレだろう？」

あの夜とは私が神界へ来て泊まった時のことだ。

「…敵わないねえ。…神」

「……致し方あるまい」

神が浄化魔法で血を消しながら答える。顔は複雑だなあ。

「…後からシーマを呼び出さねばな」

神のつぶやいた言葉により餓鬼の死亡フラグは確定となった。
よく分かったな、情報提供者が。

「ふう…。嬢ちゃん、ルアってのはねえ……」

嬢ちゃんのお母さんのよ
「」

番外編：その後…（後書き）

まさかの衝撃事実発覚です。

番外編：その後…？

「…マジで最悪」

この世の終わりのような顔を浮かべ床に突っ伏す私がそこにはいた。

「いやぁ…マジでそんなに落ち込まれちゃうと天国に居るルアが可哀想なんだけど？」

「ありえないだろう…」

「まあ、信じたくない気持ちは分かるけどさ…」

「なんで巫女とか固つくるしい奴とよりもよって血が繋がってるんだよ!？」

「あれ？そこ？」

「そこだろう！そこしかないだろう！！最悪だ、どうしてこつも嫌な血の繋がりなんだ!!」

「それ、言います…」

「今から医者に行って血を全部取り替えてくるうう!!おっさん！アリエラによろしく言っというて!!」

「待て待て待てえ!!危ないから!嬢ちゃんなら本気でやつちゃうから!!」

医者へ行こうと走り出したところでおっさんに羽交い絞めにされる。放せえええ！！巫女と血が繋がってるとかやだああ！！

絶対面倒ごとにしかならないから！！もう巻き込まれるのはやだから！！

これ話聞いたら絶対巻き込まれるフラグが立ってんだよ！！

「おっさん、それ以上そいつについて喋るなよ。フラグが立つ！」

「聞きたがったのは嬢ちゃんじゃ…いえ何でもありませんデシタ」

一睨み利かせるとおっさんは押し黙る。殺気も込めたのが効いたな。

「…話はまとまった様だな」

騒ぎが収まるのを見計らった神が割り込む。

手には浄化した筈の血が再び付いている。この短時間で情報提供者の殺害…とは末恐ろしい。

てゆうか神がそんなに血に濡れていいのか？駄目だろ。

「私はいいんだ、神だからな」

無表情で言い放った言葉は明らかに私の思考に対する返答。

また声に…？いや今回は…

「声には出ていない。思考を読み取ったのだ」

「ロケットランチャー、発射」

ズゴオオオオオオオン！！！！

瞬時に取り出した武器で神の座る玉座を神もろとも消し飛ばす。勝手に思考読むなや、駄目神が。

「くふッ…。その兵器の没収を、忘れていた…」

口から血を流し煙の中から神の登場。神々しさが欠片も感じられない。

そしてパタリと床に倒れこむ。

「神界条例法、『他人の思考を除くものにはロケランの制裁を』追加」

「了解しました」

もう神出鬼没である天下の將軍様に私は命を下す。

いつ来た、何で来た？ タイミング凄えなおい、とかいうツッコミは勘弁して頂きたい。正直私も今思ってるから。

多分部屋の隅っこの血の固まり「餓鬼を回収しに来たのだろうけど。

「血は落ちにくいから服に付けないようにな」

「はい、付かないように汚れていない部分をつまんで持って行きま

す」

「蹴飛ばしながら行った方が早いんじゃないか？」

「そうしてしまうと清掃係の方が大変かと思いますので」

なるほど、確かに。

「ふうん、じゃな」

「はい、近いうちにそちらに行きます」

イ才は餓鬼をつまむとなるべく自身の体から遠ざけるようにして部屋を出て行った。

それを見届けた私は事の傍観者と化していたおっさんに目を向ける。

「おっさん、帰ろっか」

「そうね。アリエラちゃんを待たせちゃうのも悪いし」

そんなこんなで私たちは空間を開き魔界へと帰った。

神？もちろん放置で。

けどちゃんと礼儀にならって置手紙を置いてきたよ、帰るって一言。

あ、そういえば空間に入るときに度々起きていた頭痛の理由が分かったんだよ。

興味ない？聞け。

あれはなんか人間の脳に存在する大脳って所が空間の磁気に影響を受けてたらしいからなんだと。

私だけになったのは私以外全員人外だったからね。

…なんかあんまし面白みの無い話だったな、ごめんなさい。

最近では空間内を通る際に空間内の磁気を魔力で変化させてるから大丈夫になったよ。

…以上、語り口調的な説明。

脳内で誰に説明してんだろっ？…私。

考えているうちに魔界へと到着、空気が淀んでいる。

「只今。アリエラ」

目の前にいる蓮をイメージしたと言うワンピースを着たアリエラに話しかける。

「お帰りなさいですね、フィアン。お茶の用意は出来ていますの」

「あれ？私が淹れるって言わなかったっけ？」

「…あ、その…フィ、フィアンはお客様ですね！ですので私が用意させていただきましたー！！」

何故か力説するアリエラに少し圧される。

「そ、そうか…。分かった…」

「はい！」

安堵の交じった笑顔がとても可愛い。

前々から感じてはいたけどアリエラはよく言う優良物件というやつだ。

おっさん曰く舞踏会では絶大な人気を誇っているとか。流石アリエラ。

「ではバルコニーへ向かいましょう。今日は珍しく風が良いんですの」

アリエラが私たちを中に招き入れると階段を駆け上がっていく。
…ごめん、魔界の空気ってどんより感しか分らない。風って吹いてた？

すると突然ヒュウつと渴いた音が響く。

「風が…」

「ええ、緑妖精の機嫌が良いみたいですわ。気持ち良いでしょう？
フィアン」

「ああ」

私はバルコニーに用意されたテーブルに着くと外を見る。
紫色の山が広がり、空は灰色の厚い雲。大地は痩せて荒廃している。
けどなぜか不快とは感じないところだ。

「良い景色とは言えないけどおっさんはこつゆう景色好きなのよね
え」

「同感だ」

おっさんが外を眺めながら呟く。
何故か哀愁漂うのは気のせいかな？

「フィアン、おじ様。お茶が入りましたわ、お召し上がりになって」

アリエラがティーカップをテーブルに置く。

ティーカップからはほんのり甘い香りがしておいしそうだ。

私はグイっとお茶を飲む。

味は甘みとお茶の苦味が混ざって絶妙に美味しい。

私は飲み終わりアリエラにお代わりを頼もうと思った瞬間、バルコニーの扉がバンツと開いた。

「アリエラあ！！フィアンが来ると聞いたんだが！？」

デ^{バカ}ィアンだ。

「お兄様。どうされたの？礼儀がなってませんわ、扉は丁寧に開けてください」

「す、まん？…それより……………ッ！フィアン！！」

ディアンが私に視線を移すと凄^レい剣幕で迫ってきた。
やんのか、こら。

「お前！今度は一体何をやらかしたんだ！！」

何もしてない。…いや、嘘^レだけど。

「俺をトラップに嵌めただけでは飽き足らず、更に嫌がらせか！？」

トラップ…？ああ、磁気狂いの…。

ロケランの置き場所に一人を生贄にしないとロケランの在り処に辿り着けないようなトラップを仕掛けたっけ？

アリエラはディアンを犠牲にしたのか。

「とりあえず落ち着け、何があつた？」

殴^レつて止めるのも造作の無いことだが、今は動くのが面倒くさいし…。

ドゴオッ！！

「~~~~ツ!!...話しかけてから結局殴るか!? 普通!!」

はッ!?! いつの間に手が...!

「逆に聞くがお前は私を普通と認識していたのか?」

「.....そうだな、すまん」

そこで肯定されるのもなんか腹立つ。

ドガキヤアッ!!

「つてえええええ!! 割れた!! 絶対割れた!!」

「割れてない。せいぜいヒビ程度に抑えた」

「力加減をどの程度すればこうなるって分かりきってる事が恐ろしいよ、嬢ちゃん」

未だお茶を啜っているおっさんが横から口を挟む。

ディアンは頭を押さえて唸っている。にわかに光っているところから魔法で治癒してるのか。

「それより! ディアン、用件は?」

「...ッ~~~~。コレだよ...」

ディアンがうずくまりながら一つの封筒を差し出す。
使われている紙がなんと羊皮紙!! 高級な!

しかも厳つい紋章みたいなものも入っている。
やばい、直感したって。絶対、面倒ごとだ！！！！

「貸してみ、ディアン君」

おっさんが封筒をすつとディアンから受け取り、ビリビリと封筒を破き始める。

ビリビリバリッ！ビリビリバント！！

…変な音がするのは幻聴か？

何故か封筒から炎が吹いているのは幻覚か？

「…おっさん」

「……仕込み型の魔術だねえ、コレが手紙の内容みたいよ？」

ゆらりと炎が揺らめくと文字みたいになっていく。

炎のかたどるその形は…。

『我、獣人国ノ者。汝ノ噂ヲ聞キシ者。我が国、危機』

声を上げておっさんが読み終わるとまたボウつと炎が形を変える。

『汝ノ加護ヲ。同意セシバ門ガ開ク、我が国ニ栄光ヲ』

読み終わったのか炎が消える。

「…厄介事のようにけど？嬢ちゃん」

「むろん、断る」

「のが正解だね」

「待ってください、今のはどういう意味ですか？」

アリエラが首を傾げる。

するとおっさんが要約した形で説明を始める。

「つまりね。人間界に存在する隠れた国、獣人国って知ってる？アリエラちゃん」

「はい、魔界学校で習いましたわ」

魔界にそんなんあんの！？

「獣人って呼ばれる動物と人間の間の姿をした人の国ね。その国が今危機っぽいから嬢ちゃんに助けて〜って手紙を送ってきたのよ」

「厄介事ですわね」

「そ。だからこういうのには関わらないのが一番…なんだけど」

おっさんが言いよどむ。

どうした？

「…こっちが無視できないように奴ら、コレを送ってきやがった」

いつの間にか復活したディアンが真っ赤な指輪を見せ付ける。

「これは…?」

まじまじと見てみるが特に変わった所は見当たらない。
ディアンの指に嵌っているとだけしか。

「これは…約束の指輪と言うものだ」

「ディアン君!? ソレ、嵌めちゃったの!?!」

おっさんが突然大声を上げる。

「すみません、デスト様。迂闊でした…。これは約束を破ったらその者に関わった者全てを殺す装置と知っていながら!?!」

さらつと爆弾発言投下すんな。

それ、私も危険じゃねえか。つーか何でつけた?

「お兄様!?!」

「すまない! アリエラ!! 兄ちゃん…、ちょっとなら大丈夫って思
つて…!」

ふざけんな。

そんな小さな好奇心から私の命は危険に冒されると言つのか?

「ディアン…」

「フィアン! すまなか…! …………… ツー!!」

直後にディアンが開きかけた口を閉じる。青いのを通り越して白く

した顔で。

「…一回、マジで逃げ」

魔王も怯えるほどの殺気を放出した私の手により魔界に一日中断未魔の叫び声上がり、魔界七不思議として語り継がれることとなった。

番外編：その後…？（後書き）

感想お待ちしています。

獣人国（前書き）

新しいお話スタートです。

獣人国

「????」

「おい！宰相！！この獣人国に人間を呼んだと言っのは本当か！？」

豪華に設えられた広い部屋に男の声が響き渡る。

男は目の前にいる優男風の男に掴みかかり声を荒げる。

「おや、もうお耳に…？ええ、本当ですよ」

答える男は獣人国の宰相という立場の者で腹黒として有名である。
対して掴みかかる美形の男は獣人国の王、つまり獣人国のトップである。

「俺は何も聞かされてないんだが！！どうして、人間を呼んだ！？」

「陛下にこの事をお話すればさんざんゴネると思ひまして」

「当たり前だ！！人間など汚らわしい生き物をこの神聖な獣人国に呼べるか！！」

「今回お呼びした人間はとても美しい様です。何でも人間国では噂の的だとか」

「綺麗とかはどうでもいい！！俺が醜いと思っるのは奴らの内面だ！！！！」

「陛下…、人間嫌いも度が過ぎますよ」

「ふん、嫌いなんだからしょうがないだろう。答えろ、宰相！どうして人間をここに呼んだ！」

陛下である男は息を荒げて宰相に詰め寄ると宰相がニッコリと笑った。

その笑顔はフィアンにも劣らない。つまり怖い。

案の定、陛下なる男は足を一步後ろへ下げ、たじろぐ。

「もちろん陛下の奥方となって頂く為です」

「魔界」

ズズズツ。

アリエラに淹れ直してもらったお茶を啜りながら魔界に広がる景色を見るといのは中々に趣がある。

（グラリ）

ふと椅子が揺れ、お茶が零れる。

「次動けば切り刻む」

一言、言葉を紡げばあら不思議。ぴたりと椅子が動きを止める。その様子を怪訝そうに見つめてくるおっさんが言葉を発する。

「…デースト君、哀れだねえ」

四つん這いで涙を啜りながら私と椅子になっているディアンにおっさんは視線を向ける。

これはもちろんお仕置きだ。

不当な扱い？おかしい事だ、コイツの自業自得だろう？

「おじ様、お兄様はこのくらい当然ですわ。兄の軽はずみな行動が

我が一族の恥へと繋がったのです」

アリエラが頬を膨らませて怒った様子をして見せるが、ぶっちゃけ可愛くてそう見えない。

「吸魔鬼は誇りを重んじるからねえ。そう考えると確かに軽はずみだったね」

おっさんは笑いを堪えつつ、同情したような目をする。
正反対な感情をいつぺんに表すって思えば凄い芸当じゃね？

「おっさんは笑うか同情するか選ぶんじゃないかって中間をとるんだな」

「器用でしょ？」

「とてつもなくな」

アハハと笑いあい、お茶を啜る。良いひと時だわ。

「そつえばフィアン。お楽しみのところすみませんが、獣人国の件はどうするのですか？」

私の頭から除外されていたことが思い出される。

「断ろうにも約束の指輪があるからな。今考えている」

嘘だけど。めっちゃ忘れてたけど！

「でしたら良い案がありますわ。お兄様を魂ごと消し去れ……」

「アリエラああああああ！！！？酷いよ！？死ねって事だよね、それえ！！」

椅子がグラリと揺れ、お茶が盛大に零れる。

「ディアン」

「すみません！」

ぴたりとさっきまでのツツコミが無かったかのように動かなくなる。

「…ふう。アリエラ、その案は無理だ」

「あら？どうしてですか？」

「無駄な労力は使いたくない。まだ闇魔法で気を狂わせて指輪を指から決り取り消滅させるほうが良い。指輪は持ち主の心に応じて締める力が強くなるらしいから、心が弱まり狂った頃に決るのが一番良いと思うんだ」

「それは名案ですわ！」

「まだ死んだほうがマシiiiiiiiiiiii！！！！」

またディアンが動き出す。

足で鳩尾を蹴ると大人しくなった。

「けど指輪って世界破滅級の衝撃にも耐えるらしいよ？」

おっさんのまさか発言で指輪消滅計画が崩れ落ちる。

どんな材料で作られてんの？指輪。

「じゃあ指輪消滅が無理なら指輪に組み込まれる術式解除しか方法が無いな」

「それも無理でしょ。術式解除はいくら嬢ちゃんでも3日はかかると思うよ」

「3日もあれば十分じゃないか？」

「コレ見て」

おっさんがディアンに近づき、指輪ごとディアンの手を取るとポウっと赤く指輪が光る。

その光が一つの紙を生み出す。

その紙をおっさんが読み上げていく。

『指輪の約束事

？、期限は明日とし、もし過ぎれば罰が降りる。

？、消滅は認められず、もしそのような破壊行動を感知した場合は罰が降りる。

？、獣人国内で魔法の使用は認められず、もし使用すれば罰が降りる』

…何コレ？燃やして良い？燃やしていいよね。

何このこっちにデメリットしか存在しない約束事。

飯にもお願いしてる立場じゃないの？もう脅迫に入ってるけど。

「これが指輪に組み込まれた約束事よ。ね、無理でしょ？」

「…ああ。…：獣人国、潰す」

「嬢ちゃん、それも無理だよ。滅ぼすなら簡単だけど獣人国には貴重資源が存在するからなくちゃいけないモンなのよ」

「…じゃあ、もう行くしか方法ないのかよ。絶対面倒事だろ、コレ」

「行かないと皆死んじやうからねえ」

「…：うゝ、はあ。面倒くさい」

大きく溜め息をつくとアリエラが大丈夫です、と言った。

「フィアンにこのような仕打ちをしたことは許せませんわ。獣人国に乗り込みです」

「アリエラちゃん？おっさんの話聞いてた？」

「…：そうだな、乗り込み…：違う！殴り込みだ！！」

「嬢ちゃんも乗らない！何この二人？話を聞き流してたの？」

「聞いてたさ、けどこの私に脅迫まがいの事を仕掛けたんだ。領土全域が吹っ飛ぶ事くらいは想定済みだろう」

「想定してない想定してない。魔法使わなくて誰が領土吹っ飛ばせるのって思ってるって、嬢ちゃんなら魔法使わずに出来ると思うけどね」

「安心しろ、おっさん。資源はまた違う場所で見れる」

「そーゆー問題！？いやそーゆー問題だけどさ…」

「だろう？もし資源がどうしても欲しいときは壊した後に領土だけを国外から時空魔法で元に戻す」

「あ、後の事も考えてるんだ」

「そりゃあな」

罪の無い人も助けるつもりだぞ？

死ぬのは国のトップと上層部だけだ。

「では獣人国滅亡計画を遂行しに行きますわ。獣人国への行き方は指輪が教えてくれると説明書に」

どこに説明書があつたんだ？

「計画遂行期間は約3分だ」

「短いねえ。せめてトップに会って顔だけは知っておこうよ」

ソレもそうだな。

「じゃあ遂行期間は好きなときに変更だ」

「分かりましたわ」

「イエッサー…。雰囲気的に言っちゃったけどおっさんもこの作戦内に入ってる？」

おっさんの疑問は無視してディアンを持つ指輪を説明書どおりにコンコンと3回こづく。

すると指輪から発せられる光が空間を裂き、道を作った。

「じゃあ、私から行く！」

私は裂けた空間に飛び込み、脅迫国の元へと向かった。

空間内は磁気が酷すぎるのか対処しても頭痛がする。

指輪の開け方が雑すぎる結果だ。

空間の流れに身を任せていると、大きな光…出口が見えた。

（獣人国…。出来れば犬の獣人族に会いたいかも）

密かな思いを馳せながら光に飛び込む。

すると、「ぐあッ」という声が聞こえた。

なんだ？下になんか居る。

飛び込んだ後に目に映った景色は白と黒で統一された広いが質素な部屋だった。

「どこだ、ここ」

「初めまして、お早いお着きでしたね」

疑問の声を漏らすと目の前にいる優男みたいな男が話しかけてきた。男の頭に竜みたいな角が生えていると言うことは獣人国に着いたってことね。

「ここは獣人国で間違いないな？」

「はい、ご理解が早いようで助かります。下の馬鹿にも見習って欲しいものです」

下……？

あ、なんか居ると思ったけども。

…獣人だった。優男と同じように角が生えてる。ただ、気絶してるな。

「頭の打ち所が悪かったらしいな。おゝい」

ひとまず上からどいてやり、頬をぺちぺちと叩く。

「…う。……んっ？」

イオよりかは劣るが美形の男は目を覚ます。

「お、起きた」

ちなみに私は男の胸倉を掴んだ状態。

「う、うおわあああああああああああああああ……！！！！」

するといきなり男は大絶叫を上げて後ずさった。私を突き飛ばして。

酷いな、いくらなんでも礼儀がなってないぞ。

「人の顔を見て逃げるとは随分といい度胸してる」

「だ、誰だ！？お前…人間か！！」

聞いておきながら答え分かってるんなら言っなよ。

「お前の目が狂ってなければ私は間違いなく人間だが？」

「人間風情が……！何故ここに……っ……宰相……！」

失礼な男は優男に視線を向ける。

「おや？言いましたよ。陛下の奥方になって貰うと」

なんか変な言葉を聞いた気がする。

「俺はそんなもの認めた覚えが無いしそもそもその人間はまだ子供だ……！」

「陛下が認めようが認めまいが構いません。問題ありませんし。子供といっても十分子供は産める年です」

「とにかく俺は認めない！人間、帰れ……！」

そうしてもいいがこの国を破壊してからな。

「……宰相、まずは一から説明しろ。私は国の危機と言っ事で脅迫された……しか覚えが無い」

「危機ですよ？だって陛下は今年で150を過ぎるといつのにまだ一人もお子を持っていないのです」

「ほう、で？」

「ですから巷で美人と有名なあなたなら陛下もいいかなと思ひまして手紙を送りました」

「いくつかツツコミがあるがスルーしてやろう」

「はい、で本題ですが貴方には陛下の奥方…妻になって貰いたいです」

「ここで国の破壊行動に移らなかった私は偉いと誰か褒めてくれ。」

獸人国（後書き）

獸人国を統べるのは竜人族。

獣人国？

獣人国に着いてから数分後、おっさんとアリエラも到着すると違う部屋に案内されました。

ディアン？もちろん置いてきましたよ。

お茶会の後片付けをして貰わないと。

「では改めて初めまして。ここで宰相をやっているレムと申します」

案内された部屋は客室らしく銀色が使われた豪華だが落ち着きを持たせる色合いであった。

「王、ルーマだ」

先程の男二人が自己紹介をする。

王である男は視線を逸らし、怪訝そうな不機嫌そうな顔をしていた。

「お名前は伺っております。人間国の有名人フィアンさんと魔王デスト様に夜会の女王アリエラさん。お会いできて光栄です」

夜会の女王なんて名前を持っていたのか、アリエラ。

「早速ですが本題に移らせて頂きますね。単刀直入に言うとフィアンさん、アリエラさんでも構いませんがこちらに居る陛下の奥方になつていただきたいのです」

どんだけ自分勝手？

脅迫して呼んで結婚しろって無いでしょ。

本格的にこの国を壊したくなってきたんだけど？

「…一つ聞くがお前は私の事は名前と有名人とだけ知っているのか？」

「はい、とても可愛らしいと噂を聞きました。噂どおりの方で何よりです」

可愛らしいとか殺してくださいの了承サインでもしているのかこいつは。

どんどん不機嫌度が上がっていく気がする。

「うわー…じゃあ知らなかったんだね」

おっさんが口を挟む。

その声に宰相は不思議そうな顔をする。

「嬢ちゃんが有名になった理由は容姿からじゃないって事よ」

「どうゆう意味でしょう？」

「そのうち思い知ると思うよ」

宰相は目を細め私を見つめたが、何を思ったのか鼻で笑いやがった。その瞬間、客室の窓の外でチカリと光が輝き直後に黒い煙が舞い上がる。

やば…。魔力が暴発した。

幸い、誰も気づいていないし約束の指輪も発動していない。ということは魔法が駄目なだけで魔力を行使するのはいいのか。

ちなみに約束の指輪は付けている本人が別の場所にいても効果を發揮する迷惑品。

にしても宰相め。何で鼻で笑った？

あれか？こんな小娘に何があると言った、は！みたいな？
うぜえ…。こいつ絶対腹黒笑顔キャラだよ。

「おい！レム、この俺を差し置いて話をするな。俺は妻などいらん、
まして人間など！」

今まで黙っていた陛下ことルーマが言葉を発する。
コイツは俺様絶対的キャラか…。厄介な主従だな。

「お諦めください。もう元老院の耄碌爺いどもを抑えるのが面倒く
さくなりました」

さり気に毒吐くな。

「知るか！とにかく俺はいらん！！そいつらは送り返しておけ！！」

ルーマは立ち上がると扉をバタンつと閉めて出て行った。

どうやらご立腹の様子。

さてさてじゃあコレを機に帰りましようかね、と腰を上げると宰相
が引き止めるように話し始める。

「申し訳ありません、陛下は何分まだ子供のようなお方ですから。
しかしもうそろそろ子をもうけても良い頃なのですがアレですので
…」

「確かにあれじゃあ世継ぎは期待できないねえ」

「はい、ですから無理やりにも正妃を据えてもらわなければ困り

ます」

「獣人国の中から選ばばいいのに何で嬢ちゃんに手えたしたの？」

「この国の者は欲が強すぎるのです、そんな中から王妃を選べば間違いない国は滅びます。ですから獣人国は代々人間を娶っているのです」

代々人間の血が混ざっていくにも関わらず獣人が必ず生まれるのが王族である竜の血の特徴だと風の噂で聞いたことがあるな。

「にしても嬢ちゃんってばまだ14歳だけど？」

「年齢的にはもう子を産める年ですから問題ありません」

待て、話が進んでるが私は一言も妻とかいうものになるなんて言っていないが？

お前の脳はアレか、都合の良い様に脳内変換される機能付きか。それともなんだ？トップからの誘いを断るわけ無いとも思っているのか？

「それに今回お呼びしたのは貴方方だけでなく他にも候補を呼んでおります」

「候補…ねえ」

「はい、人間国の町娘と貴族の4人を。その中で陛下がマシと感じた方を王妃にする予定なのです」

判断基準は『好き』じゃなくて『マシ』とか空しいな。

とゆうか他に候補が居るなら私帰ってもいいじゃん、いらないじゃん。

「他の候補はまだ到着しておらず貴方方が一番のご到着でした。ひとまず候補専用部屋に案内させますのでそこでお寛ぎください。時間になりましたらお呼びします」

おい、待て。だから了承してないと…、有無を言わせないつもりかこの野郎。

部屋から追い出されるように出ると外に居たメイドに案内します、と言われついていく羽目に。

なんでこーなった？私は王妃候補とやらの首振った覚えないっての。なんで厄介事に巻き込まれる？体質か、コレ。

「おい、おっさん。私には巻き込まれる呪いでもかかっているのか？」

「今すぐにも解除してあげたい呪いだねえ」

本当に呪いなら解除すれば終わるがそうでは無いのが腹立つ。

つか話を聞こうとしないあの腹黒宰相にも腹が立つ。

帰りたいよー。

(…イオと遊園地に行くと言ったのにな)

この場に居ない弟子を思い出す。

「着きました。フィアン様はこちらで、アリエラ様は隣。デスト様はそのさらに隣のお部屋です」

「何故3人とも別なんだ？」

一緒にいいじゃん。

「はい、フィアン様とアリエラ様は互いに候補同士ですので部屋は1室ずつ与えられます。そしてデスト様は今回客人としてのお部屋を与えられました」

待てイ、アリエラも候補だと？アリエラをこの国に渡す気はないぞ、ましてあんな俺様系に。

「フィアン…私、殺意が芽生えましたわ」

とつても分かるよ、その気持ち。

「落ち着け、どうせ全てを終わらせるつもりで来たんだから」

「それもそうでしたわね、本当に全てを終わらせたいです。一刻も早く」

アリエラが何か殺気立ってる。

私もそうだが貴方は妻候補ですと言われても殺意が湧くだけだよな。

「事前に話しておきますが、候補と認められた貴方方がもしも無断で城を出てしまうと約束の指輪が発動しますのでご了承ください」

なんか釘を打たれた感じ。

私たち以外に候補は4人もいるんだし帰りたい奴は帰っても良しみたいなこと無いのかよ。

「ちなみに帰りたいなど言った者は抹殺されますのでご注意ください。そもそも人間が獣人国王妃になれるだけでもありがたいのですから」

なるほど、高い誇りか。

まあ、見下している人間を招待してやったのに勝手に帰られるなんて屈辱なものな。

さつきからやたら風当たりの強いメイドはそれだけ言つと何処かに去つていった。

「さてどうする？ 作戦遂行して帰るか奴らの鼻っ柱を折るか」

「断然、後者ですわ」

「おっさんも。誇りが折られる奴らの顔を見てみたいねえ」

二人は帰る事よりも馬鹿にされた事で目的が変わっている。

吸魔鬼も魔王も一応プライドは高い方だからね。

それにしても人間人間言ってるけど、この二人は魔族だよ。

「じゃ、優先順位変更。獣人の誇りを粉々に砕いた後に領土消滅、んで帰ると」

「「異議なし！」」

いい返事だ。

「じゃあ今日はこれで解散。作戦会議はまた明日に！」

「「サー・イエッサー！」」

息ピッタリ。

廊下の前で私たちは手を固く握り合つとそれぞれの部屋に入った。部屋はもう言わずとも豪華。

クイーンサイズのもふもふベッドに構わずダイビング。体が跳ねる跳ねる。

（あゝ、気持ちい）

ごろりと仰向けになり今日の理不尽な出来事を思い返してみた。

（脅迫で呼び出されたと思えば妻候補だあ？舐めんのも大概にしろや、ボケえ）

なんかいつもに増して口調が悪くなったが気にしない気にしない。だって理不尽すぎるもの。

なりたくもないものにさせられて逃げられません、よ？

ここで何しろと？王サマの誘惑？は、ざけんな。

私をココに呼んだ事を後悔させてやる。『死』という形で。

小娘だからって甘く見るなよ？

そのままもふもふからの催眠効果でぐっすりと眠りについた。

く夜・フィアンの部屋く

フィアンがすうすうと眠る横で淡い光が輝く。
パアアアッと光は人の形をかたどると消える。
その代わりにそこには純白の翼を持つ黒髪の天使……イオがいた。

「お久しぶりです……」

そつとフィアの頬に触れると額に唇を落とす。
もぞりとフィアが少しだけ動いたが眠りからは覚めなかった。

「…まったく、貴方という人はどうして王妃候補などと言うものになっ
ているんでしょうかねえ。神界から覗いていたらそんな話にな
っててビックリですよ」

毎日毎日魔法でフィアの私生活を覗いているストーカーは少し不
機嫌そうに言う。

「獣人国にはお仕置きが必要でしょうか…」

その気になれば世界すらも滅ぼせるイオは本気でやろうかと思った。
その時フィアが「うむ…」と声を上げ、イオの方に擦り寄る。
あまりの可愛さにイオは悶絶し、獣人国へのお仕置きの事が頭から
吹っ飛ぶ。

「……っ。俺の理性を吹っ飛ばそうとしているんでしょうか…」

イオがなんとか理性を押しとどめる。

じゃなければフィアの貞操が危ない。まあ、その前に目覚めるか
けど何にせよ危ない。イオだって愛する少女が目の前にいて理性が
吹っ飛ばばいろいろと危なくなってしまうだろう。

「ふう…。ひとまず今は見守る事としましょうか。俺と離れて俺の
事を思ってくれたらそれはそれで美味しいですし」

本音が駄々漏れた。

「では失礼します、師匠……」

スウッと闇に溶け込むようにして消えたイオの場に残ったのは純白に輝く一枚の羽だった。

獣人国？（後書き）

獣人国は人間を基本カスと思っています。

妃候補

「……………うん？」

朝、目覚めたら横に一枚の羽があった、しかも純白。鳩かな？窓開けっ放しだったのか。

私は羽を小さな丸テーブルの上に置いて起き上がると浄化魔法で体中を清潔にした。

今日は何故か目がスツキリと覚めた。

普段はとてつもなく寝起きが悪いので今日は良い気分だ。……………真ん中の机に置いてある一つの手紙で良い気分が一気に崩れたがな。手紙と言うよりは置手紙で字が綴られていた。

『お早うございます、妃候補（太字）：フィアン様。
お目覚めになられましたら隣に置いてある城構造図を頼りに食堂までお越しください。』

その場で破りました。地面には無残な姿の置手紙。妃候補って字だけ何で太字！？何でそこだけ強調！！？しかも自力で食堂まで来いと！？誇りが高すぎだろ、案内まで誇りが邪魔すんのか？

（獣人国マジで誇りごと潰す！！！）

朝から物騒な決意をするなんて真似事しなくなかった。決意してから後悔するまで0・5秒。

清しい数分前の気持ちが戻ることはもう無いのか…。多分人生であるかないかのスツキリ気分は数分どころか数秒も持たずに砕け散ったことも含めて獣人国滅ぼす。

多分この場に人が居れば失神は間違いない程の笑みを浮かべるフィアンの部屋にノックの音が響く。

（フィアン？起きてますか？？迎えに来ましたわ）

アリエラだった、すぐに扉を開ける。

「お早う、アリエラ」

さっきまで浮かべていた笑みとは真逆の笑みを浮かべる。

「はい、お目覚めなら良かったですわ。……目覚めていませんでしたら私の理性も危ぶまれる危険がありましたわ」

アリエラがぼそりと呟いた後半部分が聞き取れなかったがまいっか。

「…置手紙あった？」

「はい、ふざけていますわね。つい目にした時に燃やしてしまいました」

「燃やした？火の元なんてあったっけ？」

「あら、フィアンには話していませんでしたわね。吸魔鬼の者は何故か自然を操れる能力を持っているのです、私は火の力を持っているのですわ。ちなみにこの能力があつてからこそ吸魔鬼は高位魔族なのですわ」

そいつぁ知らなかった。びっくり。…とか思ったり思わなかったり。

「流石、アリエラ」

「ありがとうございます。さて、おじ様は一足先に向かったようなので、
私たちも行きましょう」

それから私達は食堂に向かう間、獣人国の事について話し合った。その結果、お互い獣人国の印象は『滅ぼしたい程誇りの高え脅迫国』⁽¹⁾と言ふ事が分かった。

そして話している内に迷わず食堂の扉の前まで来ると少し悩んだ。蹴破ろうか、殴り飛ばそうか迷った。

普通に開けるのはインパクトに欠けるし、魔法という選択肢も今は却下。

ちて…。

ドガゴオオオオオオオオオオオオン！！！！

食堂内に響く謎の轟音、もちろん犯人は私だが。

あえて扉を壊すという選択肢を捨てて横の壁を蹴破り開通させた。

「な、何事だあ！！！！？」

中からあの俺様王の声が響いた。

焦ってる事が丸分かりだ、仮にも一国の王ならもう少し動揺を隠せ。あ、あと壁を破壊はしたけど壁から入るなんて無粋な真似しませんよ。ちゃんと扉から入りますよ。

ギ
イ
ツ
…
○

中はシーンと静まり返っている。

少し見回すと大きなテーブルの奥にはあの俺様王。横に腹黒宰相。

あとは見たことの無い女性が4人、候補とやつか。
皆さん目を開けて蒼白状態。やべえ、なんか笑えてくる。

「お早うございます。皆さん」

笑いを表に出さないように表情筋をフル活用して笑顔を作る。

「…一体、何事ですか…？」

腹黒宰相が恐る恐る口にする。

「壁が脆くなっていたみたいで少し触れたら崩れたぞ。いきなりで驚いた」

完璧棒読み。こーゆートコでの演技能力は皆無みたいだ。

「…定期点検を怠っていたのかもしれませんが…、すみませんでした」
腹黒宰相は納得し難いといった表情で言う。

「気にするな、幸い誰も怪我はしていないしな」

その気になれば壁の破片をコントロールして俺様王や腹黒宰相に当ても良かったが面倒くさいのは避けた。

「…あ、挨拶が遅れました。お早うございます、フィアン様。どうぞ席にお着きください」

私は中に入り、席へと着く。もちろんアリエラも。

（あの方々の驚いた顔、最高でしたわ）

席に着く際に耳元でアリエラが囁く。

（喜んでいただけて何よりだ、アリエラ嬢）

微笑を浮かべて小声で返すとアリエラは頬を赤く染めて卑怯です、と言った。

なんかやった？私。

「…で、では改めまして候補の6人が揃いましたので自己紹介をお願いいたしましょう」

宰相が俺様王の隣に座る女性に目配せをすると女性は立ち上がる。

「私は伯爵家長女のカジユと申します。今回、このような役選ばれて光栄の極みです」

カジユと名乗る女は中々の美人だった。オレンジ色の髪に黄色の眼と目が痛くなりそうな色を備えた人だった。

手を腰に当てて胸を張ってからの自己紹介で気の強いタイプなことが伺える。

うん、関わらないほうが吉かな。直視したら目がやられそうだ。今はなるべく見ないように思いっきり眼を逸らしてるよ。

カジユが座ると次はその隣。

「あ、私は…ティーチ…です。お…お願いします…」

おどおどした感じで合わないなと直感で悟るとまた眼を逸らす。

ちなみに一瞬だったが容姿は可愛い系。
ふわふわ茶髪に緑色の眼で、クリっとしていた。
ロリコンなら簡単に墮とせるタイプだ。

ティーチが最後までおどおどで座るとまたその隣。

「……………トリイ」

それだけ言つと早々と座った彼女はクール系美女だ。
さらさらストレートの黒髪は引き締まったボディにありえないくらい合っている。

力強い紫色の瞳は見るもの全てを誘惑しそうだ。

トリイが座るとまたまた隣、つまりは私の隣の女性が立つ。

「私はアヤカ！皆さんよろしくお願いします！！」

元氣系美少女だった、容姿はもう言わなくてもいいかな？
ま、一応説明すると薄い茶髪に黒い瞳。

関われば間違いなく面倒ごとに持つてかれそうだな。こつゆうタイ
プは絶対。

そう言つてアヤカは座ると貴方の番よ、と私の肩を叩いてウインク。
ぶっ殺されたいんか、てめえ。

私はしぶしぶと立ち上がる。

「……………フィアン、だ」

それだけ言つて座った。

隣のアリエラが次に立ち上がる。

「アリエラですわ」

で、座った。

「では自己紹介は終了ですね。それでは各自皆さん、朝食をお召し上がりください」

腹黒宰相がパチンと指を鳴らすと目の前に朝食が現れる。するよ私とアリエラ以外の女性陣は優雅に食べ始めた。私はパンを取ると食べる素振りをみせつつ食べないようにした。敵から出されたモノを簡単に口に入れるほど甘くはない。

「ね、どうしたの？ご飯食べないの？」

すると隣の元気系美少女、アヤカが声をかけてきた。

「…食欲がないんだ」

適当に嘘をついてごまかそうとすると、アヤカは大変！と言って宰相を呼ぶ。

「フィアンちゃん、食欲がないらしいんです！医務室どこですか？」

大事おおいごとにするなよ…、面倒めんどうくさいなあ、もう…。

「それは大変ですね。医務室はここを出てすぐ隣です」

「なら私が運んで行きますわ。フィアン…」

アリエラが私の手を掴むと食堂を出た。
そしてその瞬間。

「「面倒くさあああああ！！」」

一緒に叫んだ。

「廊下の真ん中で何してんの？お二人さんは」

すると食堂にはいなかったおっさんが片手に一枚の巻紙を持ちながらそこにいた。

「おっさん……」

「廊下でさわいじゃ駄目でしょ、嬢ちゃん。今朝食中じゃないの？」

「アレ以上あそこにいたら暴走する」

「うん、なにがあつたか知らないけど暴走はシャレになんないからやめよーね」

おっさんが軽く苦笑する、なんかいつもと違う。

「おっさん、その紙なんだ？」

「あゝこれね……。部下から帰ってこないとぶっ殺すって」

地味に怖い部下だな。

「とゆーわけでおっさん帰るね、マジでご立腹の部下を適当にあし

らったらまた来るよ」

おっさんはそう言う去何処かへ去っていった。
あしらうに遊んでイジる、部下が哀れだなあ。

「フィアン、おじ様の直属の部下って確かお兄様…」

ディアンならどうでもいいや。バイバイ。

「ま、そんなことどうでもいいですわね。フィアン、これからの事で少々お話したいことがありますわ」

「なんだね、言って見たまえ。第一計画遂行一人者のアリエラ君」

「はい！やはりこの国は早く滅ぼした方がいいと思うんですわ」

ほう…？

「さっきのアヤカとかいう小娘ごと」

激しく賛成だ。

「フィアンに気軽にちゃん付けなど羨まし…コホッ、もっての他ですわ」

何故私を理由に挙げられたのかは不明だがまあ私も別に消していんじゃないかなことは思ってたし。

「分かった、じゃあ一先ず誇りの砕き方から模索し始めよう。奴らの誇りを粉々にするぞ」

「分かりましたわ。では聞き込みでもしましょうか？」

「…そうしてくれ、私は書物でも読む。書庫の場所はどこだろうか」

「書庫ならあっち、綺麗なお嬢さん」

きよろきよろと廊下を見回していると、イオ並みに顔の整った白髪男が教えてくれた。

「ありがとう、親切だな」

「困っている人を助けるのは当たり前だからね」

そう言うと男は去っていった。彼には白いふわふわな尻尾があった。

「書庫の場所も分かったし、私は行ってみる」

「はい、私も聞き込みをして来ますわ」

そうして廊下で別れた私たちは計画の第一段階に入るのであった。ぶっちゃけ誇り砕く↓国滅ぼすの二段階しかないシンプル計画だけだ。

妃候補（後書き）

4人の候補登場です。

皆美人だけど一番目を引いたのはフィアン自身。

一番年下だし。

ちなみにカジュは19歳、ティーチは17歳、トリイは21歳、アヤカは16歳です。

妃候補？

はいドン、やって来ました。書庫です。

本が棚にたくさん並ぶ場面がひたすら続きます、好奇心が沸いてきた。

何を隠そう、私は本が好きだ。

本は人類の生んだ偉大な文化であり、宝だと思う。

特に今まで読んだ中ではやはり〇〇先生の『自伝本』は良かったと思う。

竜と戦ったり王を脅したり世界を10分の1ほど吹っ飛ばしたなどが書かれていた。

中々の武勇伝に感激して私もやってみようとしたらイオに全力で止められた。

…こほん、話が逸れた。

書庫に来た私は一先ず獣人についての本を漁った。

そして眼に留まったのが『獣人の誇り』という本。

なんと都合のいい、まさしくこの作戦のためだけにあるような本ではないか。

私はその本を取るとカウンターに持っていく。

「コレを借りることは出来るだろうか？」

「出来るよ、どうぞ」

顔を上げた書庫の管理員は先程廊下で会った白髪美形男。

「やあ、私はここの管理員のシエ。よろしくね、フィアン嬢」

「…ふーん、よろしく」

何故か名前を知られていた、誰だ情報漏らしたの。

「君、結構有名だから。僕が人間国へ行ったときにそこら中に君の貼り紙や噂があつたよ、零氷大武神サン」

「…知ってるのか」

なんで知らず知らず心の声が漏れる？

「獣人は基本人間なんて興味ないけど水竜倒した方に興味無いとかは言つてられないしね。ただ僕はたまたま人間国で知っただけだからこの国の者は君の事なんて知らないと思うよ」

「…ふーん？」

「ああ、陛下に言つつもりは無いから安心してよ」

何を安心？あ、計画に支障をきたすかもしれないからか。

「じゃあね、また」

白髪男は手をヒラヒラと振った。また…か、この一冊以外に興味は無いからいいか。

私は手も言葉も言わずに書庫を出て行つた。

「初めまして、フィアンさん」

すると目の前に気の強い系美人、カジユがいた。

関わりたくないというか直視したくないランキング一位のあなたが何故ココへ？

あ、本か。よさそうな本はあったぞ、良かったな。

「初めまして」

下を俯いて挨拶するとその場を去ろうとした。

「お待ちなさい。お話があるのです」

高飛車な言い方にカチンときたが足を止める。

「はい？」

なるべく見ないように背を向けたまま返事をする。

「…話をするのですからこちらを向くぐらいしたらいかがです？親に習わなかったのですか？」

生憎ですが捨て子です。…あれ？捨て子…？

「ま、庶民は礼儀がなっていないのでソレを考慮して差し上げましょう」

ヤバイ、殴りたい。

庶民舐めんな、お嬢様が。

ぶるぶると拳を震わせて我慢する。

「話と言うのは単刀直入に言えば陛下に近づかないで下さい。この

国の王妃となるのは私です、庶民風情が目障りです」

近づくなど言われなくともそうしたいですよ。けど近づかないと計画遂行できないし。

「つか庶民庶民さつきから五月蠅い。」

貴族なんて庶民がいなければ成り立たないくせに、自立すらもままならないくせに。

「りょーかい」

適当に返事を返して足早にその場を去る。

後ろで高く笑い声を上げる女はこの国ごと葬り去ろうと固く誓った。どんどんブラックリストが増えていく。

機嫌が絶不調なまま部屋に戻ると本を読もうとベッドに寝転んだ。

「フィアン!!」

するとアリエラが扉を乱暴に開けて部屋に入ってくる。

「どうし…」

「ここの候補の女共は何なんですの!? 全く持って不愉快ですわ!!」

声を荒げるアリエラ。駄目だ、聞く耳持ってねえ。

「カジユとかいう女は牽制してきますし、ティーチとかいう女は遠回しに嫌味を言ってきますしトリイとかいう女は睨みつけてきましたわ!! なんて嫌な女共ですの!?!」

アリエラの方には3人も来たらしい。

「つかそれアリエラが美人過ぎるからでしょ？」

確実に候補の中で一番綺麗なアリエラだし、焦ったんじゃないの？
ブラックリストに他の二人も入れとくか。

「そーかいそーかい。それはいかんね」

「腹が立ちますわ！！いくらフィアンが可愛いからといってもあそこまで露骨に嫌味を言うだなんて！！」

あれ？話の方向おかしくない？？

「確かにフィアンは容姿も可愛いくてしぐさも最高！羨ましがるのは分かりますが腹が立ちます！！あのメス豚共！！！」

待て待て、何故私が引き合いに出される。

まさかとは思うが私か？私の嫌味をいつたのか？

「フィアンの悪口を私の前で言うなんて最悪ですわ！！」

私かい！！？

「なんで私！？」

「そりゃあフィアンは可愛いですし、一番若いですから」

一つ、前半附に落ちない。

可愛いってお世辞にも程があるよ？

髪の毛はぼさぼさなの自覚してるし、目つきは悪いしね。

それに〇〇先生の『褒め言葉はたいていお世辞だろうが！コンチクシヨー！』という名言もあるからな。

「とにかく！あの女共は許せません！全てと共に葬り去ってやりますわ！」

既に燃え上がっていた計画への炎が更にヒートアップ。

だんだん部屋が熱気に包まれて、アリエラの全身から炎が……リアルに……？

「アリエラあ！？」

「ふふ……ふ……吸魔鬼の友を侮辱したこと……地獄まで悔いなさい……あは……は」

なんか変なスイッチが！？

「落ち着けえい！！」

スパコンと頭を本で叩く。

うきゅ、と可愛い声を立てて炎と共に意識も失ったアリエラをベッドに移送。

一件落着。

「……アリエラは感情が高まると炎を発する、と」

一つ、教訓を学んだ。

落ち着いたところで本を読もうとページをめくるとノックの音が聞こえた。

……読書の邪魔が多い。

「はい…」

（これから中庭に集まるようにとご連絡がありました。案内を致しますのでここを開けてもよろしいですか？）

「はい」

ガチャリと扉を開けて入ってきたメイドさんはなんと猫耳をつけていた。

萌え要素の一つをいれるとは…。

「ではご案内を……アリエラ様が何故ココに？」

「アリエラは行けそうにないからいい。行くぞ」

「あ、はい」

軽く睨むと青ざめたメイドさん、やりすぎた。

「では…こちらです」

メイドさんは私についてくるように目で促し、部屋を出た。そして目的地に着くまでの間、なんか話し始めた。

「本日は自己紹介や顔合わせ、それに自己披露というものが行われます。これからして頂くのは自己披露です」

自己披露って…、ようは自分の長所をアピールってこと？

「この国で一番価値を持つのは己の強さです。ですからこれから候補の方々には強さを競って頂くのです」

…死人が出、ゴボゴボツ。温室育ちのお嬢様らから少し不慮の事故が起きそうだ。

「ルールは相手が戦闘不能になるまで続けることと、死人を出さないことです。武器は木製の剣です」

うわ…、力加減考えないときついな…。

「フィアン様の対戦相手は年の近いアヤカ様です。アヤカ様は剣術がお得意と聞きましたのでお気をつけ下さい」

アヤカ…、元気系の。…適当に遊んで早く本を読もう。

「…アリエラが不参加だけどいいの？人数合わないよ」

「構いません、ティーチ様も不参加希望をなされました。あくまでこれはお披露目。王妃になりたくない方は参加しなくてもよろしいと言われています」

おっとり系はいかにも戦闘には向いてなさそうだしなあ。
つーか出たくないでいいんなら私も出たくないんだけど、とは言えない。

最後の言葉で若干声が低くなった。怒気が籠ったし。
誇りか？また誇りか？どんだけ怒りの沸点低いの、人間見下しすぎでしょ。

「着きました、こちらです」

いつの間にか目の前には緑のたくさん広がる空間が。上を見上げれば空も見える。

ここが中庭っぽく、前にはあのカジユとトリイ、アヤカ。そして腹黒宰相と俺様王がいた。

5人のいる場所は比較的緑が少ない広い空間だった。

「こんにちは」

一応会釈と共に挨拶をする。

するとトリイとアヤカは挨拶を返してくれたもののカジユはそっぽを向いた、…むかつ。

「では揃いましたね、早速始めましょう」

メイドさんからなにやら耳打ちされた宰相はパンパンと手を叩いて言った。

すると周りの景色が一瞬にして変わる。

周りの緑が消え、いつの間にか回りは土色。

ワアアアッ！！と耳に響く歓声。

少し上を見上げると、360度方向全てが人だらけ。

理解完了、ここは闘技場みたいな場所でその中央に私たち。

国王と宰相はちゃっかり一番高い観覧席みたいなところへ移動している。

なるほど。ここで闘い合え、と。

『レディースエ〜ンジェントルメ〜ン！！お集まりの皆様、ついに役者がそろいました。この方々が人間国でも優良株の者達です！！今日はそんな彼女達の暑い死闘をご覧になりましょう！！！！』

キーンとする程の音量で叫ぶ司会らしき獣人が観客に向けて煽るような言葉を出した。

ちょ…もうちよい下げてボリューム。犬の獣人さん！

犬耳はすごい可愛いけど男でそれをつけてると正直似合わないぞ。

『まず最初は…！！気高く美しく…！その言葉から産まれたような絶世の美女！カジユさん…！！』

司会の言葉にカジユは満足げに頷く。

観客席からはウオオオオオッ！！と雄たけびが聞こえる。

『そして、対する相手は…あの！クールビューティー女神…！その切れ長の瞳は罪すぎる…！トリイさん…！！』

また歓声が大きく上がるがトリイは無表情を崩さない。

そんなトリイの様子をカジユがギリつと爪を噛んで忌々しそうに見ていた。

『さあ、絶世の美女同士の対決…！他のお二方はフィールドからご退場をお願いします』

司会の指差す方向に扉があり、私とアヤカは扉から出た。

中は控え室みたいなもので、簡易的なベッドとテーブル椅子が用意されていた。

…どっちも小汚いが。

私は一先ずテーブル椅子に座り、持ってきた本を読もうと懷から本を取り出す。

「ねえ、フィアンちゃん。お菓子があるよ、一緒に食べない?？」

すると本日3回目の読書の邪魔、アヤカが手にチョコやキャンディを持って寄ってきた。

…本を読ませろい。

「…食べる」

が朝食を食べていないせいでお腹の中は空っぽだ。

しかも子供の好きな食べ物定番であるチョコとキャンディとあらば食べないわけにはいかない。

…え、朝はあんなに警戒してたのに今は油断しすぎて?

別に朝は食べたくなかっただけで私に毒を盛ろう盛らまいが死にやあしないもん。

「うん、どうぞ!」

アヤカは満面の笑みでお菓子を差し出した。

私は軽くお礼を言ってチョコを頬張る、甘い…。

「ねえねえ、フィアンちゃんってさどこ出身?」

「お前は?」

「ん?あたしは…地球…ってどこ…なんだ」

「ふん、異世界人か」

「え!?!なんで分かったの!?!?」

なんでって…。逆に聞くけどこの世界に無い地名言われたから当たり前だろう。

「女の勘…とかなんとか」

「ふわ〜すごい、フィアンちゃん」

アヤカは眼をキラキラさせる。

「どうやって異世界から来た？」

「分かんないの、気づいたら草原にいたから」

草原？……………まさかね。

「帰れないのか？」

「うん…、今は帰る方法を探してるとこなの。偶然近くの村の人に助けて貰って獣人国にいけばなにか分かるかもって言われたから」

「帰れるといいな」

村と草原という単語に何処か引つかかったが振り払った。

アヤカがうん！と笑顔で言つと突然扉の外から揺れるほどの歓声が巻き起こる。

決着がついたようだ。

さて…どっちが勝った？…………だいたい予想はついてるが。

妃候補？（後書き）

次回はフィアンVSアヤカです。

大会

『勝者は……なんとトリイさんだー！ー！！華麗な剣技で見事に勝利を掴みとったー！！！！』

扉の外から聞こえた司会の声は私の予想を的中していた。

あのトリイという女は確実に人と戦った事がある瞳をしていた。

武術でも習っていない限り、あの人を見定める様な瞳はできない。対してカジユは箱入り娘。

強がってはいたが瞳の奥は人と初めて戦う事の恐怖が映っていた。

「ふわ……。カジユさん、負けちゃったんだ」

隣で面食らった顔をするアヤカはまだお菓子を食べている。

「次は私たちだろう、行くぞ」

私は扉に近寄る、すると外からまた司会の声が鳴り響く。

『では、皆さんお待ちかね！次の対戦は……微笑む笑顔で虜にした男は数知れない！！見てると守りたくなる、女の中の女！！アヤカ！！！！』

アヤカは恥ずかしいと顔を手で覆いながら扉から先に出た。

『対する相手は最年少！！碧い瞳で心はいとも簡単に射抜かれる！！銀の髪とのコントラストは最強、ファイアン！！！！』

……なんて恥ずかしい紹介だ。

アヤカの恥ずかしさがとても分かる。

私は至って無表情を装いつつ、扉を開け放つ。
その瞬間、ワアアアアと耳に大歓声が響き、少し驚く。

『さあ、お二方よ。剣をお取り下さい!!』

ヒュウウつと空から降ってきた木製の剣が地面に突き刺さる。

しかも手前30cmあたりと、物凄く無駄な技術で凄い技術だな…。
私は木製の剣を取り、軽く振り回す。

……予想以上に軽い。

『おおツ!!ファイアン選手、物凄い速さで剣を回している!!これは試合に対する熱意が感じられますね』

ええ…?いや、軽く振っただけ…。

『では!!ルールの確認です!!くれぐれも相手を重症にまで追い詰めないで下さいね、相手の武器破壊か戦意喪失が認められた時点で試合は終了です』

私は武器を振り回すのを止めて、コンコンと指を弾いて叩く。

ぱきつ。

………?

なんか変な音がしたけど気のせいかな??

とやっ。

………?

なんか剣の先が……………っ!?

目線をすーっと下へ下げていくとそこには武器の折れた先が落ちていた。

なっ!何故!!(原因は100%貴方の馬鹿力です)

なんか変な声がエコーしてきた!!?誰!!?

っ!か原因私!!?軽く小突いただけだけだっ!?!?

「すみません、何故か木刀が折れました」

仕方ない、素直に申請してこの試合を辞退しよう。

『おおーっ!と!!何故か戦う前からハプニング発生だ!!管理員、すぐに代え持つてきて!!』

おいおい、代えあんのかい。

(すみません、先程トリイ様の攻撃で武器庫がやられ武器が全滅なんです)

(なにイ!!じゃあ騎士訓練用もか!?)

(はい、代えが存在しません。あるのは真剣が2本だけです)

(…………しょうがない、今回は特別で真剣勝負ということにしよう!!)

(分かりました)

丸聞こえですけども!?

トリイさん?あんな何したのさ。そして真剣2本都合よすぎでしょ、

なんでその2本だけ残った!?

『ええーっ、急遽今から木刀ではなく真剣勝負にしたいと思いますー!』

えええッ!っつと観客席から声上がる。

うん、説明無しでいきなりそれは誰だつて驚く、耳の良い私にはばつちり聞こえてたからいいけども。

目の前をちらりと見ると、アヤカは戸惑った様子。うん、ごめん。

『黙れ、外野!!こつちにだって都合があんだよ!!』

司会の怒った様子に観客席は静まり返る。

司会さん、それ本性?

『…ごほん、失礼。皆さま、静かにお願いいたします!!願わくば私語も慎み下さい!それでは、選手二人に真剣が渡されます!!』

すぐに本性を隠した司会だったが、既に時遅し。

観客は全員司会の言葉がこう聞こえただろう、『黙れ、これから喋ったらどうなるか分かってんのか?』風に。

私はそんな事をしみじみ思っていると白いコートに覆われた人から輝かんばかりの真剣が渡された。

ずっしりとした重さが丁度良い。

長さが50?ほどの剣には『guard faiter kent
o』と書かれていた。

おい、大丈夫か。明らかに人の名前入ってんぞ。

『では……渡されましたね。…それでは……開始!!』

カーンとゴングが鳴らされる。

しかし、私とアヤカは動かない。…少しは武術の心得があるみたいだな。

この勝負…、先に動いたほうが負ける！！

…なんて事を毛ほども思っていない私は剣を構えてアヤカに向かう。

もちろん、普通…の人間の速度で。

アヤカは真剣を前に出して私に振り被る。

そこそこの速さで振り下ろされたが難なく剣でいなし、間合いを取る。

「私の上段を避けるなんて…やるね、フィアンちゃん」

うん？まあ、速かったけどそこまで…。私には止まって見えただけであつて。

つーか異世界人ってどんなんだろうと思って決着つけないであげるけど意外とこんななのかな？

ガキーン！

アヤカが間合いを詰め込み振りがぶるが剣で受け止める。

現在鏢迫り合い状態。

「…意識が逸れたところを狙ったはずなんだけど…」

「悪いが反射神経だけはいいいんだ」

「…聞いてもいいかな？フィアンちゃん、トト村出身なの？」

その時心臓が大きく跳ねる。

トト村：、久しぶりに聞くその名は私が迫害を受けた村。

何故、アヤカが知っているのか不思議と感じたが私は一先ず無言を貫き剣を大きく弾く。

再び間合いを取った状態でアヤカが口を開く。

「何も答えない所を見ると本当なんだ。貴方が……………銀色の悪魔なんて」

はいストーップ!!

うん、待とうね。何がどうしてそんな変な名前が出てきた？

「あんな優しい村の人達を……。どうして!？」

なんか幻聴聞こえたー。優しい??すいません、私の知ってる村とはかなり異なります。

「答えてよ!!どうして村を襲ったの!？」

いや、流石に死にそうな程に追い込まれたんで。正当防衛ですけど? つーかやつぱりこいつが助けられたのはあの村だったのか、何吹き込みやがった?あいつら。

「村長さんを初め、みんな貴方の事を心配してた…。どうしてあんな事をしたのって」

自分の胸に手当てて考えろ、鳥頭どもが。

本当に分らないようだったらもう一度再現してやるよ。

どんだけいい子ぶってる?脚色しすぎだから。

「どうして!?!？」

……ああ、気持ち悪い。

村人には不快感を抱くが、訳の分からない言葉を鵜呑みにして正義感を振りまくしか能の無いこいつには吐き気すら覚える。
気持ち悪い……。

「……逆に聞く。どうして私が悪者扱いになっているんだ？」

「…え？」

「質問しているのはこちらだ。どうして私が悪者扱いになっている？」

「そ、それは…あなたが村を…」

「襲ったのは事実だ。だがどうして私が悪い？」

「そ、そんなの…！」

「…上辺だけしか見て語れない奴が調子に乗るなよ？」

「ひッ…！」

「正義を語っている自分に酔いしれるしか能に無い奴がよくも堂々と正義を語れるものだ。いつから正義はこんなにも廃れたんだろっ
な」

「…あッ…！」

一歩一歩近づくとアヤカは青く染まった顔で下がる。

「もう遊びはやめる……。………終わりだ」

私は音速を超えた速さでアヤカの後ろに回りこみ、首に一発入れて気絶させる。

がくんと倒れこむアヤカをそのまま見つめ降ろし、司会の方をチラリと見た。

何故か司会は顔が蒼白になっている、見れば周りの観客も蒼白になっている。

…殺気を無意識に出していたのか？

『……。あつ……。け、決着……。が着きました……。！……勝利、は……。ファイア
ン……。……選手……。です』

司会は戸惑いつつも試合の締めを行った。

私は後ろで慌てて運ばれるアヤカを一瞥し、控え室の方へと戻る廊下の途中で呼び止められる。

「怖いわね、アレだけの殺気を放つなんてプロの殺し屋でも出来ないわ。流石……。というべきかしら？」

トリイだった。

「……その様子では私が誰か知っている、か」

「ええ、もちろん。それでも私の父は騎士団団長で貴方の熱烈なファンなのよ」

口元がヒクリとひき付く。

「…嬉しくない情報だ」

「でしょうね。けど事実なのよ、ということでサインをくれないかしら？」

「遠慮する」

「酷いわね、サインくらいいいじゃない。父も私も貴方のファンなのよ」

待て、今私もって言った？

「噂を聞いててとっても興味を持ってたわ。まさか今日会えるなんて夢にも思わなくて緊張して上手く話せなかった。プロマイドで顔は知っていたけれどいざ本物を目の前にすると存在感が全然違うんですもの！ああ、そのしてもすばらしい殺気だった…」

何故か恍惚とした表情で語りだすトリイに少し戸惑う。

キヤラ違え…。

「本当なら貴方の圧倒的な力を私が受けたかったのに…！あの小娘にその役を取られて私はとても悲しかったわ！それにあのアリエラとか言う女もフィアン様にべつとりしてて羨まし過ぎた！カジユなんて女の相手をしたくも無いのにして小娘がフィアン様の相手をしたなんて考えたら闘技場の中で暴れまわっていたわ」

武器庫破壊の原因それ？

てゆーかそろそろ離れていいかな？なんか永遠に続きそうな感じがする…。

私はまだぶつぶつ呟くトリイの傍をそつと離れて音速を超える光速

に近い速さでその場を去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7721w/>

弟子による師匠捕獲作戦

2011年11月13日09時15分発行